

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26



1996年5月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26

1 9 9 6 年 5 月

奈良国立文化財研究所

凡　　例

- 1 本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1995年1月から同年12月までにおこなった藤原宮跡藤原京跡および飛鳥地域の発掘調査の概要報告である。1994年度の調査で未報告分については本書に収録した。各調査の執筆は、原則として各発掘区の調査担当者がおこない、各遺物整理担当班が支援した。自然科学的分析は村上隆がおこなった。写真は井上直夫が担当し、宮川伴子が整理した。調査そのほかに関わる庶務は、櫻井雅樹・木質貢志・吉岡佐和子・松本誠がおこなった。
- 2 発掘調査一覧表には、1995年度の調査地をすべて示すとともに、本書に収録した1994年度の調査地を再録した。なお、各寺院では年度毎の通し番号を次数としてつけた。
- 3 発掘遺構図に用いた座標値は、平面直角座標第VI座標系によった。高さはすべて海拔高(TP)で示す。
- 4 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、『奈良國立文化財研究所年報』を『年報』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』、『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』を『右京七条一坊報告』と省略した。
- 5 遺構には個々の遺跡もしくは大地区割ごとに一連の番号を付け、番号の前に、その種類を示す、S A (塀)、S B (建物)、S D (溝)、S E (井戸)、S F (道路)、S K (土坑)、S X (その他)などの記号をつけた。地区割りは『概報23』参照。
- 6 7世紀の土器の時代区分は飛鳥I～Vと表す。詳しくは『報告II』pp.92～100を参照されたい。
- 7 第79次調査の弥生人骨についての分析を、京都大学理学部の片山一道氏に依頼し、ご寄稿いただいた。また、花粉分析および寄生虫卵分析を、天理大学附属天理参考館の金原正明氏と古環境研究所の金原正子氏・岡山邦子氏に依頼し、その結果についてご寄稿いただいた。第80次調査の井戸井および本薬師寺1994-2次調査の建築部材の年輪年代測定を、埋蔵文化財センターの光谷拓実氏に依頼し、その成果を掲載した。さらに、本薬師寺周辺の微地形分析を、大阪府文化財調査研究センターの河角龍典氏に寄稿していただいた。
- 8 本書の編集は部長猪熊兼勝の指導のもと、花谷浩がおこない、伊藤敬太郎が補佐した。

飛鳥藤原宮跡発掘調査部1995年度現場班

1994年12月～95年3月		4月～6月		7月～9月		10月～12月		1996年1月～3月	
川 越 俊 一	松 村 恵 司	火 淳 一 郎	川 越 俊 一	黒 崎 直					
橋 本 義 则	上 原 真 人	深 澤 芳 樹	花 谷 浩	千 田 刚	道				
花 谷 浩	島 田 敏 男	橋 本 義 则	藤 田 盟 児	西 口 寿	生				
藤 田 盟 児	伊 藤 敬 太 郎	佐 川 正 敏	荒 木 浩 司	近 藤 大	典				
村 田 和 弘		羽 鳥 幸 一							
荒 木 浩 司									

表紙カット：藤原宮西方官衙南地区（第79次調査）の祝符木簡符籙「羅壠九星」

目 次

本 文

1995年発掘調査一覧表	2
藤原宮の地区区分について	3
I 藤原宮の調査	
1 内裏東官衙地区・東方官衙北地区の調査	第78次・第78-7次 5
2 東方官衙南地区の調査	17
A 第78-1次	B 第78-5次
3 西方官衙北地区の調査	19
A 第75-14次	B 第78-4次
4 西方官衙南地区の調査	第79次・第80次 20
A 上層遺構の調査	B 下層遺構（四分遺跡）の調査
5 西南官衙地区の調査	41
A 第77次	B 第75-18次
II 藤原京の調査	
1 左京八条四坊（日向寺跡）の調査	45
A 第75-17次	B 第78-3次
2 左京十二条三坊（雷丘北方遺跡）の調査	第75-16次・第78-8次 47
3 右京二条二坊の調査	第78-6次 57
4 右京七条一坊の調査	58
A 第75-15次	B 第78-2次
5 本薬師寺の調査	62
A 1991-2次	B 1994-3次
III 飛鳥地域の調査	
1 水落遺跡第8次調査	77
2 飛鳥寺の調査	82
A 1995-1次	B 1995-2次
3 奥山久米寺の調査	1995-1次 83
4 坂田寺の調査	1995-1次 87
IV 発掘余録	
1 有徳の僧か經典か—雷丘北方遺跡の墨書き瓦	91
2 藤原京山上鋳製人形の一例	92

図 版

PL.	PL.
1-1 第78次調査区全景	5-1 第75-16次調査区全景
-2 先行条坊四条々間路	-2 第75-16次調査貯水施設 S X3615
2-1 第79次調査廻S A8430と井戸	3 第75-15次調査区北半部
-2 四分遺跡外濠 S D8436	6-1 本薬師寺1994-2次調査区全景
3-1 第80次調査区全景	-2 下層遺構と参道
-2 第80次調査井戸 S E8470	7-1 水落遺跡第8次調査全景
-3 四分遺跡木道 S X8495	-2 石組斜行溝と石敷帯
4-1 第78-1次調査区全景	8-1 奥山久米寺講堂の礎石出土状況
-5 第77次調査区全景	-2 坂田寺1995-1次調査石垣 S X230

Tab. 1 1995年発掘調査一覧表(1)

調査次数	調査地名	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
藤原宮 75-14	5AJK-C	70m ²	95.01.23 ~01.27	権原市繩手町192他 (宮西方官衙北地区)	権原市	歩道拡幅	橋本 義則	19
75-15	5AWII-P	300m ²	94.12.12 ~95.02.01	権原市上飛驒町94-1 (右京七条一坊)	権原市	住宅建設	荒木 浩司	58~60
75-16 (雷丘北方5次)	5AMH-J	710m ²	95.01.09 ~04.08	高市郡明日香村雷 (左京十一条二坊)	奈良県	県道建設	川越 俊一	47~56
75-17	5BNG-F	10m ²	95.02.13 ~02.16	権原市南浦町49 (左京八条四坊・日向寺跡)	田中博史	住宅建設	藤田 盟児	45~46
75-18	5AJG-U	270m ²	95.03.07 ~03.27	権原市四分町292-2 (宮西南官衙地区)	権原市	用地造成	藤田 盟児	43
77	5AJL-E 5AJG-T	630m ²	94.12.01 ~95.02.07	権原市四分町291 (宮西南官衙地区)	権原市	用地造成	藤田 盟児	41~43
78	5AJF-C,D	1608m ²	95.03.22 ~07.19	権原市高殿町367他 (宮内東裏官衙地区)	国有地	計画調査	松村 恵司	5~16
78-1	5AJG-A	25m ²	95.04.13 ~04.20	権原市高殿町241 (宮東方官衙南地区)	森田繁和	納屋改築	島田 敏男	17~18
78-2	5AWH-Q	400m ²	95.05.08 ~06.20	権原市上飛驒町93-1 (右京七条一坊)	権原市	宅地造成	上原 真人	61
78-3	5BNG-F	15m ²	95.05.09 ~05.10	権原市南浦町876 (左京八条四坊・山内寺跡)	西井利易	農業倉庫新築	島田 敏男	46
78-4	5AJF-R	21m ²	95.06.26 ~06.28	権原市繩手町182-4 (宮西方官衙北地区)	辻本恵有	住宅建設	伊藤敬太郎	19
78-5	5AJF-E	16m ²	95.08.28 ~08.29	権原市高殿町317-5 (宮東方官衙南地区)	三橋貞子	農業倉庫新築	佐川 正敏	18
78-6	5AJQ-E	90m ²	95.10.17 ~10.24	権原市醍醐町143-6-8+9 (右京二条二坊)	松山尚義	住宅建設	川越 俊一	57
78-7	5AJF-C,B	400m ²	95.11.13 ~12.15	権原市高殿町365他 (宮内東裏官衙地区、 東方官衙北地区)	権原市	道路拡幅	藤田 盟児	5~16
78-8 (雷丘北方6次)	5AMH-J	102m ²	95.12.18 ~96.01.11	高市郡明日香村雷62-1 (左京十一条三坊)	阪本武雄	農業倉庫新築	花谷 浩	47~56
78-9	5AJH-R,S	460m ²	96.01.08 ~02.09	権原市飛驒町68他 (六条大路・右京七条一坊)	権原市	宅地造成 歩道建設	近藤 大典	未収録
78-10	5AJK-C,D	m ²	96.03.27 ~03.28	権原市繩手町 (宮西面人垣周辺)	繩手農事組合長	水路改修	黒崎 直	未収録
79	5AJG-S	1320m ²	95.06.26 ~10.12	権原市四分町284-1他 (宮西方官衙南地区)	権原市	保育所建設	佐川 正敏 深澤 芳樹	20~40
80	5AJG-S,R	1780m ²	95.10.16 ~96.02.05	権原市四分町287 (宮西方官衙南地区)	権原市	宅地造成	荒木 浩司	20~40
本葉師寺 1994-2次	5BMY-N	558m ²	95.02.03 ~06.08	権原市城殿町カキバナ (右京八条二坊・参道)	西田佐平	計画調査	花谷 浩	62~75
1994-3次	5BMY-N	105m ²	95.03.24-25 04.05~04.07	権原市城殿町 (右京八条一坊・寺城西辺)	国有地	水路改修	花谷 浩	75
本葉師寺 1995-1次	5BMY-N	609m ²	95.02.01 ~春暦中	権原市城殿町ドコダ281, 278-5 (右京八条二坊、 西塔・南面回廊)	吉川一雄 国有地	計画調査	千田 喬道	未収録
1995-2次	5BMY-M	24m ²	95.02.13 ~02.15	権原市城殿町274 (右京八条三坊・寺城西辺)	西田之彦	農業用倉庫建設	黒崎 直	未収録
1995-3次	5BMY-II	211m ²	96.03.18 ~04.09	権原市城殿町 (右京八条三坊・寺城南辺)	国有地	水路改修	千田 喬道	未収録

Tab. 2 1995年発掘調査一覧表(2)

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
水落遺跡 第8次	5AME-Q	510m ²	95.07.03 ~10.16	高市郡明日香村飛鳥291-1 (水落遺跡)	農田純行	計画調査	巽 淳一郎	77~81
水落遺跡 1995-1次	5AMD-N,U 5AME-P	34m ²	96.03.18 ~03.27	高市郡明日香村飛鳥 (水落遺跡・石神遺跡・ 飛鳥寺北辺)	明日香村	下水道堅坑 予定地	西口 勝生	未収録
飛鳥寺 1995-1次	5BAS-K	21m ²	95.07.07 ~07.13	高市郡明日香村飛鳥696 (講堂東方)	岡山弘之	盛土造成	羽鳥 幸一	82
1995-2次	5BAS-P	10m ²	95.07.13 ~07.18	高市郡明日香村飛鳥631 (講堂北方)	渡部憲治	住宅改築	橋本 義則	82
橘寺 1995-1次	5BTB-B	91m ²	96.01.09 ~02.14	高市郡明日香村橘360地 (北門)	明日香村	村道拡幅	西口 勝生	未収録
奥山久米寺 1995-1次	5BOQ-H,J,K	298m ²	95.09.11 ~11.10	高市郡明日香村奥山 (金堂・講堂・回廊周辺)	明日香村	下水道建設	羽鳥 幸一 花谷 浩	83~86
坂田寺 1995-1次	5BST-A,E,F	58m ²	95.11.27 ~12.15	高市郡明日香村祝戸 (回廊北側・マラ石周辺)	明日香村	下水道建設	花谷 浩	87~89
川原寺 1995-1次	5BKH-E,F	37m ²	96.03.04 ~03.14	高市郡明日香村川原 (寺域各所)	明日香村	下水道堅坑 予定地	黒崎 直	未収録

藤原宮の地区区分について

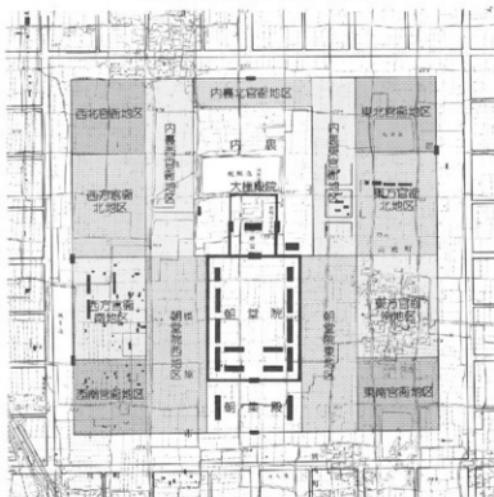


Fig. 1 藤原宮の地区区分図

従来、藤原宮内の地区区分は、中枢部を北から、内裏・大極殿院・朝堂院・朝集殿、とよび、その東西にある官衛区域を、東方官衛・西方官衛とよんでいた。しかし、最近の調査によって東西の官衛地区がいくつかのブロックに分かれ、それぞれが区画や建物配置において特徴を持つと考えられるといった。そこで、今回宮城門につながる宮内道路（先行条坊大路）を基準に東西の官衛地区を各々6区づつに細分し、内裏北の地区とあわせて合計13の地区に細分した。各地区的名称をFig.1のように定める。

I 藤原宮の調査

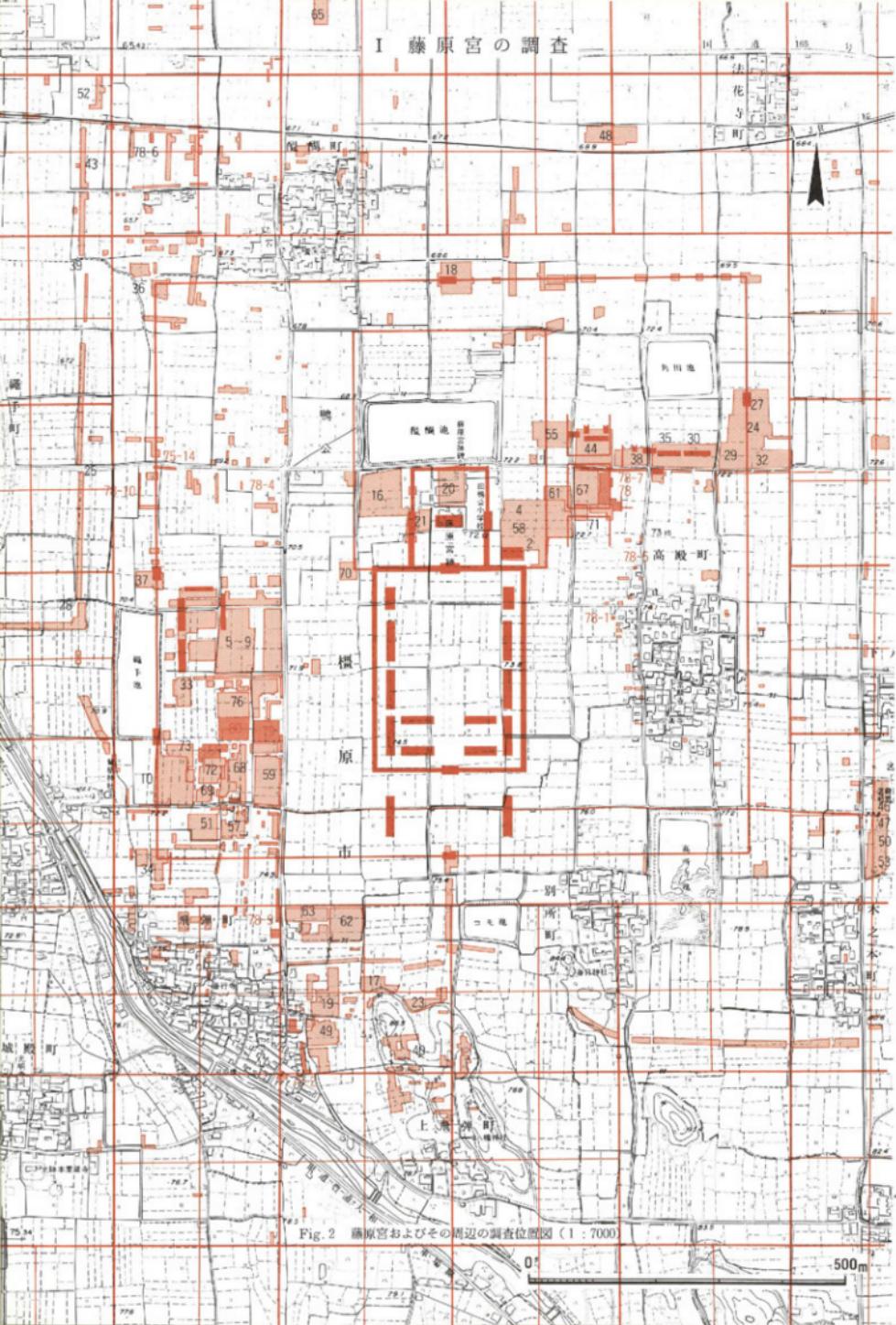


Fig. 2 藤原宮およびその周辺の調査位置図 (1 : 7000)

1 内裏東官衙地区・東方官衙北地区の調査（第78次調査・第78-7次調査）

（第78次調査：1995年3月～7月、第78-7次調査：1995年11月～12月）

第78次調査は、当調査部が1984年度から進めてきた、内裏外郭の東に接する内裏東官衙地区的計画調査である。これまでの調査の結果、この地区には、掘立柱塀で方形に区画された同規模の官衙が少なくとも南北に3ブロック配置されていたこと、一つの官衙ブロックは東西約66m・南北約72mの規模であること、各ブロック間には幅約13mの道路が存在していたことなどが明らかになった。各官衙を北から官衙A・官衙B・官衙Cと仮称している。第78次調査は、官衙Bの全容を解明すべく、未調査地として残されていた官衙Bの東辺部を対象に実施した。調査区は大極殿の東方約250mに位置し、第67次調査区（『概報23』）と第71次調査区（『概報24』）に接する1,408m²であるが、最終的には両調査区を一部再発掘する形で、計1,605m²を調査した。

第78-7次調査は、第78次調査区の北側で、市道拡幅の現状変更にともなう事前調査として実施した。調査区は東西に長く、内裏東官衙地区から東は東方官衙北地区におよぶ。調査面積は約400m²である。二つの調査は、共通する遺構も多いので、あわせてその概要を報告する。

遺構

層序 調査区の基本的な層序は、耕土・床土・灰褐色土・淡黄褐色微砂・砂礫混り茶褐色土の順であり、地表下0.4～0.5mにある淡黄褐色微砂上面で遺構を検出した。

遺構の時期 検出した遺構は、弥生時代、古墳時代、7世紀から藤原宮直前期、藤原宮期の4期に大別でき、藤原宮期の遺構をさらに前半と後半に細分できる（Fig. 4）。本文では弥生・古墳時代の遺構、7世紀から藤原宮直前期の遺構、藤原宮期前半の遺構、藤原宮期後半の遺構の順に記述を進める。なお、検出した掘立柱建物の規模は、別表（Tab. 3）に示した。

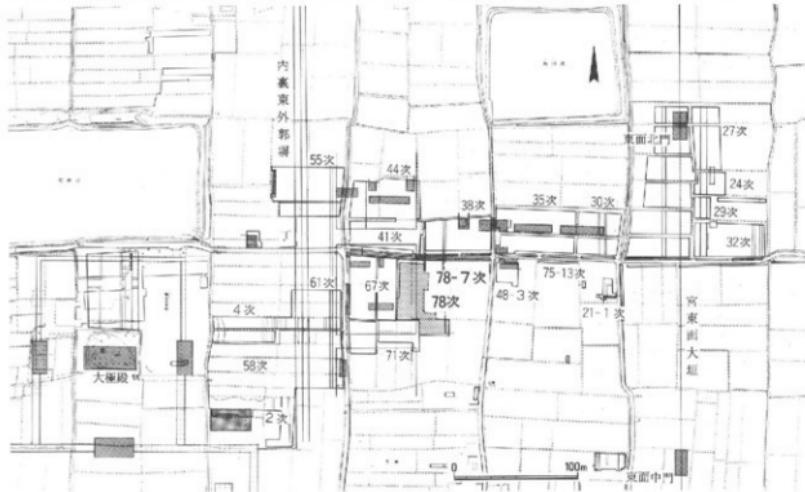


Fig. 3 第78次調査・第78-7次調査位置図（1:4000）

弥生・古墳時代の遺構 弥生時代の遺構には第78次調査区の斜行溝 S D 7617がある。地形に沿い南東→北西方向に流れる、幅約3.5m・深さ1.1mの溝である。第V様式の上器が出上した。

古墳時代の遺構は北で西に大きくふれる特徴があり、斜行溝、掘立柱建物、土坑、小穴などを検出した。第78次調査区で検出した斜行溝は、S D 7609・7649・7913・7914・8580～8586・8588など12条があり、いずれも布留式土器を出土する。南東→北西に流れる一群（S D 8580～8582）と、それに直交する一群に分かれる。S D 7649は、第78次調査区の北西隅近くで南に折れ、S D 8581・8582に接続して南東方向に延びる。S D 8582はS D 8581を廻して新たに掘り直した溝と考えられる。S K 8587は、一辺が5.4mの隅丸方形をした遺構で、深さ0.2m、完形に近い布留式土器が大量に投棄されていた。土坑 S K 8547・8549・8557・8558・8563・8573も布留式土器を出土した。第78～7次調査区では、斜行溝 S D 3651・3652がある。第41次調査区（『概報15』）から続き、6世紀前半の土器を含む。

掘立柱建物 S B 8555は、北で西にふれる桁行3間・梁間1間の南北棟である。側柱列に幅0.8m前後・深さ約0.2mの溝を掘り、柱位置を0.4m前後の深さでさらに坪掘りする特異な掘形である。妻柱は検出できなかったが、梁間は2間であった可能性が高い。飛鳥IVの上器を出土する浅い炭化物土坑が西側柱列の掘形上面を覆っているところから、飛鳥IV以前の建物と判断できるが、建物方位からみて古墳時代の建物と推測される。

7世紀から藤原宮直前期の遺構 この時期の遺構の方位は、後述の藤原宮期のものにくらべて、北で若干西にふれる特徴をもつ。第78次調査区の掘立柱建物 S B 8556・8560は遺構の重複関係から、宮期以前の建物と判断できる。東西棟建物 S B 8556は桁行3間・梁間2間、桁行長6mの小規模な建物である。藤原宮期前半の建物 S B 7610と重複し、これより古い。南北棟建物 S B 8560は、桁行3間・梁間2間の身舎に庇が付く。身舎の柱間は桁行・梁間ともに6尺等間で、庇の出は7尺である。

S X 8569は、第78次調査区の東南隅で検出した深さ0.5m前後の池状の落ち込みである。北西の一角しか検出できなかったが、両岸が直線的に延びることから、方形に近い平面形と推測される。石組みなどの護岸施設はなく、暗灰色粘土が厚く堆積する。西北の隅に導水施設とみられる南北溝 S D 8568がとりつく。出土土器から7世紀前半の遺構と考えられる。

藤原宮直前期の遺構には、宮内先行条坊四条々間路およびその両側溝、東一坊大路とその両

Tab. 3 第78次・第78～7次調査で検出した主要な掘立柱建物一覧表

時期	建物	桁行間数(総長)	梁間間数(総長)	棟方向	備考
古墳時代	S B 8555	3間(5m)	1間(4m)	南北	梁間2間か
7世紀から 宮直前期	S B 7935	8間(64尺)	2間(14尺)	南北	
	S B 8556	3間(20尺)	2間(12尺)	東西	
	S B 8560	3間+二面庇(32尺)	2間(12尺)	南北	南北二面庇付
	S B 8561	13間(117尺)	2間+二面庇(43尺)	東西	南北二面庇付
宮期前半	S B 3270	9間(90尺)	2間+二面庇(24尺)	東西	
	S B 7610	6間(54尺)	3間(21尺)	東西	
	S B 7670	7間(63尺)	2間(18尺)	東西	
	S B 7927	3間(16尺)	3間(15尺)	南北	
宮期後半	S B 7650	5間以上(45尺以上)	2間(20尺)	南北	
	S B 7655	6間以上(54尺以上)	1間(11尺)	南北	
	S B 7605	7間+二面庇(87尺)	2間(18尺)	東西	東西二面庇付
	S B 8540	4間以上(36尺以上)	2間(18尺)	南北	
	S B 8600	6間+庇(56尺)	2間(18尺)	東西	東庇付

側溝のほか、先行条坊を埋め立てて建てられた東西棟建物 S B 8561もこの時期である。

四条々間路 S F 1731は、南北に側溝 S D 7642・7643をともなう。路面幅 6 m、側溝心々間距離 6.9 m の東西道路である。側溝はともに幅 0.8 ~ 1 m、深さ 0.5 m 前後である。東一坊大路との交差点部分で、西側溝 S D 8550・8551に L 字形に連結する。東一坊大路 S F 3499の幅員は側溝の心々間距離で 8.8 m である。西側溝 S D 8551は幅 1 m・深さ 0.3 ~ 0.4 m、東側溝 S D 8565は幅 0.7 m・深さ 0.3 m 前後で、底面のレベルはとともに南に向かって下がる。これらの先行条坊の側溝からは飛鳥 IV の土器が出土した (Fig. 5)。

掘立柱南北塀 S A 8566は、先行条坊に伴う宮造営直前期の塀である。東側溝の東 2 m の位置で 5 分間を検出した。柱掘形は一辺 0.8 m と小型で、柱間寸法は 2.25 m (7.5 尺) 等間である。東 1.5 m に南北溝 S D 8567をともない、塀を挟んで 2 条の溝が併走する。第 58 次調査区 (『概報 20』) でも東一坊々間路の東で溝をともなう宮造営直前期の区画施設を確認しており、これらは一体の計画のもとに施工されたことが知られる。S A 8566 の北延長線上には、第 38 次調査 (『概報 15』) で検出した南北塀 S A 3503 が位置するが、S A 3503 の柱間寸法は 6.5 尺 等間であり、宮内先行条坊の四条二坊西南坪と西北坪を区画する別個の区画施設と考えられる。

掘立柱建物 S B 7935は、第 71・78 次調査区にわたる梁間 2 間の南北棟建物で、桁行が 8 間に確定した。桁行の柱間は 8 尺 等間で、西側柱が東西棟建物 S B 8561 の西妻柱列と重複する。S B 8561 は桁行総長 34.5 m の長大な建物である。第 71 次調査では桁行 6 間以上・梁間 2 間の宮直前期の東西棟建物 (S B 7925) としたが、桁行 13 間・梁間 2 間の身舎の南北両面に庇がつくことが判明した。柱間寸法は、桁行が 9 尺 等間、梁間が 9.5 尺 等間で、庇の出は各 12 尺 をはかり、梁間の総長は 43 尺 となる。S B 8561 は、先行条坊の東一坊大路西側溝の埋め土ならびに宮直前期の建物 S B 7940 の側柱柱穴を掘り込んで構築されるが、官衙 B の東辺区画塀 S A 3633 の柱穴と重複し、これより古い。先行条坊の側溝を埋め立てた後、官衙区画の建設までの短期間におさまる建物と判断できる。建物規模に比べて柱掘形が径 0.7 m 前後と小さく、柱筋も不揃いでであること、確認できた柱痕跡も直徑 20 cm 前後と細いところから、恒久的施設とは考えがたく、仮設的建物としての性格を考慮すべきであろう。

井戸 S E 8562 は、掘形が長径 3.5 m・短径 2.8 m の楕円形をした井戸で、底面までの深さは 1.9 m ある。南半部の底面近くに井戸枠を設け、北半部を玉石敷きの水汲み場とする。井戸枠は掘形の崩落によって倒壊していたが、同一個体とみられる折敷の側板と底板を板杭で固定した方 0.7 m 程度の規模に復原できる。埋め土から飛鳥 IV の上器とともに木製の横穂や砥石が出土した。埋め土の最上部には、宮の造営時の整地とみられる明黄色の山土屑が厚く堆積する。井戸 S E 8612 は北東隅を検出したにとどまるが、掘形が直徑 5 m を超える。12~13 cm 角の角柱を立て、厚さ 25 mm・幅 250 mm の横板を落とし込んで枠板とする。最下段だけが残っていた。

藤原宮期前半の遺構 宮の造営にともない、内裏東官衙地区に官衙 A・B・C が設定された時期である。この時期の遺構には、官衙 B に関わる、掘立柱建物 4 棟、掘立柱塀 3 条・土坑 4 基、および東方官衙北地区の掘立柱建物 1 棟と掘立柱塀 2 条がある (Fig. 4・6)。

掘立柱塀 S A 3633 は、官衙 B の東辺を区画する南北塀である。区画の南東隅を再検出して北へ 20 分間、全長 52.9 m を検出した。柱間は 9 尺 (2.65 m) 等間で、調査区内に門の開く形跡はない。南東隅から第 41 次調査で検出した北東隅柱穴までの距離は総長 71.7 m あり、9 尺 等間、27

間に割り付けられることが確定した。南東隅から数えて北第10柱穴に径24cm、長さ84cmの柱根が遺存する以外は、いずれも東方から柱を抜き取る。北辺と西辺の区画塀にみられた改修痕跡は認められなかった。

官衙Bの区画内で、既調査区から延びる掘立柱建物S B 7610・7927・7670と掘立柱塀S A 7644・8559・8608のほか、いくつがの上坑を検出した。

掘立柱東西棟建物S B 7610は、第78次調査区で東妻を検出し、桁行6間が判明した。柱間は桁行が9尺等間で、梁間は7尺等間である。S B 7610の南には、4.5m(15尺)離れて東西塀S A 8559がある。S B 7610に柱筋を揃えた9尺等間の塀で、3間分を検出したが、第67次調査区でも柱穴の一部を確認しており、S B 7610の前面に設けられた目隠塀とみられる。

官衙区画の東南隅に位置するS B 7927は、東側柱列をS B 7610の東妻の柱筋にそろえた桁行・梁間ともに3間の建物である。柱間は梁間が5尺等間であるが、桁行は総長4.8m(16尺)を三割りする。柱間の狭い小規模な建物であり、雑舎と推測される。

掘立柱建物S B 7670は、第67次調査で南側柱柱穴を確認していたが、今回、北側柱の柱穴を検出し、桁行7間・梁間2間の東西棟建物であることが確定した。柱間は9尺等間である。S B 7670の北側柱筋の東延長上には掘立柱塀S A 8608がある。S B 7670の東4m離れて3間分を確認した。柱間10尺である。東端は後世の井戸に壊される。S B 7670の北側柱とS A 8608は、官衙Bの北辺区画塀S A 3632から南30尺の位置にある。

掘立柱塀S A 7644は、四条々間路の南側溝を埋め立てた後に同位置に掘られた東西塀である。官衙Bの中央に位置する正殿S B 7600の南側柱列から延びてS A 3633にとりつき、官衙区画を南北に二分する。柱間は9尺等間で、今回5間分を検出し、全体で8間の塀となる。官衙の南北区画塀S A 6629からの距離は35.8mで、官衙区画の正しく½の位置にある。

上坑にはS K 8541～8543・8545・8546・8605～8607があり、いずれも飛鳥Vの十器を出土した。S K 8545・8546は一辺1.4m前後の隅丸方形をし、S K 8605～8607は直径2～3m、いずれも燃えさしの木片を含む炭化物屑が堆積する。四条々間路北側溝S D 7643の埋め土を掘り込んだS K 8545からは、文武元年に相当する十文を記した木簡が出土した。S K 8543は長径1.6m、深さ0.35mの不整形土坑で、手斧のはつり屑が底面に厚く堆積する。

第78次調査区の東端では、掘立柱塀S A 8570・8571を新たに検出した。これは、東方官衙北地区の一つの官衙区画の南西隅にあたる。内裏東官衙・官衙Bの区画施設と同一規格で設計された9尺等間の塀で、南辺を限るS A 8571は官衙Bの南辺塀S A 6629と柱筋をそろえ、西辺を限るS A 8570は第38次調査で検出したS A 3500の南延長上にある。両官衙間の距離は24m(80尺)で、その間に宮内道路の存在が想定される。宮内道路S F 8625は、先行条坊東一坊大路S F 3499を踏襲するが、先述したようにS F 3499の両側溝S D 8551・8565は藤原宮期には既に埋められていた可能性が高い。宮内道路の側溝は第78次調査区では検出できなかつたが、第71次調査区では官衙Bの東南隅に西側溝S D 7921を一部検出している。また、北の第38次調査区で検出し、第78～7次調査でその南延長を確認した南北溝S D 3501が東側溝にあたる可能性がある。両者を宮内道路S F 8625の両側溝と考えると、道路の幅員は70尺前後となる。

東方官衙北地区では、ほかに第78～7次調査区の東端近くで掘立柱建物S B 3270の身合南側柱の西4間分と思われる柱列を検出した。S B 3270は第35次調査(『概報13』)で検出した建物

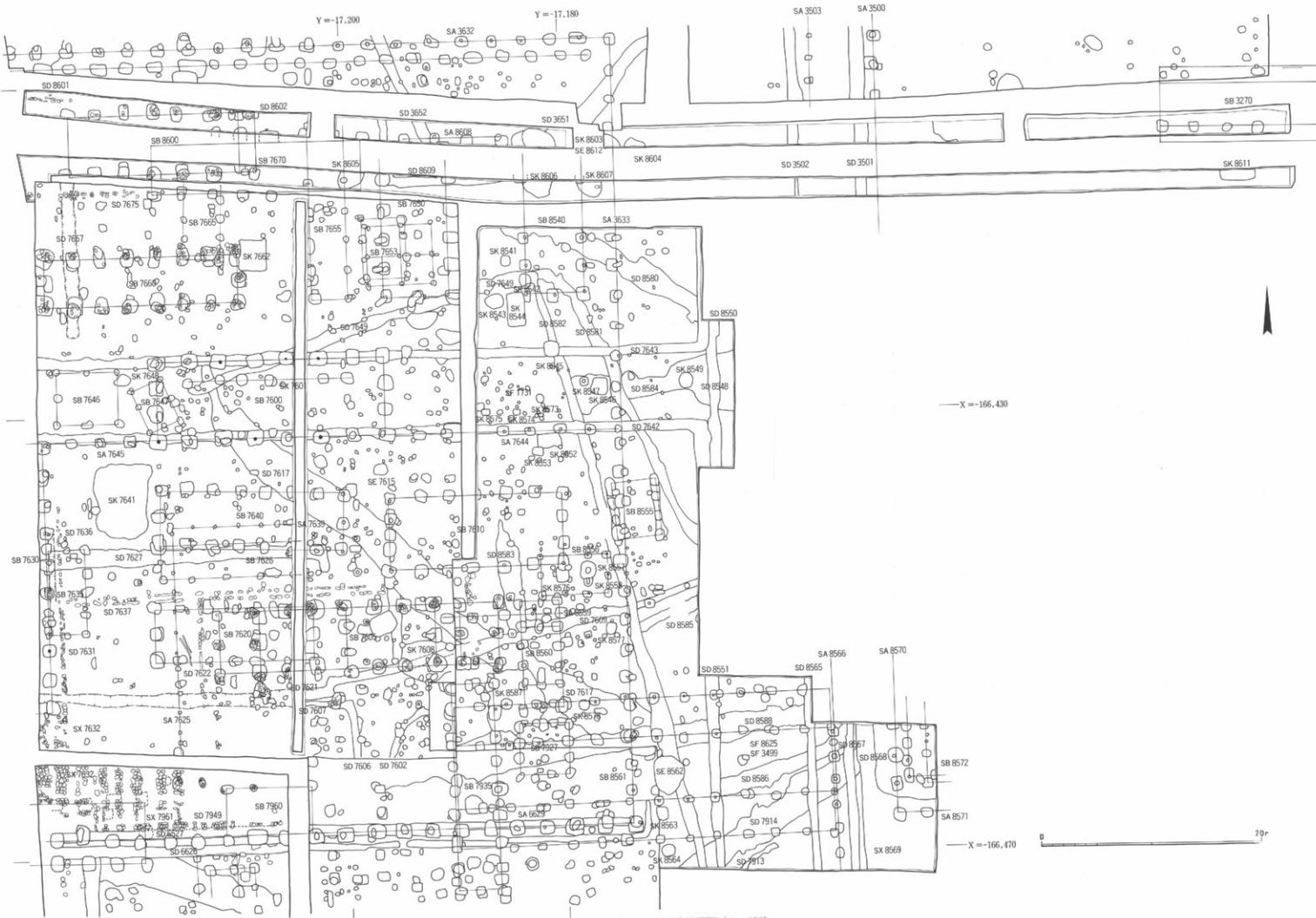


Fig. 4 第78次・第78-7次調査構造図 (1 : 300)

だが、今回検出した柱穴を合わせ妻柱とされていた柱穴を間柱とみると、北にある掘立柱建物 S B 3300と東西規模を揃える桁行9間・柱間10尺等間の東西棟に復原できる。梁間は、身舎が2間で7尺等間、南北に5尺づつ庇が出る。ただし北の庇は西で柱穴を検出しておらず、部分的なものかもしれない。

藤原宮期後半の遺構 前半の官衙区画は踏襲するが、建物を全面的に建て替え、区画内に石敷きを施した時期である (Fig. 4・7)。後世の削平のため石敷き S X 7632は遺存しないが、敷かれていた石の一部が中世の耕作溝などに落とし込まれており、官衙Bの東半部や北辺部にも石敷きが敷設されていたものと考えられる。第78次調査区では、第67次調査で検出した掘立柱建物 S B 7605の東妻を確認できた。桁行6間・梁間2間の身舎に西庇のつく建物と考えていたが、さらに東に2間分延び、桁行7間の身舎の東西に庇が付く左右対称の構造となる。柱間寸法は桁行・梁間ともに9尺等間であるが、東庇の出は西庇と同じ12尺で、桁行総長が87尺の大規模の建物となる。柱掘形は一辺1.0~1.5mと大規模で、柱抜き取り穴には人頭大の玉石が詰め込まれている。建物周間に配された石組の雨落溝は遺存しない。

掘立柱建物 S B 8600は、桁行6間で柱間は8.5尺等間、梁間は18尺をはかる東西棟建物。東に5尺の庇が張り出す。第67次調査時に北辺で検出した石組み雨落ち溝 S D 7675から、その存在を予想していた建物で、南のS B 7660と柱筋を揃える。柱抜き取り穴に多量の玉石が入る。S B 8600の南雨落ち溝 S D 7675は西の延長部を確認し、北雨落ち溝 S D 8601と東雨落ち溝 S D 8602を新たに検出した。いずれも底石を数石残すだけであった。柱心から溝心までの距離は、南北で約1.8m、東で約1.5mをはかり、南方のS B 7605と同じ軒の出だったことがわかる。

掘立柱建物 S B 7655は、北延長部を検出した。桁行6間以上で9尺等間、梁間1間で11尺であるが、東側柱の掘形が小さいので、建物ではなくさしかけのある塀かもしれない。その東にある掘立柱建物 S B 7650の北延長部も確認した。桁行5間以上で9尺等間、梁間は2間で10尺等間である。掘立柱建物 S B 8540は、S B 7650と官衙B東辺の塀 S A 3633との間にある南北棟である。桁行4間以上・梁間2間で、柱間寸法は梁間9尺等間・桁行は南2間が8尺等間であるが、その北で柱間を広げるようである。柱掘形は一辺0.9~1.2mの規模をもち、東側柱列はS A 3633から10尺の位置にある。以上のS B 7655・7650・8540は、南妻をS B 7600の南側柱筋と揃える。また、S B 8540は、宮期前半の土坑 S K 8606・8607と重複しこれよりも新しい。

第78-7次調査区の土坑 S K 8603は、直径約3m・深さ45cmある。東辺の塀 S A 3633の柱位置に重複し、S A 3633の柱穴が検出されなかったので、これを壊しているのだろう。

遺物

出土遺物には、上器・土製品、瓦、木製品、木簡、石製品などがある。

土器・土製品 土器は7世紀代の藤原宮期及びその直前の時期の土師器・須恵器が主体を占め、他に弥生上器、古墳時代の布留式土器などがある。土製品には円筒硯・転用硯、土馬、驥羽口、埴輪などがある。また、判読出来ないが土坑 S K 8543出土の須恵器壺の内面に墨書きが認められる。なお灯明皿や漆皿に転用した杯皿類と漆を入れた壺類については上器の説明の中でふれる。

土器では、第78次調査区の先行条坊東一坊大路側溝とその西の井戸 S E 8562、四条々間路側溝を壊し「丁酉年」の木簡が出土した土坑 S K 8545およびS K 8546、第78-7次調査区の宮期後半の建物 S B 8540の柱穴で壊される土坑 S K 8606・8607、官衙区画塀 S A 3633の柱穴を覆う土坑 S K 8603などから出土した土器に比較的まとまりがある。それらは藤原宮直前期と藤原宮

期とて構成上の違いが認められるなど、飛鳥IV～Vの具体的な内容を把握しうる良好な資料であるとともに、遺跡の微妙な変遷過程を理解する上でも重要な資料である。なお、さほど多くはないが、第78次調査区東南隅の池状遺構S X 8569とそれに取り付く南北溝S D 8568および、南隅の円形土坑S K 8564、北寄り中央のS K 8573などからは7世紀前半代の土器が出土している。

ここでは、藤原宮直前期の先行条坊東一坊人路側溝出土土器を図示した(Fig. 5)。以下、その内容と特色を紹介し、藤原宮期の土器群との違いについてふれておきたい。

東一坊大路側溝出土土器では、西側溝S D 8551出土土器が多量かつ多様であるのに対して、東側溝S D 8565出土土器(12・23・27・33)は少ない。しかし、漆皿などが東側溝に認められない点を除けば、両者に違いが認められないので一括して紹介する。

土師器には杯A・C・H・G、皿A、甕A・B・Cがある。杯Aには口径18.5cm・器高5.2cm前後のA I (10)と、口径15.8cm・器高5.1cmのA II (9)がある。いずれも平底から逆台形に直線的に開き、口縁端部を丸く小さく内側に肥厚させる。底部から口縁下部の外縁をヘラケズリ、口縁上半部を粗く横方向にヘラミガキする。胎土・色調の特徴では、9が杯Cの1～4に、10は5～8に対応する。杯Cには口径14.3～15.4cm・器高4.1～4.4cmのC I (4・8)、口径13.1～14.0cm・器高3.0～3.4cmのC II (2・3・6・7)、口径10.5～10.7cm・器高2.4～2.5cmのC III (1・5)がある。底部外縁は指オサエのままか、その後にナデを加えており、いずれの大きさのものにも口縁部外縁のヘラミガキはみられない。形態的には、底部が小さな平底ないしは凹み底から直線的に斜めに口縁部下に移行し、そこで屈曲して口縁部が直立気味になるもの(1～4)と、底部が平底ないしは丸底で口縁部が丸く立ち上がるもの(5～8)の二者がある。両者は口縁端部の特徴でも異なり、前者は小さく内側に肥厚する傾向にあり、後者では口縁内側にやや幅広い中凹みの傾斜面を形成する。色調・胎土でも前者は橙褐色系で石英などの微細な砂粒を含むものが多く、後者は赤褐色系で緻密で精良なものが多い点で異なり、両者は産地が異なるものと推定される。なお、この二者は他の遺構たとえば本概報Fig.18所収の西方官衙南地区第80次調査の五条大路側溝や土坑S K 8471出土の杯Cでも認められ、2・3・23は前者、1・24は後者である。杯Gは口径11.3cm・器高3.0cmのもの(13)と口径14.6cm・器高3.8cmのもの(14)がある。口縁部をヨコナデしただけの粗製の杯で、胎土に石英・チャート等を多く含んでいる。いずれも内縁に漆が膜状に付着し、ヘラで搔き取った形跡がある。皿A (11)は口径20.6cm・器高2.9cmで、口縁端部に平坦面をつくる。底部外縁は指オサエである。甕A (15)は口径15.6cm・器高16.5cmで、角張った端部をもち直線的に開く口縁部と体部内縁のヘラケズリ、外縁の細かな縦ハケメなどの特徴から、いわゆる「河内型」甕に属すが、暗茶褐色で雲母を含む砂質の胎土でないうえに、体部外縁中程に粗い斜ハケメを施す点で典型例とは異なる。

須恵器には杯A・Bおよび蓋、杯G、甕A・B、皿B、平瓶、壺、甕などがある。杯A IV (24)と杯G (23)とはともに底部ヘラキリのちにナデしており、形態上も区別が難しいが、重ね焼きの状況から23には口径11cm程の蓋がともなうと判断された。甕Aは平底で器高が高く、重ねや器の痕跡からみて蓋の被る器種である。口径12.9cm・器高5.6cmで口縁部中程から開く26と、口径11.6cm・器高5.0cmで直立気味の25がある。いずれも底部をロクロケズリし、蓋(17)は25の蓋である可能性がある。杯Bには口径16.7cm・器高4.2cmのB I (32)、口径15.0cm・器高4.3～4.4cmのB II (30・31)、口径14.2cm・器高3.9～4.2cmのB III (28・29)がある。高台は台形を呈するものと踏ん張り気味のものがあり、底部外縁の調整ではロクロケズリのもの(28・31)

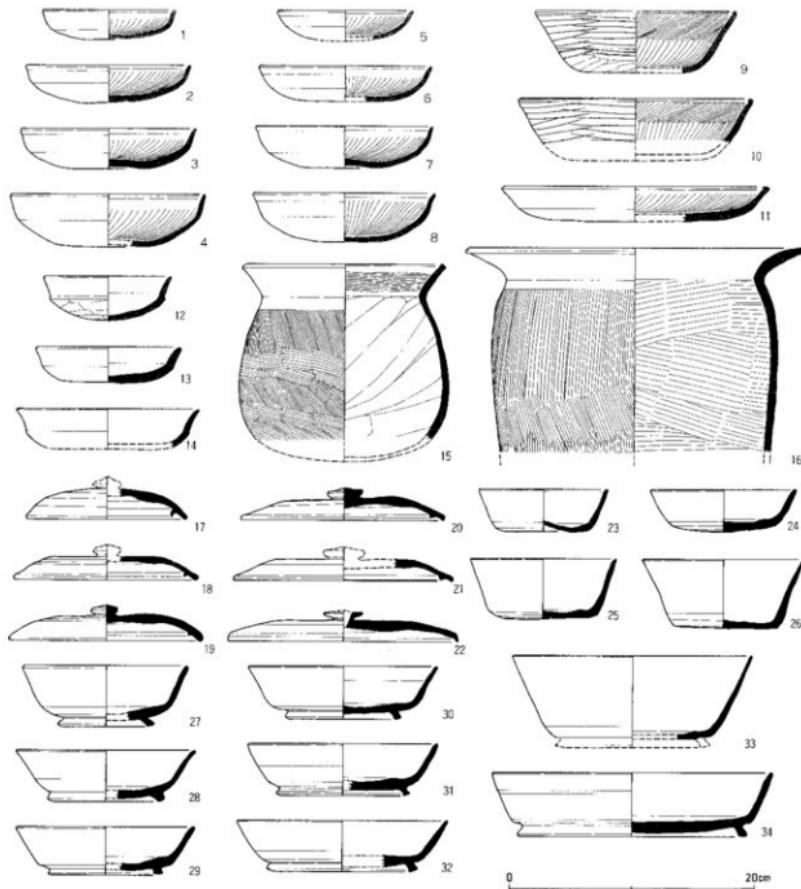


Fig. 5 先行条坊東一坊大路側溝出土土器 (12・23・27・33は東側溝 S D8565、他は西側溝 S D8551)

とヘラキリのままのもの (29・30) があるが、両者は対応しない。27は踏ん張ってやや高い高台が内寄りにつく点で古相を呈するが、底部外面はヘラキリのままである。杯B蓋は口径で杯B I蓋 (21・22)・B II蓋 (20)・B III蓋 (19) と B IV蓋 (18) に分けられる。形態では口縁内側に身受けのかえりをもつもの (18~21) と、もたないもの (22) とがあり、後者は大型のものに限られ、量もごくわずかである。前者の口縁外端部もやや角張り気味で外見上は後者と区別できない。つまりはいずれも中央部がわずかに突出する。なお20には口縁部内面の2カ所に身受けのかえりを跨ぐ灯明痕跡が残る。椀B (33) は口径19.1cm・器高8cm程度で直線的な口縁部の端部は丸い。皿B (34) は口径22.4cm・器高5.2cmで垂れ気味の底部外面を丁寧にロクロケズ

りし、内面には細かな同心円当て板痕跡が残る。なお31・33・34については東海地方の製品と推定される。

西側溝には多くの漆付着上器が含まれる。図示したものでは先述の杯Gのほかに土師器杯A I (10)・杯C I (8)、須恵器杯A IV (24)・B I (32)、同蓋 (19) があり、土師器杯C II (6)、皿A (11) も内面に黒色の焼けこげがあって漆皿に使用した可能性が高い。他に須恵器平瓶、土師器壺などの漆壺があるが少量で、さまざまな器形のパレットが主体を占める。飛鳥池遺跡や紀守東南部の工房遺跡では多種多量の漆壺が主体で、この構成の違いは漆工の作業段階の違いと考えられて興味深い。漆皿・壺は他に宮直前期の土坑S K 8578、井戸S E 8562、建物S B 8556柱穴、西側溝よりも新しく官衙よりも古い時期の建物S B 8561の柱穴など西側溝と相前後する時期の遺構から出土しており、宮殿の造営に関わる可能性が高い。

これらの漆皿あるいは灯明皿として転用されている須恵器杯、蓋や土師器杯A I、杯Cにはその痕跡をとどめないものとの間に品質上の差は認められない。このことは西側溝出土土器の中には工人層が道具として使用した土器と官人層を含めて食器として利用された土器とが混在し、それらの区別ができないことになる。この事実は、全ての供膳具を食器として貯蔵・煮炊具との構成比を求めるこには問題があることを示すとともに、上器の用途と階層性の問題について、なお詳細な検討が必要なことを示している。

いっぽう、「丁酉年」の木簡が出土した土坑S K 8545およびS K 8546、第78-7次調査区の宮期後半の建物S B 8540の柱穴で壊される土坑S K 8606・8607、官衙区両廻S A 3633の柱穴を覆う土坑S K 8603などから出土した土器は、いずれも飛鳥Vに属す。それらはなお整理途中にあるが、先述の条坊側溝出土土器や井戸S E 8562、土坑S K 8564出土土器など飛鳥IVに属する土器群との相違点をあげると、須恵器では杯B蓋の身受けのかえりがないものが大半を占めること、口径30cmほどの皿A・Bなど大型の器種が増えること、土師器では多様な手法で作られた大小の蓋が目立つこと、大型の皿A・高杯Aがみられること、杯A・杯Cに器壁が厚く粗雑な暗文をもつものや、形態的には杯A・Cに類似しながら、内面に暗文を施さないものなど多様な製作者の製品が混在すること、大和型甕Aの口縁端部が上に肥厚することなどがあげられる。これらの主に器種構成上での特徴は、第24・27・29次調査の東面内濠S D 2300出土土器と一致した内容で、これらが官衙で使用された土器の特徴であることを示している。

土製品 瓦は東一坊大路西側溝S D 8551出土の円面瓦のほか、宮期後半の建物S B 8540の柱穴などに須恵器杯B蓋を利用した転用瓦がある。土馬は頭部と脚部の破片が各1点ずつある。鍛冶関係の土製品には蘿羽口が少量あるほかに、建物S B 8540の柱穴埋め土から出土した坩堝1点が注目される。坩堝は直径約15cm、高さ10cm余。内面に残る白色の金属を分析した結果、鉛を熔解した坩堝と判明した。

瓦類 軒瓦は、軒丸瓦6281Aが4点出土した。うち1点はほぼ完形である。このほかに、「月 月」のヘラ書きのある駿斗瓦1点と丸・平瓦が出土している。丸瓦は177点(20.6kg)、平瓦192点(23.5kg)が出土。その総量や分布からみて瓦葺き建物があった可能性は低い。

木製品 宮造営直前期の井戸S E 8562から井戸枠に転用された折敷と横樋が出土した。また、宮期前半の土坑S K 8606からは、文箱の蓋が出土した。全長34cm・幅5.1cmである。

木簡 宮期前半の土坑S K 8545の埋土から2点出土した。うち1点は「丁酉年□月」の「支」が判読できる。「丁酉年」は文武元年(西暦697年)に相当する。

まとめ

今回の2つの調査によって官衙Bの全容と周囲の状況が明らかになり、その構造と変遷の過程がより明確になった。その調査結果を以下に要約する。

内裏東官衙地区官衙Bは、四周を掘立柱塀で区画した東西66m、南北71.7mの規模をもつ。その東西規模は、条坊地割の基準値である900小尺の $\frac{1}{4}$ （225尺）であり、先行条坊東一坊大路S F 3499の心から西40尺を東辺とする。南北規模は、先行条坊四条々間路 S F 1731の南側溝 S D 7642を基準線にして、南北に各120小尺（100大尺）をとり、倍の240小尺（200大尺）を官衙Bの南北規模としている。官衙区画の南北には約12.6m幅の東西道路を挟んで、東西規模を同じくする官衙C・Aが存在する。両官衙の南辺と北辺は未調査であるが、官衙Cの南が東面中門に通じる宮内道路、官衙Aの北が東面北門に通じる道路（各々、宮内先行条坊の四条大路と三条大路を踏襲）を限りとすると考えられ、各官衙の南北長もほぼ近い数値をとるものと推測できる。ただし官衙Bの南北二等分線が先行条坊四条々間路の心にないのは、宮内道路の幅員差や施工誤差、使用尺の差、各官衙の南北規模の微妙な差などに起因するのであろうが、現状ではいずれとも決しがたい。

官衙Bの内部の構造については、従来の調査によって、藤原宮の存続期間内に大規模な官衙の改作があり、大きく様相を異にした新旧2時期の官衙の変遷が認められている。宮期前半の官衙は、敷地のほぼ中央に建てられた正殿 S B 7600を中心に、各建物が正殿と柱筋をあわせたり、正殿から等距離に配置されるなど、きわめて整然とした計画性を備えている。今回の調査では、第67次・第71次の両調査区から延びる建物の規模を確定するとともに、正殿の南側柱列から東西に延びて官衙空間を南北に二分する東西塀 S A 7644の東端部を検出し、官衙Bの区画施設が確実に宮期前半にまで遡ることを明らかにした。

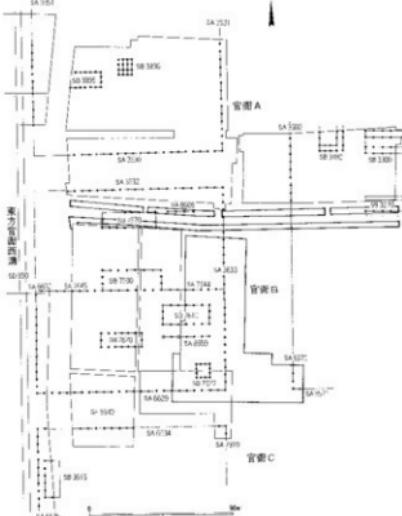
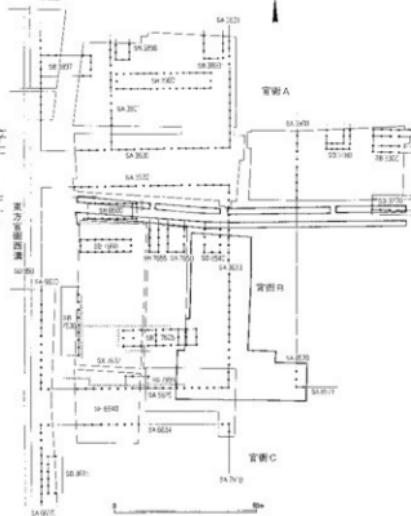


Fig. 6 藤原宮期前半の遺構



後半期の官衙造構としては、敷設された石敷は遺存しなかったが、S B 7605の規模を明らかにし、区画の北東隅近くに2棟の南北棟が存在することを確認した。

官衙Bの東方では、宮内先行条坊である東一坊大路S F 3499の両側溝を検出した。道路の幅員は第25次・第27次調査で検出した三条大路の規模に類似する。S F 3499の道路心から官衙Bの東辺区画塀までの距離は11.8m（40尺）を測り、これを東方に折り返した位置に東方官衙北地区の官衙の西辺区画塀を検出した。この官衙区画は官衙Bと南辺を揃えるが、西辺の区画塀S A 8570が第38次調査区にも延びる（S A 3500）ことから、官衙の北辺は官衙Aの北辺と揃う可能性が高い。したがって新たに確認した官衙は、官衙A・B二区画を一体にした南北長をもつものと推測できる。東西の規模については、東面北門の調査以降継続的に実施した一連の調査で該当すべき東辺の区画塀を検出していない。東方官衙北地区的建物配置は、長大な建物が東西に並列して建ち並ぶ特徴が認められ、仮に大垣までの占地を想定すると193m（650尺）近い規模となる。

内裏東官衙地区と東方官衙北地区の間、幅80尺の空間には、先行条坊道路を拡幅した宮内道路が位置する。宮内道路の両側溝は不明瞭であったが、道路の幅員は70尺前後に復原できる。宮内道路S F 8625に面する官衙Bの東辺に開く門は存在せず、官衙Bの出入口は南辺と西辺で確認した2カ所に限定されていたようである。

今回の調査で特筆されるのは、官衙区画や宮内道路の存在に制約されない桁行13間の南北二面庇付建物の発見である。桁行総長117尺（34.5m）、梁間総長43尺（梁行総長12.8m）の大型建物であり、造構の重複関係から、先行条坊である東一坊大路の側溝埋め立て後に建てられ、官衙Bの区画塀の建設時には既に存在しないことから、宮造営時の短期に営まれた建物と推定できる。これまでに発見した藤原宮の建物の中でも最大規模の建物であるが、柱穴や柱痕跡の規模、配置などからみて恒久的な施設とは考えがたく、その位置から大極殿や朝堂院など、宮の中核施設の造宮に際して設けられた仮設建物の可能性が高い。

以上のように今回の調査によって、内裏東官衙地区と東方官衙北地区における空間利用の状況とその変遷がより明確になった。7世紀後半の状況に限ても、

①先行条坊の施工期…先行条坊の側溝に沿う掘立柱塀による区画を設け、内部に建物を営む藤原宮造営の直前期

②藤原宮の造営期…先行条坊の側溝を埋め立て、建物を撤去して大型の仮設建物S B 8561を建設する時期

③内裏東官衙地区・官衙Bの造営期（藤原宮期前半）

④官衙Bの改修期（藤原宮期後半）

⑤官衙の解体期

という変遷を確認することができる。①と③～⑤にかけての変遷の大筋は、内裏東官衙において広く認められるところであり、近年、西方官衙にも共通することが明らかになりつつある。しかしながら宮造営の直前期とした時期だけをみても、同時期に重複関係をもつ造構がかなり存在し、さらに複雑な変遷をたどるようである。これは先行条坊の施工時期や、宮の造営・整備過程、宮造営直前期の造構の性格をどう理解すべきかという問題と密接に関係しており、今後、これまでに得られた調査成果を子細に検討して、整合的に問題の解決をはかる必要がある。

2 東方官衙南地区の調査

A 第78-1次調査

(1995年4月)

本調査は農小屋新築にともなう事前調査である。調査地は、藤原宮東方官衙南地区の西辺を限る道路上、つまり宮南面東門から宮北面東門にいたる南北宮内道路 S F 8625（先行条坊東一坊大路）の路面上、と推定される位置である。調査面積は25m²。

基本層序は地表面から、近代の整地土・旧耕作土・明褐灰色土・明茶灰色土（地山）・茶褐色土（地山）である。明茶灰色土の上面で柱穴群を検出した。柱穴群は建物か塀の一部と考えられ、いずれも北でわずかに西にふれる。柱穴群は重複関係から4期に分けることができる。以下、古いものから順に記す。

S B 8420は、東西に2.4m離れてある2つの柱穴で、東西棟の北辺の一部と考えられる。東の柱掘形は東西1.1m・南北0.9m、西の柱掘形は東西0.9m・南北1.3m、ともに長方形である。西側の柱穴が建物の西北角になる可能性もある。

S B 8421は、東西・南北方向ともそれぞれ2.7m離れてある4つの柱穴で、底の一部と考えられる。柱掘形は1.1mの方形で、直径40cmの柱痕跡を残す。柱掘形の底には人頭大の石を敷いて柱の礎盤としている。

S B 8422は、2.4m離れてある大規模な柱穴2つで、建物もしくは塀の一部と考えられる。柱掘形は一辺1.6mの方形、深さ約60cmで、柱抜き取り穴をもつ。

S B 8423は東西2.7m・南北2.4mの間隔である4つの柱穴である。東西棟もしくは南北棟の底の一部と考えられる。柱掘形は東西0.9m・南北0.8mの長方形で、いずれも柱抜き取り穴をもつ。

遺物は、弥生時代、古墳時代、7世紀代の土器が少量出土した。S B 8422の柱穴から7世紀中頃の須恵器が出土し、S B 8423の柱抜き取り穴からは藤原宮期の土師器・須恵器が出土した。



Fig. 8 調査位置図 (1 : 2000)

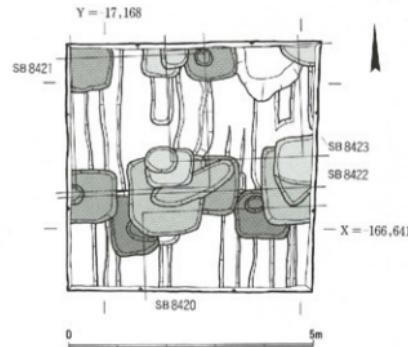


Fig. 9 第78-1次調査遺構図 (1 : 100)

調査面積はさして広くなかったが、4期にわたる柱穴群を検出した。調査地の位置が、藤原宮の南面東門と北面東門を結ぶ宮内道路S F 8625の路面上と推定されること、そして出土土器が7世紀中頃から藤原宮期までのものであることを勘案すると、柱穴群は藤原宮に先行する時期の建物と推定される。これまでにも、内裏東官衙地区の南部を中心に、7世紀中頃以後、藤原宮直前までの時期の建物や塙が見つかっている。なかでも藤原宮第71次調査(『概報24』pp.7~16)では、建物9棟から10棟が、第78次調査(pp.5~16)でも4棟が検出された。これらの建物もすべて方位が北でわずかに西にふれている。今回検出した建物もこれらの建物群と関連することが推測され、藤原宮造営以前の土地利用状況を把握するのに重要な地域である。

B 第78-5次

(1995年8月)

本調査は、農業用倉庫の建て替えにともなう事前調査である。調査地は、先行条坊四条大路と東一坊大路の交差点のやや東にあたる。調査面積は16m²。

盛土(約30cm)と旧耕土・床土(約30cm)を除去し、遺構面(黄褐色土上面)に達した。調査区西北隅で土坑を2基を検出した以外に遺構ではなく、下位の暗黄褐色土上面でも遺構は検出されなかった。土坑から出土した遺物は、弥生時代末期の土器片のみであった。

さらに調査区北辺と西辺を20~40cm掘り下げ、水成堆積層を数枚検出した。これらの上層は東から西に傾斜する。調査区北辺の明黄褐色砂質土層から弥生時代か繩紋時代のサヌカイト製剝片が1点出土した。

藤原宮期およびその直前期の遺構が何ら検出されなかったことは、本調査区が先行条坊四条大路上に位置しているという予想を裏付けている。それ以前の遺構は土坑2基のみであり、遺物もほとんどない。下層の土層堆積状況からみて、調査区およびこの西方にかけての古墳時代以前には、南北方向の自然河川か湿地があったと考えられ、上面を居住地とするには不適切な環境であったと推定できることと関連しよう。



Fig.10 南西から見た大柱散跡

3 西方官衙北地区の調査

A 第75-14次

(1995年1月)

この調査は、市道小房東池尻線の歩道拡幅にともなう事前調査として、権原市繩手町で実施した。調査地は西方官衙北地区の西北部にあたり、西面内濠が調査区の西辺部で検出できるものと予想された。

道路造成に伴う盛土の直下、黄灰色粘質土上面で遺構を検出した。

掘立柱建物 S B 8380は、調査区中央で検出した南北棟建物。南妻と考えられる3個の柱穴を確認した。梁間は2間で、柱間は1.8m(6尺)等間である。北で東に7度ふれている。

土坑S X 8381は、S B 8380の東で検出した浅い方形の土坑。南北長は不明だが、東西長は3.5mあり、深さは25cmである。底面は平坦面をなすが、特に叩き締めたような痕跡はない。性格は不明である。S B 8380と同様に北で東にふれている。

沼状遺構S X 8382は、S B 8380の西6mほどで東岸を確認した。さらに調査区外西に広がるため、その規模や形状は明らかでない。現状で東西幅は11.5m以上あり、深さは1.4mある。上から40cmほどは埋め立ての土(黄褐色砂質土・淡灰褐色砂質土)で、その下は堆積土(淡灰色粘質土・暗灰色粘土)である。堆積土から、藤原宮式軒平瓦6641Fが2点と、熨斗瓦3点のほか、丸瓦・平瓦が出土した。

調査の結果、西面内濠想定位置で沼状遺構S X 8382が検出された。堆積土からは藤原宮式軒瓦が出土したが、S X 8382が藤原宮期に存在したのか、あるいは藤原宮廃絶以後にできたものであるのかは明らかでない。

B 第78-4次

(1995年6月)

この調査は、個人住宅新築に伴う事前調査として、権原市繩手町でおこなったものである。調査地は、先行条坊四条々間路の想定位置にあたる。四条々間路の南北両側溝の確認を主目的に、幅1.5~2mの調査区を南北12mにわたって設定し、調査をおこなった。

調査区の層序は上から、盛土・旧耕作土・床土・茶褐色土・暗灰褐色微砂の順である。現地表下約1.3mの暗灰褐色微砂層の上面で遺構検出をおこなったが、検出した遺構は、耕作土から掘り込まれた素掘りの東西溝1条だけで、先行条坊四条々間路や藤原宮に関連する遺構や遺物を検出しなかった。過去に周辺でおこなった調査でも同様の成果がえられており、藤原宮あるいはその直前の遺構はすべて後世に削平されたものと考えられる。

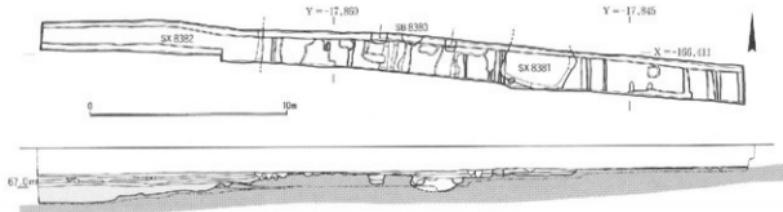


Fig.11 第75-14次調査遺構図・上層断面図(1:250)

4 西方官衙南地区の調査（第79次・第80次）

（1995年6月～1996年2月）

第79次調査は保育所建設にともなう事前調査（面積1,320m²）、その西で実施した第80次調査は宅地造成にともなう事前調査（面積1,780m²）である。調査地は藤原宮西方官衙南地区の東南隅、つまり西面南門から東に向かう宮内道路（先行条坊五条大路）が、南面西門と北面西門を結ぶ南北方向の宮内道路（先行条坊西一坊大路）に交差する地点の北西に位置する。当調査部では20数年来この付近で、鶴公小学校の移転や四分囲地の建て替えなどにともなう調査を重ね、以下の成果を得てきだ。

- ① 藤原宮造営に先行して、五条々間路や西二坊々間路などの条坊道路が設けられていた（第5～9次『報告II』）。
 - ② 藤原宮直前期の宮内先行条坊五条西二坊の東南坪内に、四方を掘立柱塀（S A 1215・1216・6985・7000）で囲まれた、東西に長い官衙風の大型区画（以下、区画Aとよぶ）があった（第6・8・9・63-8・63-10・76次『報告II』『概報21・25』）。
 - ③ 藤原宮造営時に五条々間路と西二坊々間路の側溝を埋めて長大な建物が4棟建てられる。これらは馬寮と関連する可能性がある（第5～6次『報告II』）。
 - ④ 西面大垣南門の内濠から薬物に関する木簡と薬石が出土したので、付近に典薬寮があつた可能性がある（第58-1次『概報19』）。
 - ⑤ 第79・80次調査地の南には弥生時代と古墳時代の集落跡である四分遺跡の中心部がある。第76次調査などで弥生時代の方形周溝墓S X 8220・8221と遺物包含層、S D 3100など古墳時代の河川敷条がみつかり、四分遺跡北辺の情報を得た（『報告III』『概報25』）。
- このようなことから、第79・80次調査では、宮内先行条坊の五条大路と西一坊大路の検出が予想され、それらがどのように宮内道路として踏襲されたのか、また五条大路と区画Aの南辺S A 7000との間の空間利用についての情報もえられると予想された。さらに、古墳時代の河川の継ぎや、四分遺跡の弥生集落の北辺の区画施設などがみつかることも期待された。

基本層序

第79次調査区は、現代の廃材を含む盛土層が厚くあり、耕土・床土と続き、黒灰色土上面で藤原宮期・藤原宮直前期および、古墳時代の遺構検出をおこなった。一方、比較的良好な土層が残っていた第80次調査区では、盛土（淡灰色バラス、黄白色砂礫）・耕土・床土と続き、藤原宮期・藤原宮直前期の遺構を、淡灰褐色土または淡褐色砂質土の上面で検出した。下層調査区においては、後述する弥生時代中期の環濠を明瞭に検出するため、最終的には地山である暗緑灰色微砂層上面まで掘り下げた。下層調査区の層序については、後述する。



Fig.12 第79・80次調査区基本層序模式図

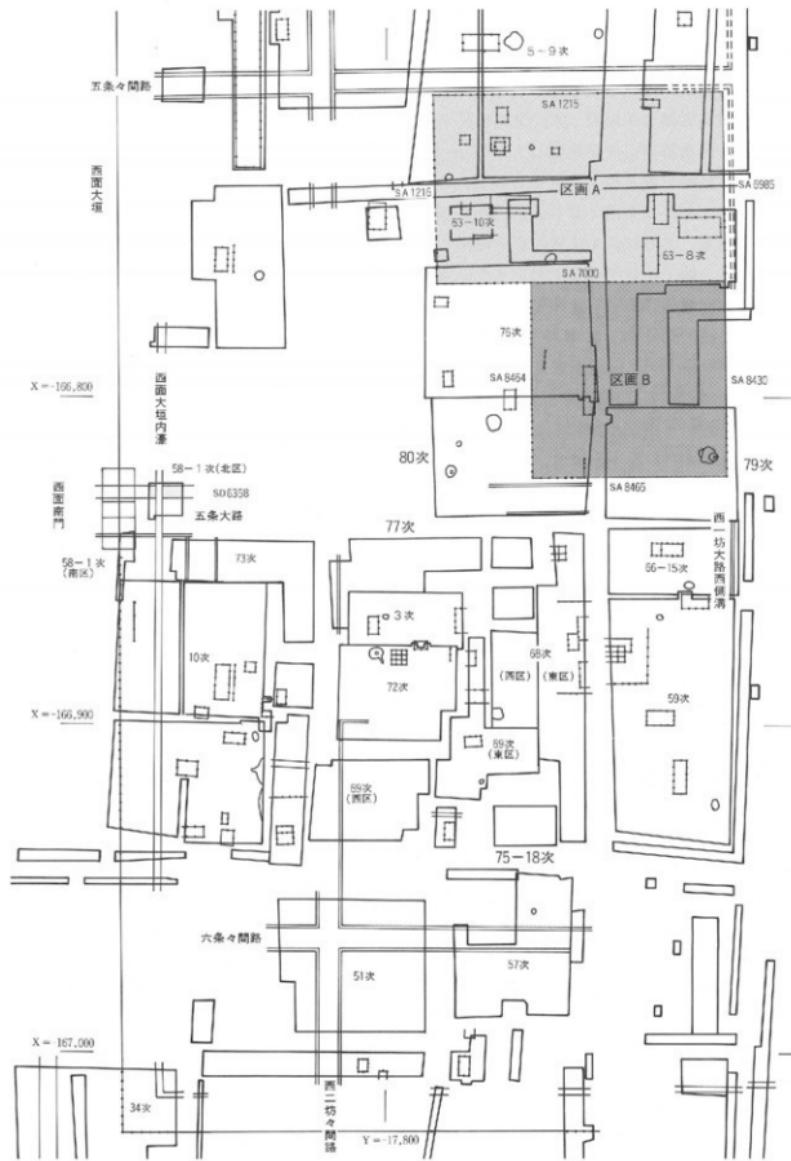


Fig.13 西方官衙南地区・西南官衙地区造構配置図および調査位置図 (1 : 1500)

A 上層遺構の調査

藤原宮直前期・藤原宮期の遺構

道路側溝 2 条、掘立柱塀 5 条、掘立柱建物 2 棟、井戸 4 基、土坑 6 基がある (Fig.14)。

先行条坊五条大路 S F 6360 第80次調査区では S F 6360 の北側溝 S D 8461 と南側溝 S D 8462 を検出した。両側溝の心々間距離は 8.5~9 m である。北側溝 S D 8461 には新旧 2 時期 (A・B) があり、B は後に掘り直したものとみた。S D 8461B は幅約 1 m、深さは調査区東端で約 25 cm あるが、西に向かって浅くなり、約 29 cm 分を確認したにとどまった。国土座標に対して西で若干南にふれる。S D 8461A は B の底で検出した。調査区東端で深さ約 15 cm あり、B と同様に西で浅くなる。約 7 m 分を確認した。また、S D 8461 は第 58-1 次調査において西面南門の東で検出した北側溝 S D 6358 の東の延長上にあるとすると、これらをつないだ時の国土座標に対するふれは、西で南に約 1 度である。S D 8461 と S D 6358 は同一の側溝であろう。南側溝 S D 8462 は幅約 1 m、深さは調査区東端で約 25 cm で、西にいくほど浅くなる。約 24 m 分を検出した。西で若干南にふれる。S D 8462 が S D 8461 に平行していると仮定した場合、その位置は、第 58-1 次調査において壁面で確認した S F 6360 の南側溝 S D 6359 の北約 3.8 m にある。S D 8462 と S D 6359 は別の溝であろう。なお、第 79 次調査区では遺構面が後世削平されていたので、両側溝と先行条坊西一坊大路西側溝は遺存しなかった。

区画 B 第76次調査(『概報25』)ではその存在を否定したが、区画 A の南に別の方形区画(区画 B)が存在した。区画 A 南辺の塀 S A 7000 の東 2 分を北辺とし、東辺を塀 S A 8430、南辺を塀 S A 8465、西辺を塀 S A 8464 で閉む区画である。

東辺の南北塀 S A 8430 は、第79次調査区で 9 間分(柱間 2.4 m)検出した。区画 A 東辺の塀 S A 6985 の南延長上にあり、南北 25 間・全長 60.5 m と推定できる。南辺の東西塀 S A 8465 は、先行条坊五条大路北側溝 S D 8461 の溝心から北約 1.8 m (6 尺) に位置する。西から 7 間分(柱間 2.5 m)を第80次調査区で検出したが、第79次調査区内では削平され残らない。東西 24 間・全長 58.8 m と推定する。西辺の南北塀 S A 8464 も、第80次調査区で 12 間分(柱間 2 ~ 2.5 m)検出した。S A 8464 の北延長上には、第76次調査区の掘立柱建物 S B 8201 の東妻柱列と南北塀 S A 8205 が位置する。『概報25』ではこれらを別々の施設と理解したが、一連の塀を構成し S A 7000 に接続する。この結果、S A 8464 は全長 60.5 m・推定 30 間となる。区画 B 北辺は S A 7000 の東から 29 間分・全長 58.8 m を共用する。こうして、区画 B の規模は、東西 58.8 m (200 尺)・南北 60.5 m (205 尺) に復原できる。区画 B は全体に北で西にふれる。これは S F 6360 の北側溝 S D 8461 のふれに近い。

掘立柱塀 S A 8466・8467 逆 L 字形の掘立柱塀である。S A 8466 は東西 3 間(柱間 2 m)・全長 6 m で、区画 B 南辺の塀 S A 8465 より新しい。S A 8467 は南北 5 間(柱間 1.5~1.7 m)・全長 6.3 m である。

掘立柱建物 S B 8200 第76次調査で検出していた掘立柱南北棟である。第80次調査区で南妻柱がみつかったので、桁行 6 間(柱間約 2.4 m)・梁間 2 間(柱間約 2 m)に規模が確定した。なお、東庇をもつ可能性は残る。

掘立柱建物 S B 8460 第80次調査区北端中央にある掘立柱南北棟である。西側柱は後世の削平により失われている。桁行推定 3 間(柱間 2 m)・梁間 2 間(柱間 2 m)である。

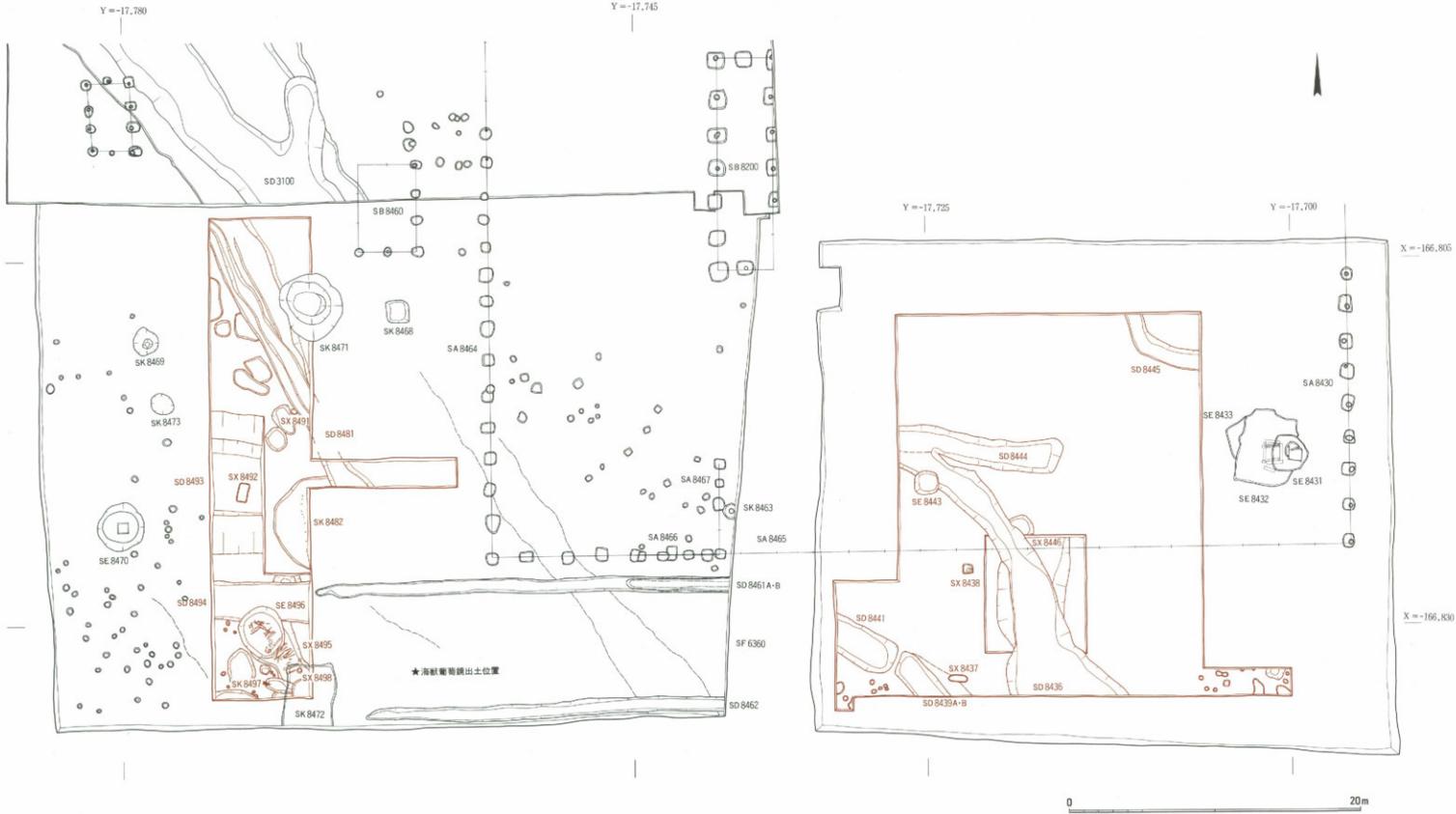


Fig.14 第79次・第80次調査遺構図 (1 : 250)

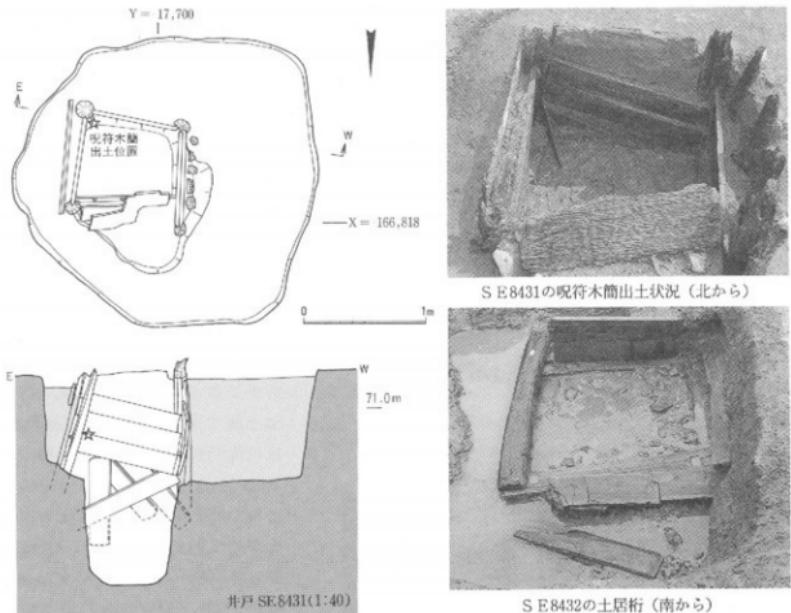


Fig.15 井戸S E 8431と井戸S E 8432

井戸S E 8431・8432・8433 第79次調査区東辺中央にあり、区画B東辺の堀の内側に位置する。3基の井戸は相互に重複関係があり、西（S E 8433）から東（S E 8431）の順で新しくなる。最も新しいS E 8431の掘形は深さ約1.8mで、開口部の直径は約2.4mだが、上から深さ1mのところで一辺1.5m前後の方形となる（Fig.15）。底面は砂礫層に達し、調査時も豊富に水が湧いた。井戸枠の構造は、まず方形の開口部の掘形の四隅に隅柱を立てる。隅柱には互いに直交する位置に2条の縦方向の溝を切り、そこに両端を楔形に加工した横板（全長90cm・幅約20cm・厚さ約2cm）を数枚落とし込む。このタイプの井戸枠は、一般的には隅柱の下に土居桁を置き、その四隅にあけた穴に隅柱の先をはめ込むが、S E 8431の隅柱は掘形に直接差し込まれる。そのため構造的に不安定となり、かつ井戸下半部の掘形がむき出しへなるので、井戸枠の西・南・東面の外側に、先端を楔形に加工した縦板を数枚打ち込むか、挟み込んで井戸枠を保護する。それでも北面の井戸枠は裏込めの土圧に耐えきれなくなったので、杭と梁で修理している。井戸枠内の埋め土から国内初見の星座「羅囲九星」を描いた呪符木筒が出土した。井戸の埋め土は均質で、一気に埋め戻されたようである。

S E 8431以前には、ほぼ同位置にS E 8432があった。掘形は上面で一辺約4mの方形をし、深さ1.8mある。本来は土居桁隅柱溝落とし込み横板組の井戸枠を設置した井戸だが、大半の横板と隅柱が抜き取られ、北面の横板が下2段とその下の土居桁（一辺約1.3m）がほぼ原位置で残されていたにすぎない（Fig.15）。井戸底には石が敷き詰められていた。S E 8432と、S

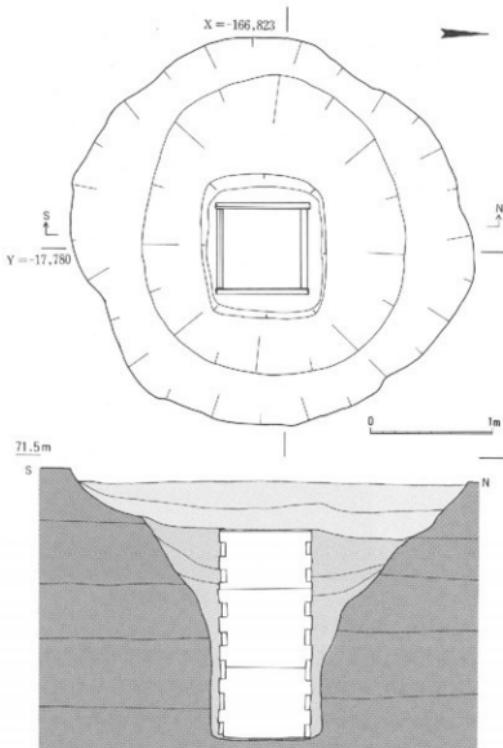


Fig.16 井戸 S E 8470 (1 : 40)

戸枠材の1枚には原本の皮に近い白太が残されており、年輪年代測定の結果、天武十一(682)年に伐採されたことが判明した (pp.31~32参照)。

土坑 S K 8471 S B 8460の西南に位置する。直径4.6m・深さ1.3mのすり鉢状である。多量の土器とともに、木簡1点と削り屑191点、木製品などが出土した。

土坑 S K 8473 S E 8470の北にある土坑。直径約1.3m。飛鳥IVの土器や甕が出土した。

そのほかの遺構

土坑 S K 8463 直径1mの掘形に長径33cm・短径30cmの曲物を据える。残存高25cm。南北塚 S A 8467の東側にあって柱穴と重複し、それより新しい。埋め土からは少量の土器片が出土した。小型の井戸の底か。

土坑 S K 8469 調査区西側にある、すり鉢形の土坑。直径1.6m・深さ0.8m。土器片が少量出土した。

このほか、中世の素掘り耕作溝より新しい土坑 S K 8468と S K 8472がある。

E 8431の井戸枠はともに隅柱溝落としみ横板組であり、横板の大きさが一致する。しかも、前者は土居桁を残すが隅柱を欠くのに対し、後者は逆に土居桁を欠くが隅柱を残す。S E 8431の井戸枠と隅柱は、S E 8432のそれを再利用した可能性が高い。

S E 8432以前にS E 8433があつたが、大半をS E 8432に壊され、井戸枠などは残らない。

井戸 S E 8470 第80次調査区西辺中央にある井戸 (Fig.16)。掘形は上面で長径約2.5m、短径約2.2mの楕円形をしているが、深くなるほど狭まり、底部では一辺約1mの方形となる。深さは抜き取りを含めて約2.2mである。蒸籠組みの井戸枠 (枠板全長65~75cm・幅48~65cm・厚さ4cm) が3段残されていた。上下の井戸枠同士は太枠や釘で連結せず、単に重ねて、裏込めの土で安定させている。枠内からは完形土器3点と軒丸瓦1点の他、少量の土器片、ヒョウタンなどの植物遺体が出土した。井

遺物

木簡、瓦、土器、木製品、金属器などが出土した。

木簡 合計193点出土した。2点を除き全て削屑である。削屑はいずれも細かいものばかりで、内容の判明するものはない。呪符木簡について詳しく述べる。

呪符木簡 井戸SE8431から出土した。井戸枠の中、検出面からの深さ約1mのところから、頭部を下にして南西隅柱に斜めに立てかけたような状態で発見された(Fig.15)。おそらくSE8431廃棄後、その埋め立て途中に投入されたのであろう。ほかに木簡や祭祀遺物などは共伴しなかった。

木簡は、長さが40cm近くにおよぶ長大なもので、頭部を方形に整形し、下端部両側を三角形に切り欠く。完形であり、とくに残りがよい。折敷の底板を木簡に転用したもので、文字面を表とすれば、裏面の下端近くの形状や長辺の側近くにある2つの穴(複数の板を連結するための穴)等に折敷の名残をとどめる。木簡が出土した井戸SE8431の埋められた時期を藤原宮期ないし直前期とする発掘所見に対して、折敷の年代観や木簡の書風には否定的な要素はない。

木簡の釈文は、次のようになる。

「**乎其** 388×53×6mm

(符籙) **鬼小** (符籙) **今** 」 032型式

符籙4つと文字5文字を記す呪符木簡である。他の呪符木簡に類例を探すと、全く同じものはないが、木簡の中央付近の「几」状の符籙の直下に「今」と記し、その斜め右下に「乎其」と字句をおいた配置が、権原市教育委員会の藤原京右京五条四坊の調査で出土した呪符木簡のそれに似ている(和田翠「奈良・藤原京右京五条四坊」『木簡研究』第15号 1993年)。

本木簡の符籙のうち、一番上に描かれた符籙については、中国宋代に成立した『天原発微』(『正統道藏』所収)に類似例を見いだすことができた。すなわち、同書に記された中国の星座のひとつ、「羅壠(らえん)」によく似るのである。そこには次のように書かれてある。

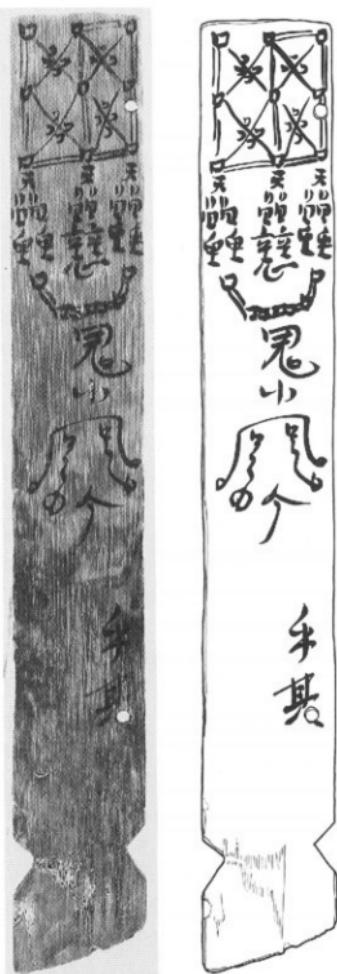


Fig.17呪符木簡(1:2)

○羅壠



九星在牽牛東。壅水潦。為灌溉之渠。

つまり、これは「洪水をせき止めて灌漑用川とする」の意である。『天原発微』の図形と木簡の符籙を比べると細かい点では若干の差異はあるが、上段の左側の横線が書かれていないという共通点などから、両者は同じものを指し示すと考えることができよう。木簡に中国の星座が記載されていると認められた例としては、大阪府・桑津遺跡から出土した7世紀中頃の呪符木簡がある。(王育成「桑津遺跡の道教木簡について」永島岬臣徳ほか訳『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会1994年)。本木簡はそれに次いで古い例となる。

『天原発微』のような図形は記されていないが、「羅壠」については、ほぼ同じ内容を『晉書』天文志、および『隋書』天文志にまでさかのぼって確認することができる。両書はいずれも唐の太宗から高宗期、7世紀中頃に成立した書物であり、本呪符木簡より少し前の時代のものである。したがって、木簡の符籙を「羅壠」であると考え、上記の意味に解釈しても年代的に不自然ではない。全体の内容は不明ながら、井戸から出土した点もあわせて考慮すると、この呪符木簡は水に関係する祭祀に使われたものである可能性が高い。

なお、木簡の符籙が「羅壠」であるとすると次の点で注目すべきものであり、大きな意義を有すると考えられる。すなわち、そこに描かれた星座「羅壠」は、二十八星宿のような著名なものではなく、珍しい星座である。それが正確に描かれ、かつ呪符として使用されている背景には、かなり体系的で正確な知識や思想の存在が必要であると考えられる。この点に注目するならば、この木簡は当時の日本に中国の最新の天文学の知識や思想が比較的早く輸入されていたことを示す有力な証言者として、重要な意義をもつといえよう。

土 器 上層遺構からは7世紀代の土師器と須恵器が出土した。また、これに混じって弥生土器や古墳時代の土器もある。ここでは、遺構出土土器について概略を述べる(Fig.18)。

井戸 S E 8432出土土器 抜き取り穴から古墳時代の土器と共に7世紀代の土師器杯C・G、壺A、瓶、須恵器長頸壺片が少量出土したのみである。出土量が少ないために時期の決め手に欠けるが、土師器杯Cは飛鳥IVの特徴をそなえている。

井戸 S E 8431出土土器 挖形から土師器杯A・C、須恵器杯B・同蓋、杯G蓋、壺、埋め土からは土師器杯A・C・G・H、壺、須恵器杯B蓋、杯G蓋、広口壺が出土し、抜き取り穴から土師器杯D、壺、須恵器平瓶が出土した。須恵器杯B蓋をみると、挖形からはかえりのあるものが、埋め土からはかえりのあるものとないものが各々出土している。これらの土師器杯A・C、須恵器杯B・同蓋などはおおむね飛鳥IVの特徴をそなえている。

五条大路 S F 6360側溝出土土器 (Fig.18 1~15) 1・2・6・9は北側溝S D 8461から、その他は南側溝S D 8462から出土。土師器杯Cは、外側調整は口縁部をヨコナデするのみで、外側のヘラケズリやミガキ調整はすでに省略されている。法量には口径12cm前後のもの(1・2)と、15cmのもの(3)とがある。杯H(4)は口縁部をヨコナデし、底部外側をヘラケズリする。須恵器杯G(6・7)は、底部外側をヘラキリのまま未調整。杯G蓋(5)は、かえりが口縁端面の内側につくもので、頂部にはヘラケズリした後に小さな宝珠形のつまみをはり

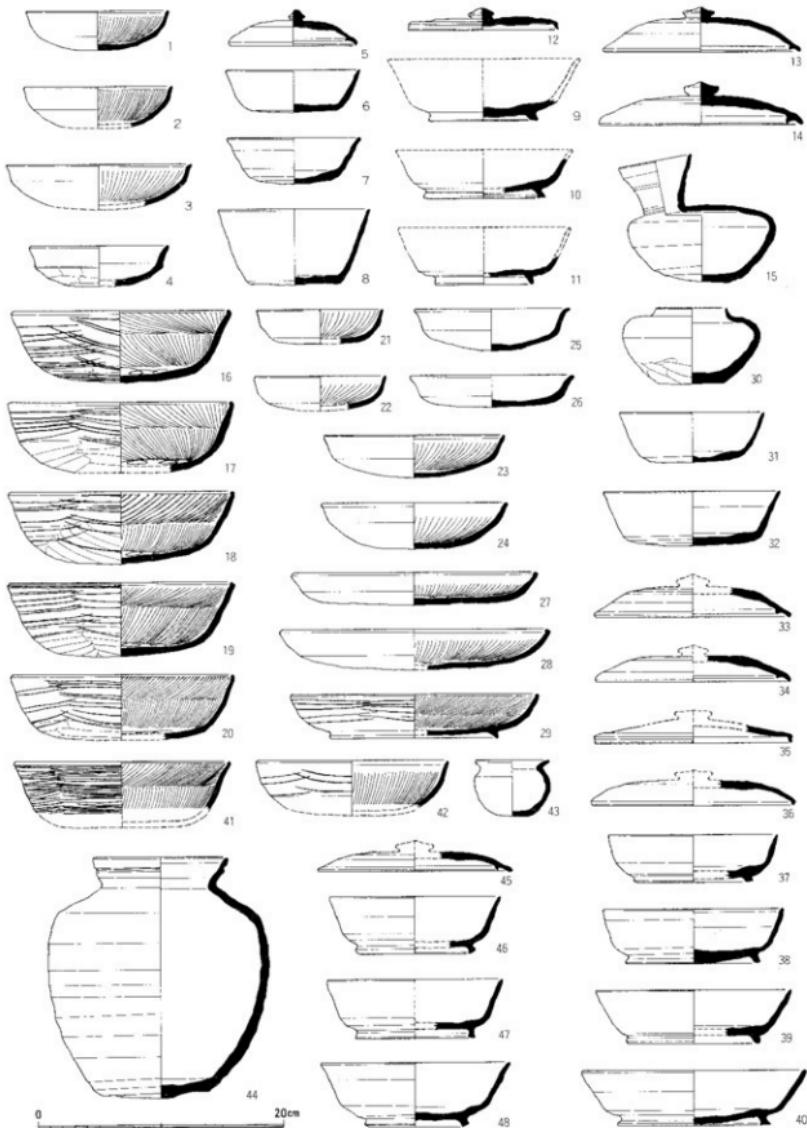


Fig.18 第80次調査区上層遺構出土土器 (1 : 4)

つける。椀A（8）は底部外面をヘラキリの後、粗くナデる。杯Bはいずれも口縁部を欠いているために全形を知ることはできないが、高台の断面形には角張るもの（9・10）、尖り気味になるもの（11）などがある。杯B蓋には、かえりを持ち、つまみの頂部がやや尖ったもの（13・14）と、かえりのないものがあり、前者のほうが多い。また、かえりのないものには通常のものに比べ、扁平に作るもの（12）もある。平瓶（15）は外面体部下半はヘラケズリの後ヨコナデ、底部はヘラキリ未調整である。これらの土器は、飛鳥IVの特徴をそなえる。

土坑S K 8471出土土器 (Fig.18 16~40) 土師器には、杯A・C・D・G・H、皿A・B、高杯、鉢、甕、瓶など、須恵器には杯A・B、杯B蓋、杯G、鉢、短頸壺、長頸壺、甕などがある。土師器杯A（16~20）は、口径17.4~18.0cm・器高5.3~6.1cmの杯A Iのみが出土した。外面は底部をヘラケズリし、口縁部から体部下半にかけて比較的密なヘラミガキを施す。内面は底面にラセン、口縁部に二段放射暗文を施す。16は底部にもヘラミガキをし、また、墨書きがある。杯Cは、口径15cm前後・器高3.5cm前後のもの（23・24）と、口径10.5cm前後・器高2.8cm前後のもの（21・22）がある。外面調整は、口縁部をヨコナデするのみである。口縁部だけをヨコナデする杯Gは、器高の高いもの（25）と低いもの（26）がある。皿A（27・28）は口縁端部が内側に肥厚する。外面調整は口縁部をヨコナデするのみである。皿B（29）は、口縁端部が肥厚する。内面には細かい二段放射暗文とラセン暗文を施す。外面はヨコナデの後、ヘラミガキをする。須恵器杯G（31）は底部をヘラキリ未調整、杯A（32）も底部ヘラキリのまま。杯Bは高台がやや外方に踏ん張ったもの（38~40）とそうでないもの（37）がある。杯B蓋は、いずれもつまみの形状は明らかでないが、かえりを持つもの（33・34）と持たないもの（35・36）が数量的に相半ばする。短頸壺（30）は、体部下半をヘラケズリの後、ミガキをして平滑に仕上げる。これらは良好な一括資料で、飛鳥IVに位置づけられる。

井戸S E 8470出土土器 (Fig.18 41~48) 挖形から少量の土器が出土した。掘形からの出土土器で図示できるのは、須恵器杯B蓋（45）のみである。井戸枠内埋め土からは、土師器杯A（41）、杯C（42）、小壺（43）、須恵器杯B（48）、短頸壺（44）などが出土した。

土師器杯A（41）は外面を密にヘラミガキする。杯C（43）も外面を粗くヘラミガキする。井戸枠抜き取り穴からも若干の土器が出土した。須恵器杯B（46・47）がある。いずれの土器も飛鳥IVの中でおさまる。

瓦類 出土した瓦は、第79・80次両調査区をあわせて、丸瓦35点（5kg）、平瓦101点（14kg）、軒瓦3点である。丸・平瓦は重量で各々1・2枚分程度にすぎず、ごく微量である。これは、これまでの西方官衙南地区での瓦の出土傾向と合致する。

軒瓦はすべて第80次調査区から出土した。藤原宮所用軒丸瓦6278Dと川原寺創建軒丸瓦601Bが1点づつ、藤原宮所用軒平瓦6641Eが1点ある。軒丸瓦6278Dは井戸S E 8470の井戸枠内埋め土から出土した（Fig.19）。井戸枠内からは他に瓦片は出土しておらず、井戸枠抜き取り穴から丸瓦小片が1点出土したにすぎない。6278Dは藤原宮所用軒瓦の産地別分類Gグループ（『報告II』）に属し、近江産と推定される軒丸瓦である。後述するようにS E 8470井戸枠材の伐採年が天武十一（682）年に定まり、井戸枠内から出土した土器は飛鳥IVである。6278DをはじめとするGグループの軒瓦が、藤原宮所用軒瓦でも古い段階に位置づけられる蓋然性を示唆するだろう。

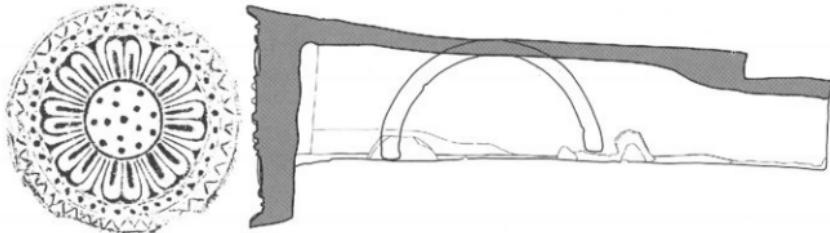


Fig.19 井戸S E8470出土軒丸瓦6278D (1:4)

木製品 土坑S K8471から、漆器、刎り物の箱、杓子、工具の柄、横柾、縦横木、独楽などが出土した。ほかに、井戸S E8470から自在鉤が出土した。

金属製品 鉄釘、鉄鐵、海獸葡萄鏡などがある。海獸葡萄鏡 (Fig.20) は、第80次調査区から出土した。儀鏡化し、内区だけが独立した小型鏡である。面径3.79cm、重さ11.1g。腐食がかなり進んでおり、状態はよくない。鏡の回りに図像を4つ配置するが、鋳上がりがきわめて悪いため細部表現は模糊としており、図像の違いを判別できない。類例に坂田寺出土例（坂田寺第6次調査『概報21』）や樋原市四条大田中遺跡出土例（2面）がある。

非破壊的手法による微小領域蛍光X線分析によるさび層表面からの分析をおこない、次の結果を得た (Tab. 4)。ただし、分析値は、鏡の製作当初の成分を示すものではないので取り扱いに注意を要する。注目すべきは、アンチモンが4～5%程度含まれることである。この鏡に類似する坂田寺出土鏡においても、3～4%程度のアンチモンが含まれている。アンチモンは、この時代の小型鏡の成分的特徴を考えるキーになる可能性がある元素だろう。

なお、この小型海獸葡萄鏡は、出土位置が先行条坊五条大路の路面にあたるので、路面上での祭祀に関連する可能性もあるが、掘形に埋納された形跡はなかった。

井戸S E8470井戸枠材の年輪年代測定

井戸S E8470には、総数12枚のヒノキの板材が井戸枠として使われていた。このなかから、板材1枚を選定し年代測定をおこなった。材種はヒノキであった。この板材には、3cmの辺材部が残存していたので、樹皮直下の年輪が遺存しているものと判断した。この板材から計測した年輪層数は258層分であった。この試料パターンとヒノキの曆年標準パターン（前37年～845

Tab. 4 成分分析結果

	(%)
銅 (Cu)	91.6
錫 (Sn)	0.7
鉛 (Pb)	0.9
ヒ素 (As)	0.7
銀 (Ag)	0.1
ビスマス (Bi)	1.6
アンチモン (Sb)	4.0
鉄 (Fe)	0.4

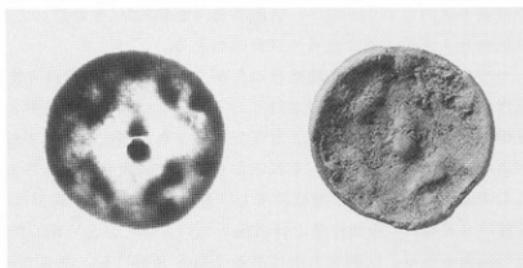


Fig.20 海獸葡萄鏡 (実大: 左はX線透過写真)

年)との照合の結果、258層分の試料パターンは、暦年標準パターンのなかの425年～682年の年代位置で照合が成立した。よって、この枠板材は682年(天武十一年)に伐採したヒノキを加工したものであることが判明した。

(埋蔵文化財センター：光谷拓実)

まとめ

第79・80次調査によって、西方官衙南地区の東南部の状況がかなり明瞭になった。

区画Bの規模 区画Bの規模は東西幅200尺、南北幅205尺に復原できた。その北辺の堀は区画Aの南辺の堀 S A 7000を利用しており、200尺という数値は区画Aの南北幅、あるいは東西幅の%を意識していると考えられる(第76次調査では、区画Aの計画尺に大尺を想定したが、小尺計画とみた方が整合性が高い)。区画Bの西辺の堀 S A 8464が S A 7000に取り付く柱位置は、その西に一間分の柱を欠いているので、区画Aの南門であろう。

一方、区画Bの南北幅は205尺と東西幅より若干長い。これは区画Aの北辺堀 S A 1215を先行条坊五条々間路南側溝心から6尺で設定したことと同様、区画Bの南辺堀 S A 8465を先行条坊五条大路北側溝 S D 8461Aの心から6尺で設定したことによるのであろう。区画B内には南北棟建物 S B 8200と井戸 S E 8431～8433がある。S B 8200の北妻柱は、北辺の堀 S A 7000から南に90尺、棟通りは西辺の堀 S A 8464から60尺離れた位置にあたり、計画的な配置がうかがえる。区画B内でみつかった施設は少ない。しかし、その東半が後世大きく削平されていたことを考慮すれば、本来さらに複数の建物などがあった可能性はある。

藤原宮の内裏東官衙地区では、東西幅約66m、南北幅約72mの官衙区画が南北に3つ並ぶ(第78次調査・pp.5～16参照)。区画Bの規模はそれに匹敵し、区画Aの規模はそれらを大きく上回る。しかし、区画A・Bの機能を決定できる証拠は、まだみつかっていない。

区画Bの年代 区画Bはいつ造営されたか?。区画Aは、その北辺の堀 S A 1215が宮内先行条坊五条々間路に規制されているので、従来から藤原宮直前期に設置されたと考えられてきた。区画B内の井戸 S E 8431・8432の掘形から出土した土器は飛鳥IVの土器であり、埋め土から出土した土器は飛鳥IVでもVに近い様相をもっている。また、S E 8431の井戸枠埋め上から出土した呪符木簡も、転用された折敷の年代観や木簡の書風は、これら土器の年代観と矛盾しない。したがって、これらの井戸は、藤原宮直前期に設置されたとみるのが妥当であり、区画Bもほぼ同時に計画・造営されたと考えられる。

ただし、区画Aの規模を東西幅300尺、南北幅200尺と完数値で設定し、さらに区画Aの南門の位置と区画Bの東西幅が、区画Aの南北幅200尺を意識して設定しているとみれば、区画Aは区画Bより若干先に造営されたといえる。

つぎに、区画Bはいつ廃棄されたか?。S E 8431は井戸枠埋め土の遺物の年代からみて、藤原宮期の早い頃には埋め戻されている。そこに水の勢いを押さえる「羅堰」を描いた呪符木簡を埋めた意義は重要であり、そこで実施された祭祀の目的の候補として、一つには藤原宮造営が挙げられよう。区画Bもそれとともに廃棄されたとみることもできよう。しかし、区画Bの南辺の堀 S A 8465と重複するL字形の堀 S A 8466・8467のうち S A 8467が、北にある掘立柱建物 S B 8200の西側柱筋とほぼ揃っているので、S B 8200が宮期に残ってこれに堀を付設した可能性も残る。区画Bの西にある土坑 S K 8471も、飛鳥IVの土器を出土するし、井戸 S E 8470も、井戸枠の伐採年代から藤原宮直前期に掘られたことは間違いない。その廃絶年代は出

上した飛鳥IVの土器の絶対年代が藤原宮遷居までなのか、宮期に入るのか微妙な問題にかかっている。この問題の解決には、西方官衙南地区全体の土地利用状況と出土遺物の検討が必要であろう。

S A 8430からみた旧地表面の勾配　区画Bの東辺の堀S A 8430の南端から北に8間目の柱までの距離は18.3mある。柱穴の底面のレベルは南端で標高71.25mで、北に向かうほど高度を減じ、8間目で70.9mとなるので、柱穴底面の南北間の標高差は35cmである。S A 8430を造るために、藤原宮直前期の地表面の標高が近似し、そこから同じ深さの柱穴を掘り、同じ長さの柱を立てたと仮定すると、柱穴底面の南北間の標高差35cmは誤差と考えるには大きすぎる。旧地表面自体が北へ10mで-19cmの緩やかな勾配をもっていたと考えるのが自然である。このような試算は、藤原宮直前期と藤原宮期における旧地表面の復原に有効であり、整地が旧地表面の傾斜に沿う単純なものか、近似した標高にするためのものかなどを検討する際にも有効な資料となるだろう。

S F 6360と両側溝　宮内先行条坊五条大路S F 6360の幅員や両側溝については、西面南門S B 6350の位置を確定した第58-1次調査（『概報19』）で検出した北側溝S D 6358と南側溝S D 6359で語られてきた。その幅員は側溝心々間で13.5mとされたが、西面南門の建物心との関係では、南側溝の位置が南に偏っていることも指摘されていた。

從米の条坊の幅員に関する成果によれば、宮内先行条坊の幅員は側溝心々間距離で約9mのはずである。また、条坊道路心と門の建物心とが一致することは、東面北門と先行条坊三條大路S F 2400（第27次調査『概報10』）、および北面中門と先行条坊朱雀大路（第18次調査『概報6』）、においてすでに確認されている。したがって、S F 6360道路心と西面南門の心とが一致しない第58-1次調査の成果には矛盾があり、その矛盾は断面で確認しただけのS D 6359をS F 6360の南側溝と認定したことから生じたのである。

これに対して、第80次調査で検出したS F 6360の北側溝S D 8461と南側溝S D 8462の溝心々間距離は約9mであり、道路心の内への延長線上に西面南門の心がほぼのる。よって、これこそがS F 6360の両側溝といえるのである。S D 6358はS D 8461の延長線上にあるので、両者は同一の側溝であり、S F 6360の北側溝といえる。S D 8462の西への延長は、将来第58-1次調査の南北調査区の間を調査することによって確認できるであろう。

S F 6360は藤原宮造営において、西面南門から東に向かう宮内東西道路として踏襲されたはずである。その北側溝はS D 8461Aを掘り直したS D 8461Bと推定すると、南側溝S D 8462を先行条坊段階の溝とみることも可能である。そのように仮定するならば、S D 8461と同様に、同位置に掘り直した上層の溝が本来あって、これが後世削平されたということになる。また、先行条坊東一坊大路S F 3499（両側溝心々間距離約9m）が宮内南北道路S F 8625として踏襲される際、約22m幅に拡幅されたらしいことを参考にするならば（第38次調査『概報15』、第78次調査・本概報）、S D 8462の南に宮内東西道路用の南側溝を新たに設け、道路が南北に拡幅されていた可能性も残る。しかし、東面北門と北面中門の調査では、先行条坊三條大路S F 2400と先行条坊朱雀大路S F 1920が宮内道路として踏襲される際に、拡幅された証拠は発見されていないので、その可能性は低いと考えられる。

B 下層遺構（四分遺跡）の調査

第79次調査区においては、藤原宮期の遺構検出面より下層にどんな遺構がどのくらいの深さにあるかさぐるために、調査区の南端部を東西30m・南北2mにわたって掘り下げてみた。その結果、場所によって若干異なってはいるが、藤原宮期の遺構を検出した面から地山まで30cmと、下層遺構の検出面が意外に浅いことがわかった。そこで、東西21m・南北24mのかなり広い範囲を下層遺構の調査にあてた。のちに、遺構の性格を把握するために西南部で東西4.5m・南北8.5mを抜取したので、最終的に下層調査区の輪郭はかなり不整形になった。基本的な層序は、上から黒灰色土・黄褐色土①・炭混茶色土・黄褐色土②・黄褐色土③・暗緑灰色微砂（地山）である。なお、黄褐色土①の上面で、弥生時代から古墳時代にかけての遺構を、暗緑灰色微砂（地山）の上面において弥生時代中期の遺構をみつけた。

また第80次調査区においては、藤原宮期の遺構がなかった調査区西半部で、下層遺構の調査区を設定した。調査区は、東西7m（一部東西17m）・南北33mである。このうち南北部で、弥生時代中期の各種の遺構をみつけた。基本的な層序は、上から淡褐色砂質土・褐色粘質土・黒灰色粘質土・黒灰色粘土・暗緑灰色微砂（地山）で、古墳時代の遺構は暗褐色粘質土上面で、弥生時代中期の遺構は主として暗緑灰色微砂の上面で検出した。これらの調査により、四分遺跡についての重要な知見を得たので、主にこの成果について報告する（Fig.14）。

繩紋時代の遺構

第79次調査区の南半中央部にあるくぼみS X8446がある。規模は東西4.6m・南北7.6m以上・深さ0.9mである。弥生時代の溝S D8436や土坑と一部重なっていたが、人為的に掘り込んだ形跡はなく、自然のくぼみとみられる。下層には葉や枝を包含した暗褐色粘質土が、上層には緑灰色細砂が堆積していた。これらの堆積上からは北白川上層式3期を中心とした後期繩紋土器が出土した。

弥生時代中期の遺構

ムラの守^{モリ}一外濠と内濠 第79次調査区でみつけた溝S D8436は、下層調査区の南辺中央から西辺中央にかけて弧状に伸びている。第79次調査区南辺部で幅8.5m、調査区中央で幅1.6m・深さは1.3mある。他方、第80次調査区でみつけた溝S D8493の上幅は10m・深さ1.4mでS D8436の広い地点に近い。またその位置もS D8436のはば西延長部にあたっているうえに出土土器の時期が一致しているので、S D8436とS D8493は一連の溝であるとみてよいだろう。第80次調査区においては、大きく上下2つの埋め土を弁別するのに成功しており、下層の黒灰色土からは中期前葉から中葉にかけての土器が、上層の褐色粘質土からは中期後葉の上器がかなりまとまって出土した。よって、この溝は中期前葉に掘削され、中期後葉まで維持されたとみてよい。埋め土はすべて有機物を含む粘質土であって、砂屑をかんでいなかった。また、溝底が疊混灰色砂（地山）に達していた。この層位が、藤原宮期前後の井戸に水を供給する湧水の激しい層であった点を考慮すると、弥生時代においてもこの層からふんだんに水が供給されていた可能性は充分にあろう。以上の諸点から、S D8436・8493は水がある場所に供給するための溝ではなく、水がよどんだような状態にある溝だったとみられ、四分遺跡の生活域を他と画する環濠であったと認めてよいだろう。ならば、南約20mの第66-15次調査区（『概報23』pp.34~37）下層のS D7477も、その位置・埋め土・時期から、S D8436と一連の環濠であった可能性があ

るだろう。

第79次調査区の西南隅部でみつけた溝 S D 8439は、中期前葉に掘削され（S D 8439 A）、中期中葉か後葉に掘り直されている（S D 8439 B）。当初の溝は、幅3.0m・深さ1.3m、再掘削された溝は幅2.0m・深さは1.1mであった。S D 8439の西0.3mに溝 S D 8441があって、幅2.5m・深さ0.6mとS D 8439に比べて浅い。出土遺物は少ないが、中期後葉には掘られていたらしい。第80次調査区の溝 S D 8494は、幅2.8m・深さ0.7mで規模が一致する。またその位置もほぼ対応し、時期も中期後葉から後期初頭と重複するので、S D 8441と一連であるとみられる。S D 8439とS D 8441・8494は連続していないので、水を流すための溝でなかったことは明らかである。しかも、これらの溝の南側は中期の柱穴や炭を包含した土坑などが一面に、かつ稠密に分布しているのに、この北側の地域にはほとんど生活遺構が分布しておらず、まさに対照的である。以上から、弥生時代中期において規模の大きなS D 8436・S D 8493を外濠、内側にあってムラを区画するこれらの溝を内濠とみなしてよからう。そして、溝幅が8.5m前後あったS D 8436が約1.6mと極端にその幅を狭める地点、そしてS D 8439とS D 8441が連接しない地点が、ともに第79次調査区にあっては線上に並ぶので、ここを四分遺跡の北東部に開いた出入り口とみなすことができよう。

^{ムラ}の水—井戸と木道 ムラ内の施設には、第80次調査区でみつかった木道S X 8495と、それと一連とみられる井戸S E 8496などがある。出土土器から、中期中葉から後葉にかけての施設である。S X 8495には、幅15cm・長さ1.1m・厚さ3cmほどの板材3枚の他、細い板材や太い枝などを、斜面に直交して敷き並べ、所々を細い杭で固定している。木道とみてよからう。このS X 8495の南に接してそれより新しい土坑S K 8497がある。埋め土から加工痕のある鹿の角が1本出土した。S E 8496は、直径3m・深さ0.6mの素掘り井戸である。埋め土から頭骨などの獸骨が多数出土したほか、井戸底からは、打ち欠きて体部に穴を開けた細頸壺が1点出土した。S E 8496の南東約3mに、底部を打ち欠いた中期後葉の壺形土器を据えた簡便な井戸S E 8498があった。

^{おくり}ムラの葬—お 墓 内濠の北側に埋葬施設が4基みつかった。

第79次調査区の土坑墓S X 8437は、一部S D 8439 Aの埋め土を掘り込んでつくられている（Fig.22-c）。土坑は長さ1.3m・幅0.5mで、深さ0.1m。土坑内では窮屈そうにおさめられた人骨がみつかった。頭を西に向いた仰臥屈葬である。その埋葬姿勢は、腕を折り曲げているなど中期に広く一般である。検出時に土坑上面で木質がみつかったので、木蓋をしていたらしい。骨の間からも土坑内からも、石製の武器は出土しなかった。

第80次調査区では土坑墓S X 8492が、S D 8493の上層の埋め土を掘り込んでつくられていた。長さ1.3m・幅0.7mほどの長方形の土坑に、屈葬状態で埋葬されていた人骨がみつかった。人骨等について細かな検討をまだ果たしていないので追って報告したい。

第79次調査区の環濠にはさまれた場所で、土器棺S X 8438をみつけた（Fig.22-b）。口縁部を打ち欠いてはずした壺形土器の体部を身とし、高杯形土器の杯部を蓋とする。傾斜角度は36度である。高杯形土器の脚部にも故意に打ち欠いた形跡がある。中期後葉に属す。

第80次調査区の中央部では、上器棺S X 8491をみつけた。壺形土器で、傾斜角度17度で埋められていた。中期後葉に属す。

弥生時代後期の遺構

第79次調査区西辺中央に、平面円形の素掘りの井戸 S E 8443がある。後期後半に属し、直径1.6m・深さ0.8mである。S E 8443の北側に後期初頭の東西溝S D 8444がある。西端では上幅2m・深さ1.1mあるが、次第に浅くなり調査区の中央でなくなる。溝S D 8445は、第79次調査区東北隅にある後期後半の溝で、上幅1.3m・深さ0.7m。灰色砂層で埋まっていた。

古墳時代の遺構

第80次調査区では、暗褐色粘質土上面で、S D 8481など南東から北西に向かう斜行流路を何条か検出した。これらは、北隣の第76次調査区で検出したS D 3100などにつながる。流路は錯綜しており、下層調査区が限られたこともあるて全体像を把握するには至らなかった。S D 8481は、西岸を検出しただけで、東岸は未検出。上層と下層に大別できる。上層は深さ30cm前後の浅いもので、5・6世紀の土器が多量に出土した。下層は深さ1.2m以上あり、遺物をあまり含まない。須恵器をともなわない時期である。

S D 8481の西に接するように、直径6m・深さ1mの土坑S K 8482がある。土坑中央にしがらみを弧状に設置する。流路の水を引き入れる施設だろうか。埋没順位は、S K 8482→S D 8481下層→S D 8481上層、である。ほかに、深さ15cmほどのくぼみ状の土坑がある。

遺物

繩紋土器と弥生土器、石器、木器、獸骨と鹿角がある。図示した土器を簡単に解説する。

繩紋土器(Fig.21)は、1～4が精製土器、5が粗製土器。1は波状口縁の深鉢で、口縁部に磨消繩紋を施し、頂部から沈線によるJ字紋が垂下する。2は注口上器か。3は波状口縁の深鉢。口縁頂部から貼付表現による逆J字紋が垂下し、短線紋を埋める。口縁部下には、沈線紋がある。4は深鉢で、口縁部に凹線紋、体部に凹線紋とL Rのからげ縄の繩紋を施す。5は内外面とも巻貝条痕後、ナデる。これらは北白川上層式3期～一乗寺K式のものである。

(平城宮跡発掘調査部：玉田芳英)

第80次調査区で出土した磨消繩紋をもつ弥生土器(Fig.22-a1)は、壺の体部上半である。近隣では唐古・鍵遺跡で出土しているが、分布の主体は三重県の鈴鹿山地から布引山地にある。鉢(a2)は、器壁の厚い粗製の土器である。口縁部外面には、二枚貝による条痕を施す。愛知県内に多く分布する。2点とも、四分遺跡においては、全く異系統の土器である。

土器棺S X 8438に用いた蓋は、脚部を打ち欠いてはずしたとみられる高杯杯部(Fig.22-b1)。杯部外面の調整法は、上方向ケズリ→縦横ミガキ。身は遺体を収納するために口縁部を打ち欠いていた壺(b2)。体部下半外面の調整法は、上方向ケズリ→縦ミガキ→最下段ナデ。これらの調整法は、中期後葉に四分遺跡を含む畿内に広まっていた手法である。

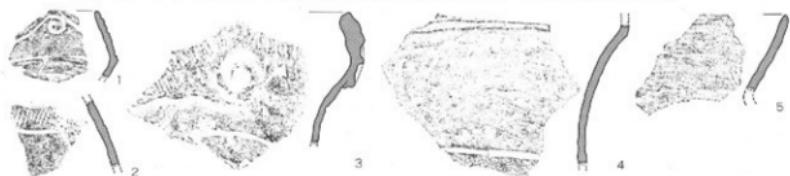


Fig.21 第79次調査区出土繩紋土器(1:4)

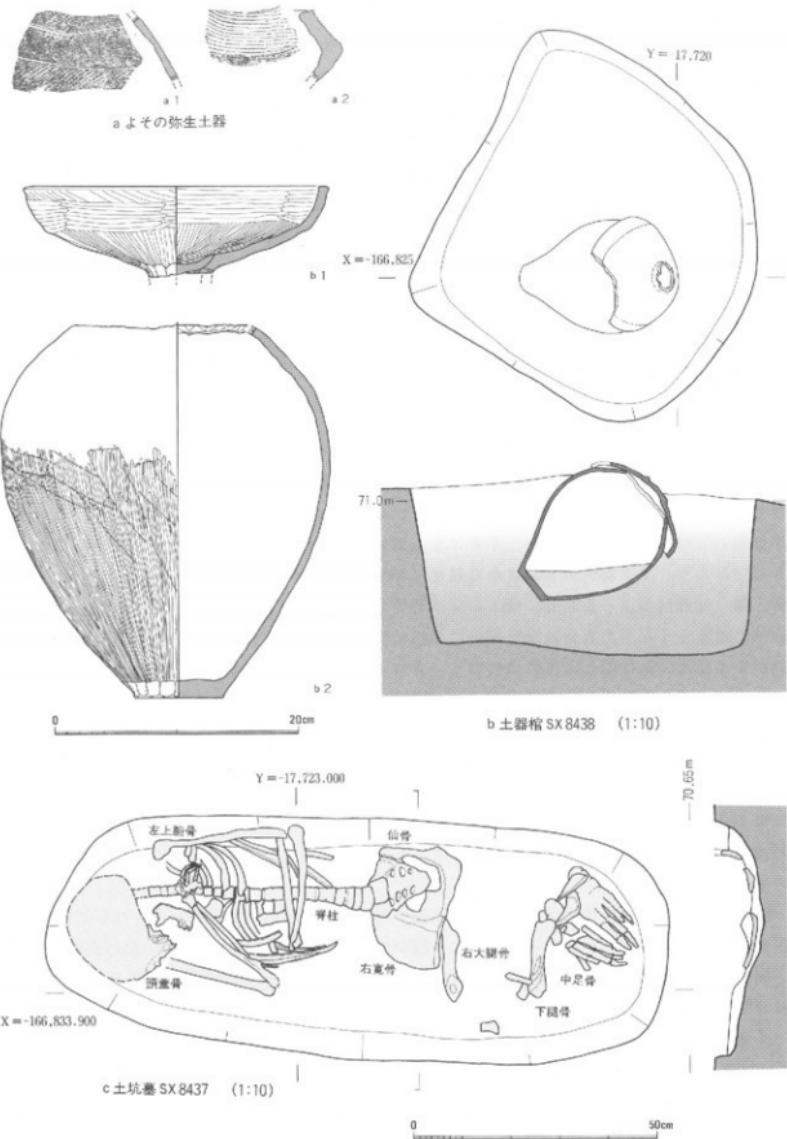


Fig.22 よその弥生土器・土器棺 SX 8438・土坑墓 SX 8437実測図

四分遺跡の土坑墓 S X 8437出土弥生人骨について

保存状態

頭蓋骨から足骨まで、ほぼ全身の骨格が遺存する。保存状況は極めて悪く、すべての骨が完全に腐食している。骨の硬質成分はほとんど残っていない。

骨格の所見

頭蓋骨：脳頭蓋は完全に押しつぶされた状態である。右側を下に、顔を南東方向に向けて埋置されたことは間違いない。下頸骨は左半分が上向き、頭蓋骨と下頸骨は逆閑していたようである。

胸骨：少なくとも胸椎から仙椎にかけては連結した状態で残るが、頭椎については腐食が甚しく、個々の骨の位置は定かでない。椎骨はいずれもひどく腐食し、個々の骨の形を十分にとどめず、ただシルエットとして存在するだけである。ほとんどの肋骨は腐って消滅するが、右肋骨の一部と左肋骨の一部がシルエットとして残存する。脊柱は前部が上向きに並ぶ。しかし右側の肋骨は横向き、左側はむしろ前向きに並ぶ。椎骨と肋骨の状態から、胸部は心もち南側に傾いていたのだろう。胸骨の存在は分からぬ。

上肢骨：右腕は上腕骨の骨頭部が頭蓋骨の下に潜っている。骨体は遠位部が上がりぎみに東を向く。肘の部分を強く曲げ（約30度）、前腕の骨は下頸骨の下あたりにのびる。手骨は頸椎の上あたりに散らばるが、個々の骨は完全に腐食した状態である。右の前腕骨は260mm程度の長さである。左腕は頭蓋骨の後方に上端があり、東方向にはほぼ水平に置かれ、肘を曲げ（約90度）、手は南の方向にあったはずだが、手骨は全く認められない。おそらく、右の肘の辺りにあったものであろう。左上腕骨のおおまかな長さは300mm。少なくとも左腕は外側を上に向いている。

骨盤：仙骨はちょっと右方に傾く。ほぼ脊柱の延長にあり、左右の寛骨は仙骨に関節した状態で、おそらく左右の寛骨は恥骨部分で連結していただろう。左寛骨はともかく、右寛骨は輪郭がよく見え、耳状面と大坐骨切痕がくっきりと識別できる。耳状面は低く大坐骨切痕は非常に小さい（明らかに男性の特徴である）。骨盤は、やや左側を立てた横向きの状態。

下肢骨：左大腿骨の存在は分からぬ。右大腿骨は骨頭が右寛骨の下に潜っている（おそらく、寛骨臼と連結した状態にあるのだろう）。骨体は真ん中あたりで壊れた状態になっている。骨体の中央部の断面が見える。骨体の前部が頭方に向き、後部が足方を向く。骨体中央部の骨質は厚そうだ（厚いところで10mm近く）。骨体の柱状性は強い（これも男性的特徴）。骨体の断面の南東方向約10cmの所に、大腿骨の下端のようなものがある。しかし、右の大腿骨のものか左のものかは不明である。

膝は、この大腿骨の骨端から東方向に長軸が約10cm位の梢円の範囲内にあったものであろう。しかし膝蓋骨は不明。そこから北方向に下腿がのびる（したがって、膝は折り曲げられた状態）。下腿骨については左右の骨が混じり合っているようで、脛骨と腓骨の個々の骨の位置、あるいはお互いの位置関係等について、いっさい不明。

くるぶしの位置はぼんやりと分かる。左右のくるぶしはお互いに接近しているようである。くるぶしの位置から、東南方向に左右の足が並んでいる。中足骨が並んでいる状態が分かる。だが、左右の足根骨や指の骨の分布状態は定かでない（つぶれて散らばった状態になっている模様である）。したがって、つま先の位置は正確には分からぬ。たぶんつま先は土坑の東端に接していたのだろう。

膝の位置と大腿骨の方向、膝の曲がり具合、下腿骨の方向、足骨の方向から見て、膝が不自然に強く屈曲していたことは確かである。また両脚は膝から下で重なっているように見える。この被葬者は、おそらく腰と膝を非常に強く曲げられ、おそらくは膝と足首を結ぶされた状態で土坑墓に押し込められるように埋葬されたのであろう。

歯：歯のかけらは、歯冠がよく残ったものが4個あり、その他に歯冠や歯根の微破片が数個ある。歯冠がよく残ったものは右の上顎側切歯、右下顎第一・小臼歯、右上顎第三大臼歯、下顎側切歯（エナメル質の一部なので左右は不明）である。上顎側切歯と下顎第一小臼歯の咬耗は強く、歯冠の1/2、あるいは1/3にまでおよぶ。しかし、第三大臼歯とおぼしきものは咬耗が弱く、まだエナメル質を露出しない。歯は全体に小柄である。第三大臼歯とおぼしきものも小さい。また下顎の切歯と第一小臼歯も小さい。ちなみに上顎の側切歯はシャベル状を呈する。

性別 審骨の形状から判断して男性の遺骨であろう。大腿骨の骨体の形状もそのことを示唆する。

死亡年齢 各長骨の骨端は確認できないが、仙骨の分節が完全に融合していることから、成人であったことは間違いない。歯の咬耗の状態から見て、少なくとも壮年の後半あるいは熟年に達していた可能性が指摘できる。

身体特徴 頭骨が腐食した状態で、しかも多くの骨は輪郭しか見えないため、詳しい特徴を読むことはできない。左上腕骨の最大長の概測値から求めた身長の推定値は155～160cmほどである。やや小柄な人物だったようだ。

埋葬姿勢 上半身を上向け、下半身を横向にした屈葬の状態で、上坑に押し込められるように埋葬されたものと考えられる。

(片山 一道：京都大学理学部)

四分遺跡（藤原宮第79次調査区下層）における花粉分析・寄生虫卵分析

四分遺跡において堆積土の分析をおこなったので報告する。弥生時代の遺構を中心に土坑墓S X 8437、土器棺 S X 8438、内濠 S D 8439、外濠 S D 8436、縄文時代のくぼみ S X 8446、で計20試料の採取をおこなった。分析は次の順で処理を施した。i)サンプルを探量する。ii)脱イオン水を加え攪拌する。iii)篩別により大きな砂粒や木片等を除去し沈殿法を施す。iv)25% フッ化水素酸を加え30分放置（2・3度混和）。v)水洗後サンプルを二分する。vi)片方にアセトリシス処理を施す。vii)両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。viii)検鏡・計数をおこなう。以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返しておこなった。

分析の結果、内濠最下層の上下、外濠下層上下と最下層、縄文時代のくぼみ最下層の6試料からやや多くの微遺体が検出された（Fig.23）。上坑墓と土器棺および内濠と外濠の上層部では寄生虫卵と花粉がほとんど検出されなかった。これらの堆積物がやや乾燥した環境下におかれていたために微遺体が分解したか、堆積速度が極めて速かった等の原因が考えられる。

内濠の最下層、外濠の下層から、回虫卵と鞭虫卵が検出された。いずれも試料（堆積物）1cm中に100前後未満であり、居住地周辺の汚染と考えられる。回虫卵と鞭虫卵しか検出できなければ、寄生虫卵密度が小さいために他の少ない種類が反映されなかったと考えられる。回虫症と鞭虫症は定住農耕生活によって蔓延し、弥生時代中期の四分遺跡の集落ではこれらの寄生

虫症が蔓延していたとみなされる。

内濠と外濠では著しく花粉組成が異なり、内濠では草本花粉が多いのに対し、外濠では樹木花粉の占める割合が高い。このことから、環濠集落の内側ほど樹木が少なく、外側に向かうほど樹木が多く分布していたとみなされる。内濠ではかなり裸地的景観が推定される。乾燥地を好む人里植物であるアカザ科ヒュウ科が生育していることから、やや乾燥していたか水はけのよい集落域が推定される。また、クワ科イラクサ科は人里に多いクワであるかと思われる。外濠下層ではカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林の近接した分布が考えられ、集落の周辺に多くの森林が分布していたことが示唆される。

外濠最下層ではトチノキが多く下層とは大きく異なる。外濠が造られた初期の堆積物なので、元米カシ類を主とする照葉樹林が分布し、トチノキの生育する適潤地であったことが示唆される。縄文時代のくぼみ最下層ではカシ類やトチノキが優占するが、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）や針葉樹が少なく、自然度の高い森林が分布していたと推定される。水湿地草本は出現しておらず、水湿地は分布していない。

以上から、弥生集落が営まれる以前の縄文時代の四分遺跡は、カシ類を主とする照葉樹林が分布しトチノキの生育する適潤地が分布していたと推定される。弥生時代（Ⅲ期からⅣ期）になって内濠と外濠が営まれたのにともなって、周囲のトチノキは減少し、集落域を中心に草本の多い裸地が増加したとみなされる。

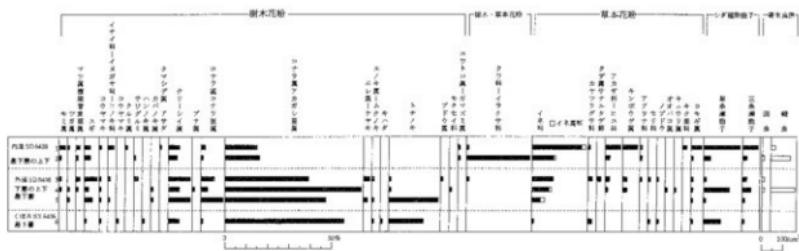


Fig. 23 組成図（花粉・孢子は花粉総数が基準）

（金原正明：天理大学附属天理参考館、金原正子・岡山邦子：古環境研究所）

ま と め

第79・80次調査区下層の調査で、弥生時代中期の四分遺跡について以下のことがわかった。

- ①四分遺跡の北東部に中期の環濠が2条であること
- ②しかも第79次調査区域が北東部に抜ける出入口の可能性がかなり高いこと
- ③環濠の周辺に土坑墓が2基みつかり、方形周溝墓以外にも成人が葬られたこと
- ④方形周溝墓以外の土坑墓の被葬者にも、従来知られている一般的な埋葬姿勢をとっているものがあること
- ⑤外濠を境に、外側は照葉樹林が広がり、内側は内濠を含めて裸地に近い状況であったことが、金原氏の分析で判明したこと

などを挙げることができる。周辺地域におけるさらなる調査の進展が切に望まれる。

5 西南官衙地区の調査

藤原宮西南官衙地区では、住宅改良事業の土地造成にともなう事前調査を2件実施した(Fig.13)。第77次調査区は、西南官衙地区の北辺ほぼ中央、西面南門から延びる宮内道路(先行条坊五条大路)のすぐ南に位置し、先行条坊西二坊々間路東側溝の検出が予想された。調査面積は、630m²である。第75~18次調査区は、第77次調査区の南南東に位置する。調査面積は、270m²である。また、二つの調査区とも四分遺跡の一郭を含め、藤原宮期の遺構面の下層で弥生時代から古墳時代の遺構の検出も期待された。

A 第77次調査

(1994年12月~1995年2月)

基本的な層序は、盛土・耕土・床上・灰茶色砂質土で、灰茶色砂質土上面で藤原宮期から古墳時代までの遺構を検出した。その下に、暗褐色粘質土(弥生包含層)・黒褐色粘土(弥生遺構面)・青灰色砂質土・黄褐色粘土(地山)がある。

藤原宮期または宮直前期の遺構 藤原宮期の遺構は、周辺の調査区と同じく稀薄で、先行条坊の西二坊々間路S F 1082の東側溝S D 3318を調査区西部で検出したにとどまる。S D 3318は、幅約50cmで検出面からの深さ20cmをはかる。同側溝は、北方では第5~7次調査(『報告II』)と第54~9次調査(『概報18』)でも検出しており、第54~9次調査での同側溝心は、 $x = -166,736$ で $y = -17,815.75$ であった。南方では第51~69~72次調査(『概報18・23・24』)で検出しており、第51次調査で検出した六条々間路との交差点での同側溝心は、 $x = -166,956$ で $y = -17,813.7$ であった。本調査で検出したS D 3318の溝心は、両者を結ぶ線のわずか5cm西になるので、これらが同一のものであることは、ほぼ間違いない。

飛鳥時代の遺構 土坑S K 8403と斜行溝S D 8411、井戸S E 8402~8405がある。土坑SK 8403は、浅い水たまり状で、中に自然石が数個掘えられていた。S K 8403の北辺には斜行溝S D 8411が接続する。S D 8411は幅約20cm、検出面からの深さ約25cmである。S K 8403からは飛鳥Iの上器が出土した。S D 8411が古墳時代の斜行大溝S D 570の西肩に沿うので、これらはS D 570埋没後に、その影響下に設けられた一連の施設と思われるが、残りが良くなく詳細な性格は不明である。S K 8403のすぐ西にある井戸S E 8402は、検出面での掘形直径約3.5m、検出面からの深さは約1.3mであるが、掘形は底から1m上で一辺約1.8mの隅丸方形平面になり、底に行くにしたがって狭くなる。上層埋め土から木杭や須恵器・土師器片を多数出土した。やはり隅丸方形に近い平面をもつや小さな井戸S E 8405は、S D 570の埋土を切る古墳時代以降のものであるが、遺物が少なく時期は特定できなかった。掘形は一辺約1.2mで、検出面からの深さは約1mをはかる。

古墳時代の遺構 大溝S D 570、掘立柱建物S B 8407~8408~8415、掘立柱塀S A 8409~8410、井戸S E 8401~8404がある。調査区中央を斜行する大溝S D 570は、幅約4m、遺構面からの深さ約50cmをはかる。南隣の第3次調査(『報告III』)でも検出していた古墳時代の大溝で、その下にある弥生時代の大溝S D 666による陥没と思われる。古墳時代には恒常的でなくとも時おりは、流路として機能していたものと思われる。S B 8407は桁行5間・梁間1間の小規模な掘立柱建物である。一部の柱穴は削平されている。桁行総長7.2m・梁間2.7mをはかる。S B 8408は、

桁行梁間とも 2 間の総柱建物で、柱間総長は 4 m と 3.8 m をはかる。柱穴掘形に 5 世紀後半の須恵器が入る。SA 8409 と SA 8410 はともに柱穴が一部削平されているが、柱間が 1.8 m 等間の掘立柱塀で、SB 8408 の北西と南西を区画した塀と思われる。SB 8408 とは方位にややずれがあるが、これを囲う塀であった可能性がある。調査区東部の下層調査区で検出した SB 8415 も、同様の方位のふれをもち、桁行は 3 間以上で柱間は約 1.8 m、梁間は 1 間で約 1.2 m の小規模な建物である。その北にある溝 SD 8416 は、幅約 1.5 m・深さ約 30 cm をはかる。砂が堆積し、SD 570 よりも古い。

井戸 SE 8404 は、掘形直径約 1.5 m、検出面からの深さ約 1.4 m をはかる。底面には板が敷かれており、大小 2 点の龜を含む 5 世紀末から 6 世紀の土器が出土した。調査区の西で検出した井戸 SE 8401 も、同様の底の狭くなる素掘り井戸で、検出面での掘形直径は約 2.2 m、検出面からの深さは約 1.2 m をはかる。埋め土から柄付きの木製鉗、ほぼ完形の須恵器 2 点と土師器 1 点が出土した。

弥生時代の遺構 弥生時代の遺構・遺物を検出するために、調査区の北東隅に下層調査区（面積 70 m²）を設定した。その中央部を南東から北西へ流れる砂溝が、時期が降るとともに狭くなることが示すように、この部分では活発な堆積があったと思われ、中世の耕作溝も西部よりも高い。このため、宮期以前の堆積である灰褐色粘質土の下で上記の古墳時代の遺構

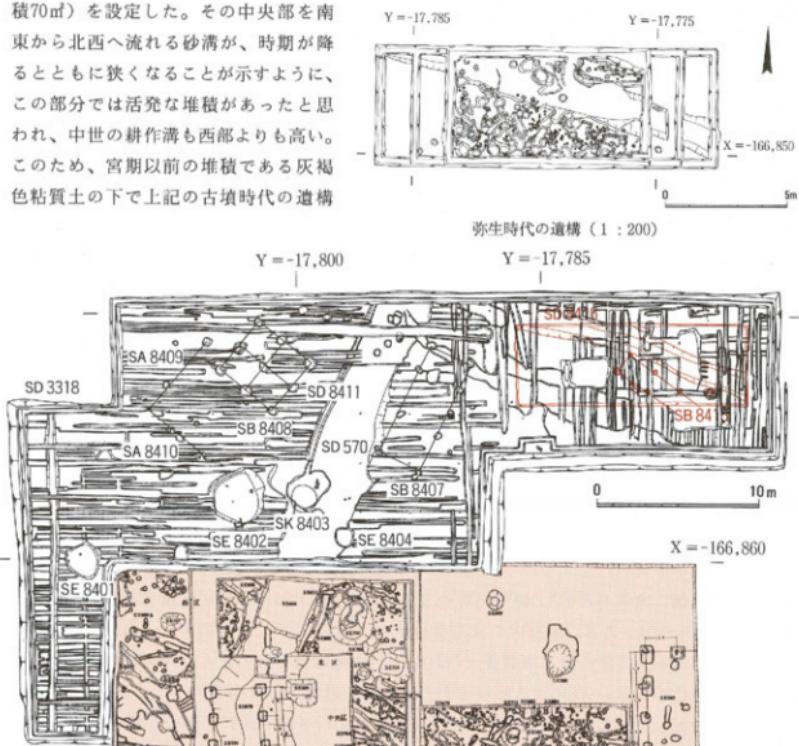


Fig.24 第77次調査遺構図 (1 : 300)

を検出し、さらにその下の黒灰色粘土で弥生時代の遺構を検出した。遺構は無数の柱穴群であり、明確な上部構造は復原できないが、盛んな生活域であったことが窺われる。また、同時期の遺物包含層は上層調査区全体に広がる。

ま と め 検出した遺構は、中世・藤原宮直前期、7世紀中葉・古墳時代・弥生時代の5時期である。藤原宮直前期では先行条坊西二坊々間路の東側溝を検出したが、宮期の明確な遺構は検出されず、西南官衙地区は利用密度が稀薄であるという従来の見解を裏付ける結果となった。古墳時代の遺構は比較的多く、建物3棟と掘立柱塀や井戸を検出した。これまでにも存在が推定されていた〔『報告Ⅲ』〕5・6世紀の古墳時代集落の一部と思われる。

B 第75-18次調査

(1995年3月)

基本層序は、盛土・黄茶色砂質土・灰茶色砂質土・暗褐色砂質土（遺構面）・黄茶色微砂土・黄褐色粘質土・暗褐色土（弥生包含層）・黒褐色粘土（弥生遺構面）・青灰色砂質土・黄褐色粘土（地山）。耕作溝は黄茶色砂質土と灰茶色砂質土の2面で検出した。調査区中央を南東から北西に流れる古墳時代流路は2時期あり、上層流路の底には4世紀末の遺物が含まれていた。藤原宮期または宮直前期の遺構 主な遺構に、掘立柱建物S B 8390と井戸S E 8391・8392がある。S B 8390は南北棟建物で、桁行5間以上で柱間は約1.8m、梁間1間で柱間は約3.3mをはかる。北でやや西にふれる建物方位や柱抜き取り穴から出土した土器などから、宮期あるいは宮直前期の建物と考えられる。井戸S E 8391は、掘形直径約1m、検出面からの深さ約50cmで、底に小石を敷いてその上に曲物を据えていた。その埋め土はS B 8390の柱抜き取り穴の埋め土とほとんど同じであるから、両者は同時期に廃棄されたものと思われる。両者の間には、残りが僅かではあるが、東でおこなわれた第75-6次調査〔『概報25』〕で検出された東西溝S D 8335と思われる溝が通っており、一体の施設であった可能性がある。大型の素堀り井戸S E 8392は、掘形直径約3m・深さ約1.8mあり、埋め土から飛鳥IVの須恵器が出土した。

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構・遺物を検出するために、調査区の西南部に下層調査区（面積12m²）を設定した。中央部に斜めの人工水路であるS D 8394が流れ、その周辺で無数の柱穴群や焼土の入る小土坑群S X 8396を検出した。

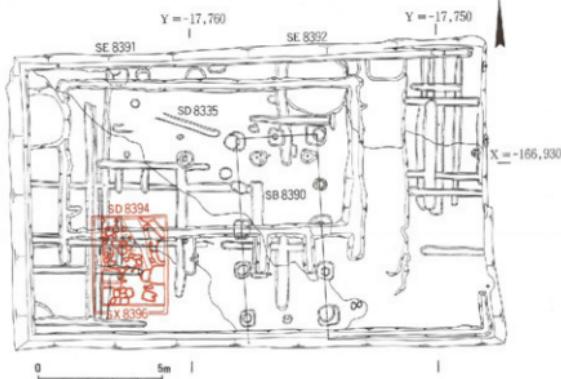
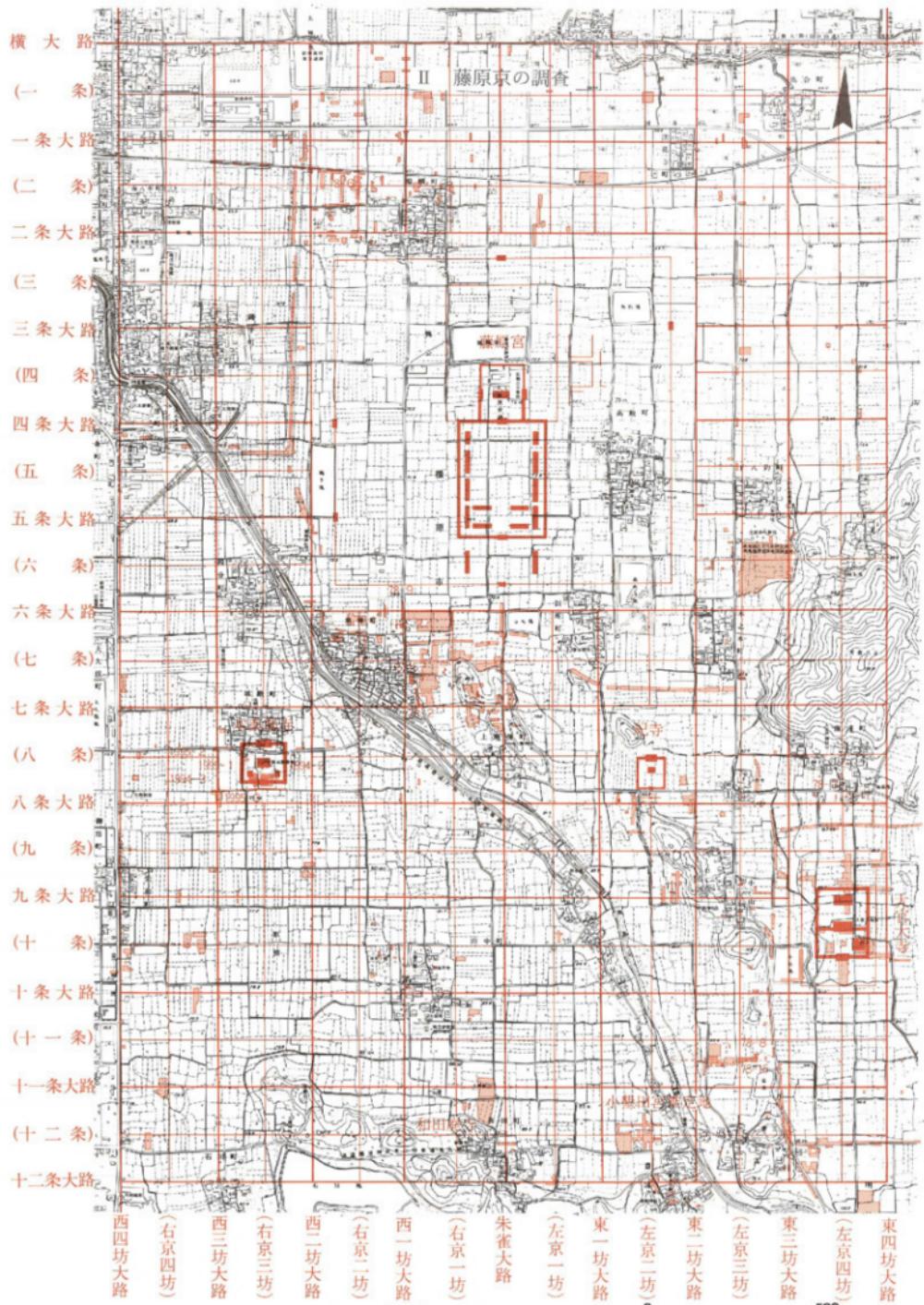


Fig.25 第75-18次調査遺構図 (1 : 200)



1 左京八条四坊（日向寺跡）の調査

天香具山の南麓、南浦集落に今も日向寺という寺があり、その周辺が日向寺跡と推定される。寺の沿革や寺号は不明だが、『扶桑略記』推古二十九（621）年二月二十二日条に、聖徳太子造立九院の一つとして「日向寺」の名があがっている。同じように『聖徳太子伝暦』は太子建立十一院の一つに数えるが、『上宮聖徳法王帝説』の掲げる太子建立七寺には入っておらず、太子信仰の隆盛とともに数に連なったと考えられる。日向寺の境内には塔跡の土壇が残り、かつては直径 2 m 以上ある心礎とおぼしき巨石があったが、明治初年頃に破却されたという。この塔跡推定地および現地形から、金堂の南東に塔をおいた伽藍配置が推測されている。1981年度に塔跡西側でおこなった発掘調査で、8世紀後半の土坑を確認した（『概報11』）。出土瓦からみて7世紀に遡る寺院であることは疑えない。1995年に2カ所で事前調査をおこなった。

A 第75-17次調査

（1995年2月）

本調査は、住宅建て替えに伴う事前調査として樋原市南浦町で行ったものである。調査地は、日向寺の推定塔跡土壇のすぐ南に接することから、伽藍に関する遺構の検出が期待された。

そこでまず土壇南辺に幅0.5m・長さ5mの東西方向の北トレンチを設定した。基本的な層序は、表土・茶褐色土・黄褐色土・黄白色砂質土（地山）で、茶褐色土層には瓦が含まれていた。黄褐色土層には、瓦器を含む南北方向の耕作溝が5条あり、この直下が地山であることから、古代の面は削平されているものと推定された。



次に、北トレンチより14m南に、約3m四方の南トレンチを設けた。基本層序は北トレンチと似るが、黄褐色土と地山の間に薄い黄白色粘質土層が入る。瓦の出土量は極端に少ない。

茶褐色土上面で、土坑群SX15、東西方向の耕作溝2条、小穴1個を検出した。SX15からは鰐羽口が出土した。黄褐色土層では、北トレンチと同じ南北方向の耕作溝4条を検出した。その下の黄白色粘質土層では、柱穴と思われるSX13と斜行する溝SD14を検出した。SX13の掘形は幅70cmを測り、深さ約60cmが残存していた。日向寺の塔跡土壇に隣接する発掘調査であったが、掘立柱柱穴1個を検出するに止まった。今後の調査の進展が待たれる。

遺物は、少量の瓦が出土した。丸瓦14点(1kg)・平瓦107点(6kg)である。

B 第78-3次調査

(1995年5月)

本調査は農業用倉庫の新築に伴う事前調査である。調査地は日向寺跡の西方に位置する。調査面積は15m²。

基本層序は地表面から、耕土・灰褐色土・褐灰色土・黄褐色土混り灰褐色粘質土・黄褐色土(地山)の順である。褐灰色土から黄褐色土までの各面で耕作溝を検出した他、黄褐色土上面で南北溝SD09と穴SX10を検出した。南北溝は穴より新しい。SD09は幅1.1m・深さ35cmで、溝内からは叩き目をスリ消した瓦が出土している。SX10は東西約1.4m・南北推定1.5m・深さ70cmで、柱抜き取り状の穴をともなうが、この穴だけでは柱穴であるのか土坑であるのか判断できない。なお、発掘区の南側は近代の暗渠によって破壊されている。

遺物は、少量の瓦と土器が出土した。瓦は、丸瓦6点(0.7kg)・平瓦42点(3.5kg)が出土した。

(日向寺関係史料)

○太子所造寺等。合九院也。天王寺。法隆寺。元興。中宮。母后宮 為寺也。橋寺。蜂岡。藤原勝林岡 池後。葛城。日向寺等也。口上。〔扶桑略記〕推古二十九年(621)二月二十二日条)

○始起四天王寺。(略)。法隆寺。(略)。元興寺。(略)。中宮寺。(略)。橋樹寺。(略)。蜂岡寺。(略)。池後寺。(略)。葛城寺。(略)。日向寺。或說 定林寺。(略)。法興寺。(略)。合十一院。本九院。〔聖德太子伝釋〕云々。

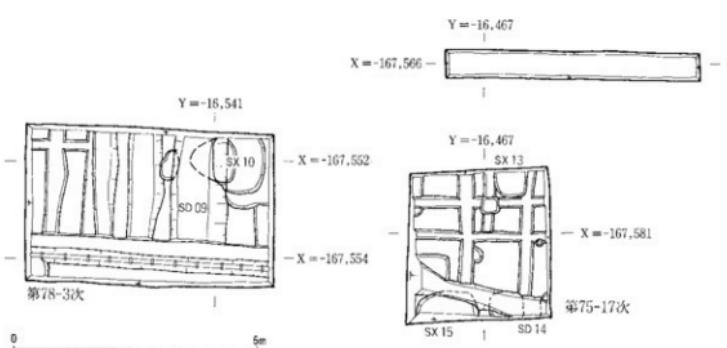


Fig.28 第75-17次・第78-3次調査遺構図(1:100)

2 左京十二条三坊（雷丘北方遺跡第5・6次）の調査 (第75-16次・第78-8次調査)

(1995年1月～4月、1995年12月～1996年1月)

当調査部では、県道飛鳥樋原神宮前停車場線の新設やそれに付随する諸工事にともなって、明日香村雷一帯で1991年より継続的に発掘調査を実施してきている。調査地は、雷丘から小山に続く丘陵の西斜面と飛鳥川右岸に至る平坦地である。

従前の調査によって調査地の西方には、中心部に東西5間・南北4間の正殿をおき、その東西に南北に細長い建物を2棟ずつと、南にも同規模の東西に細長い建物を配置し、その外側を一本柱塀で区画した東西長80mにも及ぶ大規模な施設の存在が明らかになってきた。これらの施設は、一部の建物に改作を加えながらも、7世紀後半から8世紀前半にかけて存続していたことも明らかになっている。また、正殿が藤原京左京十二条三坊西南坪・西北坪の南北中軸線上にあり、東西の脇殿がさらに十二条々間路を越えて北に延びることから、これらの施設は少なくとも二町占地であったと推定されるようになった。

以上のような成果をふまえながら、第75-16次調査は、大規模施設の東外郭の有無の確認や調査区内に想定される東三坊々間路の検出、さらには東南坪の状況を把握することを目的に実施した。調査地は6筆に別れた水田と畑で、西及び北に低く雑壇状に造成されており、西と東南の水田面の比高差は約2.7m、造構検出面では約2.85mとなる。このような地形のなかで工事



Fig.29 雷丘北方遺跡および周辺の調査位置図 (1 : 4000)

計画にあわせて南北約14m・東西約55mの調査区を設定した。調査面積は710m²である。第78-8次調査は、第75-16次調査区の東端北側に接して調査区を設定し、第75-16次調査で検出した遺構の続きを確認することを主な目的とした。調査面積は102m²である。

調査地の層序は、後述するように二時期の整地土層が存在するために、各々の水田や畠では異なっている。西の水田での層序は、上から耕土（20cm）、床土（15cm）、灰色砂質土（15～20cm）、灰色粘質土（15～25cm）、7世紀後半の整地土、灰褐色砂礫層・茶褐色粘質土層となる。灰褐色砂礫層は、南東から北西に向かって流れる古墳時代流路の堆積上で、流路は北東にある茶褐色粘質土を掘り込んでいる。整地土層は従前の調査でその存在が明らかになっていたもので、炭を含んだ淡青灰色砂質土や黄褐色粘質土からなり、厚さは最も厚い部分で約0.6mとなる。先述の古墳時代流路の凹んだ部分を埋めるように、調査区の西南部に拡がっており、南は調査区西端から東へ約18mの地点と、北は調査区西北隅を結んだ線の西南部となる。従って西の水田では、基本的に整地土層及び茶褐色粘質土層上面で遺構検出をおこない、一部については整地土層を除去して調査をおこなった。

西から2番目の水田での層序は、耕土（約20cm）、床土（25cm）、淡茶褐色土（15cm）、淡茶褐色粘質土（20cm）、褐色粘質土となるが、東半部では褐色粘質土の上に東からの整地上層である暗灰褐色粘質土が厚さ約15cmほど堆積している。ここでは褐色粘質土層及び整地土層上面で遺構検出をおこなった。

東端の畠地では、東から西へ2mの範囲は10～15cmの耕土の直下に地山（岩盤風化土）が現れる。地山は西に向かって傾斜しており、その傾斜面に水平に保つように盛土整地がなされている。整地土層は暗灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、赤褐色粘質土、淡青灰色砂質土などからなり、層の変わり目には拳大の礫を敷ききめている部分もあり、厚さは0.6m前後である。この畠地では地山の部分を除いた全域に整地土が認められ、整地上の下部は調査区東端から西へ22mの範囲の先の西から2番目の水田まで及んでいる。後世の耕地造成により削平を受けていたため、本来の厚さは不明であるが、丘陵傾斜面にある程度水平面を保つための造成は、それが壇壇状であったとしても相当大規模な工事であったと思われる。整地土層には炭化物や土器が含まれており、土器の年代から整地は7世紀前半におこなわれたものと推定される。この地区の遺構検出は、基本的に整地土層や地山の上面でおこなった。

遺構

第75-16次調査区

掘立柱建物6棟、掘立柱扉2条、溝2条、貯水施設、自然流路のほかに多数の土坑、耕作溝がある。これらの遺構は年代的に古墳時代、古代、中・近世の遺構に分類でき、古代の遺構はさらに7世紀前半、7世紀後半、8世紀の3時期に細分できる。

古墳時代の遺構 自然流路S D 3617と土器埋納坑S X 3600がある。自然流路S D 3617は先述したように調査区の西南隅にあり、南東から北西に流れる。北東の肩を検出したのみで、幅は10m以上、深さは1m以上となる。礫と砂が互層になって堆積し、相当の水量のあったことを窺わせる。堆積土の上半部から布留式土器が出土した。土器埋納坑S X 3600は調査区東寄りにある。地山の暗褐色粘質土を掘りくぼめた中に、布留式土器の大型壺を口縁部を東にして横位に埋めている。土器棺の可能性が強い。

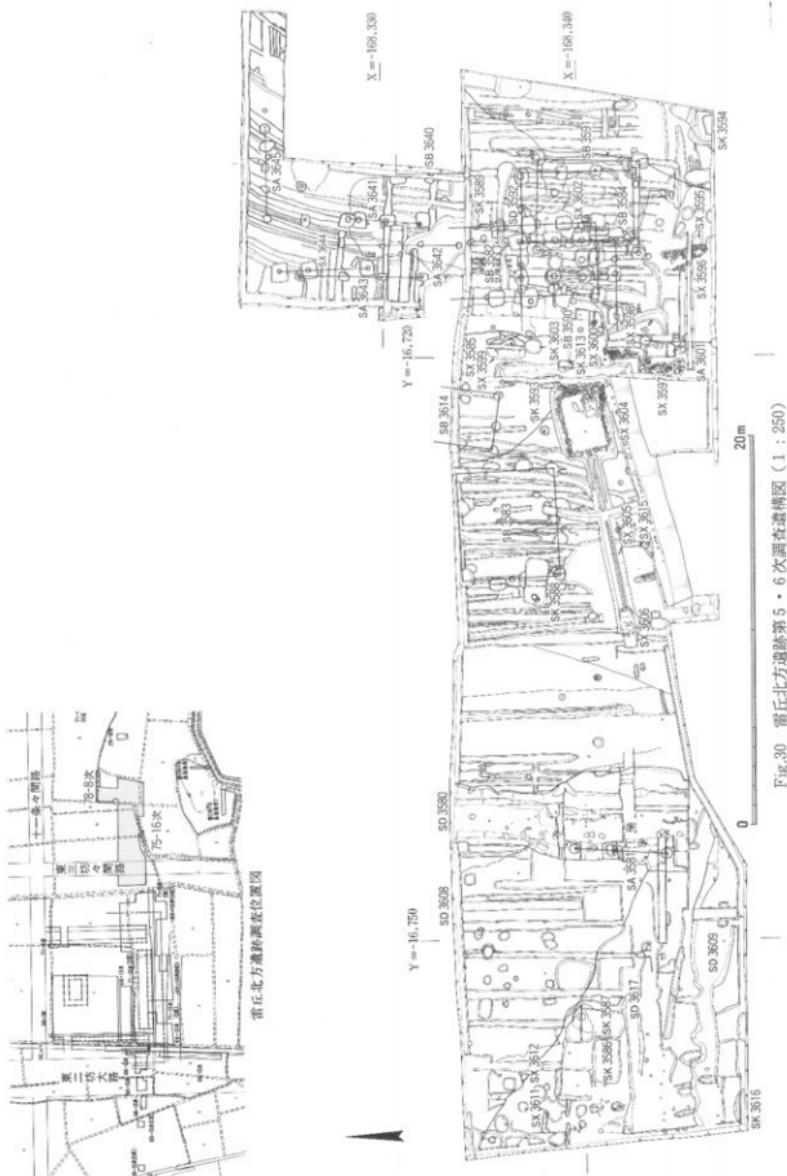


Fig.30 雷丘北方遺跡第5・6次調査遺構図(1:250)

7世紀前半の遺構 挖立柱建物 S B 3582・3583・3614、掘立柱塙 S A 3601、南北溝 S D 3580、土坑 S K 3603・3613がある。

建物 S B 3582は、桁行 5間以上・梁間 2間の南北棟建物で、東側柱列の柱穴の一部は 7世紀後半の土坑 S K 3589によって壊されている。柱間は桁行・梁間とともに 1.8m 等間である。この建物の西には不整円形の小土坑 S K 3603・3613がある。いずれからも飛鳥 I の上器が出上した。建物 S B 3583は、東西 3間・総長 5.5m、南北 3間・総長 5.0m の東西棟建物で、柱間は不揃いである。柱掘形からは飛鳥 I の上器が出上した。7世紀前半の整地土層は、この建物のすぐ東で途切れているが、柱穴の深さが 0.4m 前後と浅いことを考慮すると、建物部分を含むこの地区にも整地がおこなわれていた可能性が残る。

建物 S B 3614は東西 2間・南北 2間以上の建物で、方位は北で東にふれ、柱穴の平面形は円形である。塙 S A 3601の柱穴も同様の特徴をもつ。S A 3601の柱穴は整地土層の途中から掘られた可能性があり、建物 S B 3582より先行する遺構と考えられる。このほかに、整地土層の層の変わり目には、焼土の集中する部分 S X 3595・3602、礫敷を施す部分 S X 3596～3598、炭化物が堆積する部分 S X 3585・3599などがあるが、明確な遺構としては把握できなかった。

南北溝 S D 3580は、調査区中央西寄りにある。幅は 2.9～5.2m、深さは 1m 前後で、北流する。地山の軟らかい南半は幅広くあふれている。堆積土は大きく 3 層にわかれ、7世紀前半の土師器・須恵器とともに木簡削屑、木片などが出土した。なお、この溝の南辺は 7世紀後半の整地上層により覆われる。S D 3580から西には 7世紀前半の遺構を検出していないので、この溝は東に展開する 7世紀前半の遺構群の西を限る施設であった可能性がある。

7世紀後半の遺構 調査区東半部に延土物 S B 3584、溝 S D 3592、土坑 S K 3589・3594、中央部に土坑 S K 3588、西半部に塙 S A 3581、溝 S D 3608・3609、土坑 S K 3586・3587がある。

建物 S B 3584は桁行 3間・梁間 2間の南北棟で、桁行柱間は 1.9m 等間、梁間は 1.8m 等間となる。東西溝 S D 3592は、建物 S B 3584のすぐ北にある、深さ 0.1m 前後の東西溝である。土坑 S K 3589は、深さ 1m・南北 10m あり、S B 3582の柱穴を壊して掘られ、S B 3584建設時には埋め戻されているので、時期的には両者の間に位置づけられる。飛鳥 IV を最新とする土器が出土しており、この土坑にかさなる S B 3584や S D 3592の年代は、7世紀後半でも第 4 四半期以降 8世紀前半までの間と考えられる。S K 3589の性格は明らかでない。土坑 S K 3594も同様の時期であろうか。

土坑 S K 3588は、長辺 2.2m・短辺 1.2m の隅丸長方形をし、深さは 0.5m である。建物 S B 3583の柱穴を壊して掘られ、埋め土から 7世紀後半の土器が出上した。

南北塙 S A 3581は溝 S D 3580埋没後に作られた。いずれの柱穴にも直径 0.1m 前後の柱根が残る。柱間は北が 1.9m、南が 2.25m である。東西溝 S D 3609は、7世紀後半の整地の途中に掘られたもので、幅 1.6～2.1m・深さ 0.3m 前後である。東端で南北溝 S D 3580を掘り込む。整地にともなう湿気抜きの機能を果たしたと考えられる。南北溝 S D 3608は、幅 0.5m・深さ 0.2m の素掘り溝で、調査区南半には及ばない。從来の藤原京の条坊復原では、この位置付近に東三坊々間路の西側溝が想定されている。しかし、東側溝が検出されていないことや調査地の南と北には丘陵が間近にせまっていることから、この溝をにわかに西側溝とは断じ難い。ただ、7世紀後半の整地土層は東三坊々間路想定位よりも東に及んでいないことは注目される。

土坑 S K 3586は土坑 S K 3588と形態的に類似している。深さ0.4m。埋め上からは飛鳥IVの土器が出土した。土坑 S K 3587は不整形を呈し、深さは0.1m前後である。北半部には、焼土・木炭が集中しそれに混じって白く焼けた獸骨細片が出土した。このほかに整地土層の上面で特に炭化物の集中した部分が認められ、飛鳥IV・Vの土器とともに、大官大寺式軒丸瓦が出土した。

8世紀の遺構 建物 S B 3590・3591、溝状土坑 S K 3593がある。建物 S B 3590は南北3間・東西2間以上の縦柱建物である。南北の柱間が1.6m等間であるのに対しても、東西の柱間は東が1.8m、西が2.2mとなる。西の間を中央間とみなせば、本来は南北3間・縦長4.8m、東西3間・縦長5.8mの縦柱建物であったと推定される。柱穴には礎板がわりに扁平な自然石を据えたものや、礫と瓦で根巻きしたものがある。北側柱列の東から2番目の柱穴では奈良時代中頃の平城宮所用軒平瓦6691Aを根巻として使用していることから、この建物は8世紀後半以降の建築と考えられる。

土坑 S K 3593は S B 3590の西を画するように掘られている。西肩は削平され、現存最大幅は0.8m、深さは0.2m、長さは7.1mとなる。埋め上からは奈良時代後半の土器が出土した。

建物 S B 3591は4カ所の柱穴からなり、東半部の建物のうちでは、柱穴の重複関係から最新のものである。南北は5.2m、東西は4.7mの規模である。建物の四隅の柱穴のみ残り、他の柱穴は削平されたと考えることも可能であるが、柱穴の深さは0.4m前後残っているので、ここではやぐら状の建物を想定しておきたい。

このほかに調査区の西半には繩叩きの瓦を含んだ土坑 S K 3616や、小柱穴 S X 3611・3612などがある。

中・近世の遺構 東西・南北方向に掘られた中世の素掘り溝多数と近世の貯水施設 S X 3615がある。貯水施設は集水井 S X 3606、送水管 S X 3605、貯水槽 S X 3604からなり、全長は約14mとなる。東西1.5m、南北0.8mの範囲を玉石を組んで囲み、その上面に孟宗竹の割竹を敷き並べて集水井とし、そこで集めた水は孟宗竹2本の節を抜いた暗渠式の送水管で東の貯水槽へ送られる。貯水槽の側面は玉石積みの石垣とし、内法は東西約3m・南北約1.8m・深さ約1.9mとなる。貯水槽の東西長を3分割する位置に直径0.2m前後の丸太材が立て置かれていることから、ここに「踏車」などを設置し、揚水したものと考えられる。貯水槽の埋め上からは江戸時代末期の磁器が出土しており、当時この地域で耕作に従事した人々の水に対する苦労がしのばれる。

第78-8次調査区

掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条、などがある。いずれも時期決定の決め手を欠く。建物 S B 3640は、柱間1.8mの柱穴3個を確認した。東西棟の西妻であろうか。柱筋は7世紀後半の S B 3584の東側柱筋にほぼ揃うが、柱の礎盤に自然石をおく仕事は8世紀の S B 3590に共通する。南北塀 S A 3642・3643は、1.6mを隔ててほぼ平行する南北塀。柱間は、S A 3642が2.0m、S A 3643が2.1mである。東西塀 S A 3645は、柱間1.8mで3間以上であろう。柱列 S X 3641は、柱間1.85mで北で東にふれる。S X 3644は、北の柱間が1.5m、南の柱間が3.0mある。あるいは柱間1.5m等間の建物の東側の柱列であろうか。S A 3643より新しい。

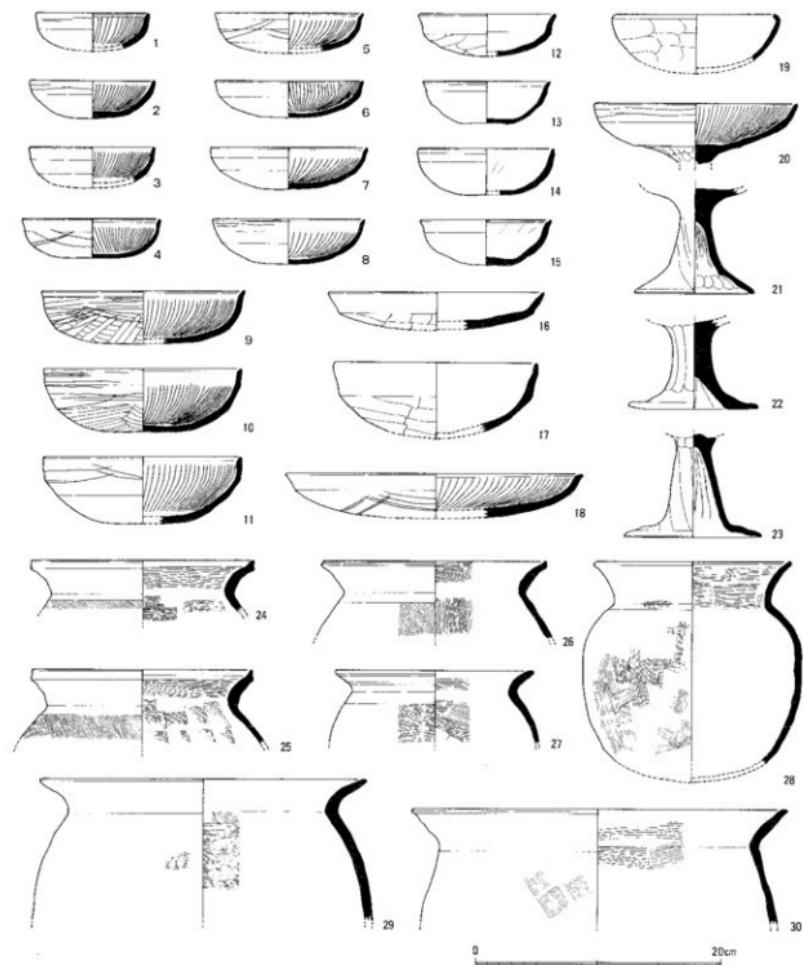


Fig.31 南北溝S D3580出土土器物 (1 : 4)

出土遺物

土器・土製品、瓦類、石製品、金属製品、木簡がある。
土器・土製品 土器には、古墳時代の布留式土器から近世の磁器に至る各時期のものが含まれているが、ここでは南北溝S D3580出土の上級器・須恵器及および第75-16次調査区の東半部整地土層出土の須恵器を図示した (Fig.31・32)。

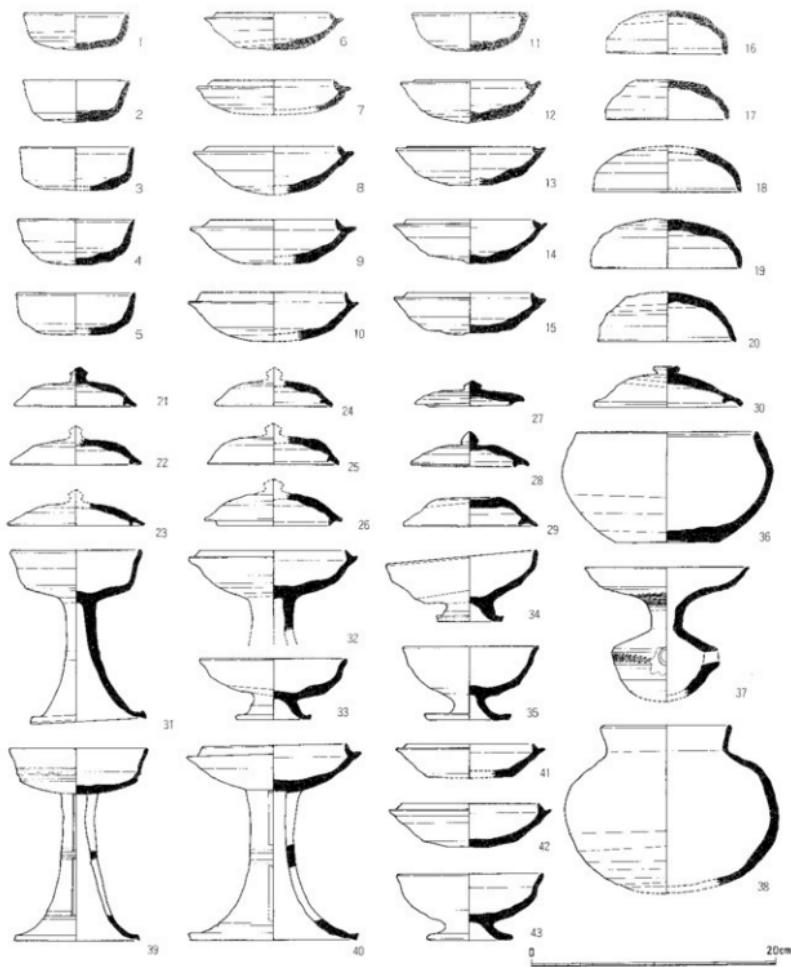


Fig.32 南北清S D 3580・東半部整地土層出土須恵器 (1 : 4)

土師器 すべて S D 3580から出土したものである。杯・皿・高杯などの供膳具と壺・瓶・甌などの煮沸具がある。

杯には、杯C (1~11)・H (12)・G (13~15)がある。杯Cは、口径16cm前後・器高4.3~5.5cmのC I、口径12.0~12.3cm・器高3.0~3.7cmのC II、口径9.0~11.0cm・器高3.2cm前後のC IIIの法量にわかれれる。外面調整では、C Iにはケズリを省略するもの (11)、C IIにはミガキを

施すもの（5）と施さないもの（6～8）があり、若干の時期差のある個体が含まれるものと推定される。杯Gは、底部外面は未調整とし口縁部にヨコナデ調整を施すものであるが、口縁外端面が沈線や凹線状になるもの（13・14）や、内端面に沈線を施すもの（15）などがある。

皿には、外面にミガキを加え、内面に放射暗文をめぐらした皿A（18）と、底部外面をヘラケズリし口縁部との境に稜をもつ皿H（16）がある。

高杯は、全形をうかがえるものはないが、杯Cを浅くした形の杯部に筒状の脚をとりつけた高杯B（21）、脚の外面に面取りを施した高杯H（22）、中空で太い筒部と脚端部を長く外方にのばした高杯X（23）がある。

椀H（11）は、内側に折り曲げた口縁端部を除いた外面にヘラケズリを施すものである。鉢II（17）は、口縁部にヨコナデ、体部下半は横方向にケズリを加える。甕（24～30）には、甕A・甕Bがある。図示したものはいずれも内外面にハケ目調整を残すもので、口縁端部を上方にひき延ばすもの（24・25）、内側に丸く小さく肥厚させるもの（26・27）、丸くおさめるもの（29・30）などがある。

須恵器　杯G（1～5）・同蓋（21・22・24～26・28・29）、杯H（6～15）・同蓋（16～20）、高杯蓋（23）、壺蓋（27）、高杯（31～35）、鉢（36）、すり鉢、甕（37）、短頸壺（38）、平瓶、長頸壺、甕などがある。

杯Gは、口径8.4～9.5cm・器高3.0～3.6cmあり、底部外面の調整は、1がロクロケズリ、他はヘラキリである。杯G蓋は、受部端部が口縁端部より下方に突するもの（26）、ほぼ等しいもの（21・22・28・29）、内側に入るもの（24・25）などがある。つまみの形は、断面形が主頭形になるもの（21）や宝珠形になるもの（28）があり、ほかにつまみのないもの（29）がある。

蓋ではこの他に、壺蓋（27）、高杯蓋（23）、椀ないし高杯の蓋（30）と推定されるものが出土している。なかでも30は中凹みの円形のつまみをもつもので、淡青灰色を呈し、堅緻な焼成である。

杯Hには、底部外面にロクロケズリを施すもの（6～11）と、ヘラキリのままのもの（12～15）がある。前者には小片が多く、受部径8.4～13.2cmとばらつきが認められる。11は、蓋受部がほとんど立ち上がらず、底部から口縁部にかけては丸味をもたせて成形した特異な形態である。ヘラキリ未調整のものは、受部径10.0cm・器高3.5cmのもの（12）と、受部径10.9～11.5cm・器高3.1～3.6cm（13～15）のグループがある。杯H蓋は、頂部の調整はほとんどがヘラキリであるが、20のみヘラキリやロクロケズリの痕跡を残さず、指で強くナデつけた痕跡のみが残る。

高杯には、長脚無蓋高杯（31）、長脚有蓋高杯（32）、短脚無蓋高杯（33～35）の3種類がある。長脚の高杯ではいずれも透かしが省略されている。短脚の高杯は楕状の杯部をもつもので、杯部と脚部の高さの比は約2:1となる。鉢（36）はロクロケズリを施した平底の底部と内縁しながら内側にのびる口縁部からなり、口縁内端面に一条の沈線をめぐらす。甕（37）は扁球形の体部と大きく広くひらいた口縁部からなり、口縁下半部に描きの波状紋、体部に櫛による刺突紋をめぐらす。円孔部分には粘土をはりつけ外方に突出させ注ぎ口としている。口縁部内外面および体部外面に多量の自然釉がかかる。

壺（38）は、球形の体部と短く立ち上がる口縁部からなる広口の短頸壺で、体部下半にはロクロケズリを施す。

整地土層出土土器 東半部整地上層からは、土師器杯C、高杯B、甕、須恵器杯G・同蓋、杯H・同蓋、高杯、甕などが出土したが、土師器は摩滅が著しいため、ここでは須恵器のみ図示した。41・42は杯Hで、41の底部外面はヘラキリ、42はロクロケズリを施す。高杯には3種ある。39は、小さな杯部と長脚二段透かしの脚部からなり、杯部下半には断面三角形の突線をめぐらす。脚部の透かしは二方向にあけられ、下段透かしの上端と下端には各々2条の凹線がめぐる。杯部および脚部外面には自然釉がかかる。40は、杯Hに長脚二段透かしの脚部をつけた有蓋高杯である。脚部の長方形透かしは各々二方向で、下段透かしの上端に2条、下端に1条の凹線がめぐる。短脚無蓋高杯(43)の脚端部は丸くおさめられ、口縁部は外反する。

ここに紹介したS D 3580及び東半部整地土層出土の土器は、いずれも飛鳥Iの範疇に含まれるものである。整地土層出土の土師器の遺存状態が悪いため、両者の総合的な比較はおこなえないが、須恵器の長脚高杯についてみると、S D 3580出土品では透かしが省略され、また有蓋高杯の蓋受部も退化する傾向が認められる。このような点を考慮すると、整地土層出土の土器群はS D 3580出土の土器群よりもやや先行する型式のものと思われる。

ところで、飛鳥・藤原地域での土器編年でいう上器型式飛鳥Iは、小塑田宮推定地溝S D 050(『報告I』)から始まり、川原寺下層溝S D 02(『概報10』)→甘樅丘東麓焼土層S X 037(『概報25』)→飛鳥池遺跡下層灰緑色粘砂層(『概報22』)、に至る変遷が考えられる。年代のほぼ明らかな山田寺下層出土の上器群(『概報20』)は、甘樅丘東麓S X 037と飛鳥池遺跡下層にまたがる土器を含んでいるものと推定される。今回報告したS D 3580出土土器群は、ロクロケズリのおこなわれる須恵器杯IIなど一部の上器をのぞき、大半は飛鳥池遺跡下層の土器群と共通した要素を持っており、山田寺下層の実年代を勘案すると、年代の下限としては640年頃が想定される。

土製品としては土馬・円面鏡があるが、いずれも小片である。また、漆の付着した上器片がS D 3609などから出土した。S D 3609出土の漆付着土器には、器面の内外に漆を塗ったと推定される7世紀後半の鉄鉢形須恵器がある。このほかに平安時代の綠釉陶器、中・近世の青磁・白磁・染付磁器片がある。

瓦類 軒瓦、丸・半瓦のほか瓦斗瓦・面戸瓦が出土した。

軒瓦(FIG.33)はすべて第75-16次調査区から出土した。軒丸瓦11点と軒半瓦15点がある。軒丸瓦は、大官大寺所用の6231が6点と最も多い。小片ばかりで種別は不明である。藤原宮所用6281Aも1点ある。その他はいずれも飛鳥時代のもので、奥山久米寺IV Cが1点、飛鳥寺IIIが1点と型式不明が2点ある。軒平瓦も大官大寺所用6661が6点(B; 4点、C; 1点)と多いが、四重弧紋軒平瓦も7点出土した。ほかに平城宮所用6691Aが1点ある。6691Aは雷丘東方遺跡(『報告I』『概報24』)でも出土した。

瓦斗瓦と面戸瓦は大官大寺の所用品である。

丸瓦は619点(62.6kg)、平瓦は1,899点(213.9kg)ある。平瓦は、凸面布目平瓦と粘土紐桶巻き作り平瓦が多く、少量の一枚作り平瓦がある。



Fig.33 雷丘北方遺跡出土軒瓦

金属製品 銅製品、鉄製品、鉛製品がある。銅製品には帶金具の一部や釘、鉄製品には釘などがある。鉛製品は2点あり、1点はSD 3609出土で耳環の一部と考えられる。断面直径は0.5cmである。ほかの1点はSK3588から出土した。直径0.6cm、長さ4.8cmの棒状品である。いずれも飛鳥IVの土器が共伴する遺構からの出土である。

石製品・石材 砕石2点、滑石製臼玉2点のほかに株原石がある。滑石製臼玉のうち1点はSD 3580から出土した。直径0.7cm、厚さ0.2~0.5cm。

木簡 SD 3580から出土した削り屑3点がある。いずれも墨痕を止めるのみである。

まとめ

今回の調査を通して、その目的の一つであった大規模建物群の東外郭施設を確認することはできなかった。建物群との検出レベルを比較しても、第75~16次調査区の方が最大0.26mほど高くなっている。このような状況から判断すると、本来設置されていた東外郭施設が、後世に全て削平されたものとは考え難く、外郭施設は当初から設置されなかつたものと推定される。

その占地については、従来の調査によって左京十二条三坊の西北坪と西南坪の二町を占めていることが推定されていた。今回の調査においても、7世紀後半の整地が東三坊々間路推定位置より東には行われていないことを確認し、先の見解を裏付ける資料を得ることができた。

東南坪においては、予想に反して7世紀前半に行われた整地と7世紀前半から8世紀後半に及ぶ建物の存在を確認し、この地が藤原京期のみならず、その前後にわたって長期間利用されていたことが判明した。なかでも、7世紀前半には2棟の建物とそれらの西を区画する南北溝、8世紀後半には総柱建物と溝状土坑が各々配置されている。整地を含めたこのような遺構のあり方は、調査地の東南方に展開する雷丘東方遺跡の状況に類似しており、注目される。雷丘東方遺跡では、7世紀前半の整地や奈良時代の倉庫群の存在が明らかになっており、それらは推古天皇の「小畠田宮」、奈良時代の「小治田宮」と関連するものと理解されている(第71~9・10・14次調査『概報24』)。今回、東南坪で検出した遺構群も「小畠田宮」や「小治田宮」の範囲に含まれる可能性があるが、調査地が限定されているために、整地の規模や広範囲での建物配置およびその変遷などを明らかにすることはできなかった。その詳細な検討は今後の周辺地域の発掘調査を待ちたい。

3 右京二条二坊の調査（第78—6次）

(1995年10月)

この調査は、個人住宅建設にともなう事前調査である。調査地は樋原市醍醐町143番地にある水田で、藤原京右京二条二坊西北坪にあたる。また、調査区の南方約30mには、かつて喜田直吉によって藤原宮大極殿跡にも比定されたこともある「長谷田土壇」が位置している。

調査は、南北15m・東西6mの調査区を設定して行った。調査区の層序は、上から水田耕土(0.2m)・床土(0.2m)・灰褐色砂質土(0.3m)・褐色砂質土となり、地表下約0.7mにある褐色砂質土層の上面で遺構検出を行った。検出面である褐色砂質土上面では、一部に灰褐色粗砂が堆積しており、砂層中からは弥生時代前期の土器片が出土した。

検出した遺構には、7世紀後半の掘立柱列S X 8532と中世の掘立柱建物S B 8533のほかに、多数の素掘り溝がある。掘立柱列S X 8532は南北に並ぶ2間の柱穴列で、柱掘形は一辺0.5mの不整形をなし、深さは0.25~0.4mである。これらの柱穴は北で西にふれて並ぶ。東西棟建物の東妻柱列とも推定できる。掘形の1つからは、7世紀後半代の上師器壺が出土した。素掘り溝は藤原京内で一般的にみられるもので、水田の畦畔に平行ないし直交して掘られ、幅は0.3m、深いもので深さ約0.2mである。12世紀後半から13世紀後半にかけての土器が少量出土した。掘立柱建物S B 8533は、南北3間(5.8m)、東西2間(4.2m)以上の縦柱建物で、柱間は不揃いである。建物は北でわずかに東にふれる。柱掘形は径0.2~0.3mの不整円形をなし、径0.1m前後の柱痕跡が残る。明らかに素掘り溝を埋め立てた後に建てられている。この調査区では最新の遺構であり、素掘り溝の出土遺物から13世紀後半以降の遺構と考えられる。

以上のように、今回の調査においては調査区が狹少なこともあって、藤原京関係の遺構を検出することはできなかった。また「長谷田土壇」についてはその位置が二条々間路に近いこと也有って、その年代を新しく考える意見もあり、今後さらに周辺での調査が待たれる。

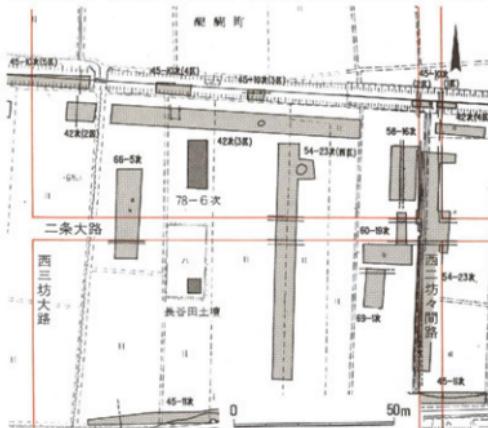


Fig. 34 調査位置図 (1 : 1500)

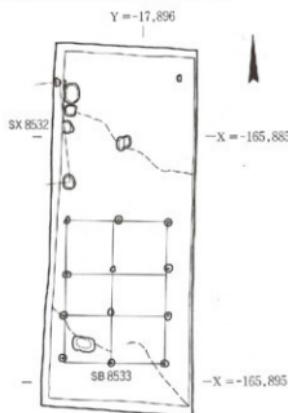


Fig.35 第78-6次調査遺構図（1:200）

4 右京七条一坊の調査

A 第75-15次調査

(1994年12月～1995年2月)

この調査は、市営住宅建設に先立って実施したものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪にあたる。この坪内には、坪の中軸線にそって正殿、後殿、脇殿、門などを整然と配した一町規模の宅地が存在したことが、過去の調査によって明らかとなっている（第19次調査『概報7』、第49次調査『概報19』、詳しくは『右京七条一坊報告』参照）。今回の調査では宅地の西側の状況を明らかにすることを主な目的とした。調査面積は約300m²である。

遺構

調査区の基本層序は、上から盛土・灰褐色砂質土・明黄灰色砂質土・黄灰色粘質土・茶褐色土・褐色土・青灰白色粘質土・黄褐色砂礫となる。現地表面下約1mの茶褐色土上面で1回目の遺構検出をおこない、中世の素掘り耕作溝を検出した。続いて現地表面下約1.2mの褐色土上面で2回目の遺構検出をおこない、藤原宮期の遺構を検出した。褐色土は、藤原宮期を最新とする土器を含んだ藤原宮期の整地土と考えられる。さらに、褐色土を除去し青灰白色粘質土（一部、黄褐色砂礫層に交替する）上面において、藤原宮期およびそれに先行する遺構を検出した。以下では、褐色土上面と青灰白色粘質土上面で検出した遺構について概略を記す。

褐色土の上面で検出した主な遺構には、東西溝1条のほかに、洪水砂堆積と多数の素掘り耕作溝がある。東西溝S D 383は、調査区北側にある浅い素掘り溝である。東にいくにしたがって幅が狭くなり北に曲がっていく。幅1～4m・深さ0.2m。水が流れた形跡を示す砂層などの堆積ではなく、下層遺構に起因する不等沈下でできたくぼみの可能性が高い。藤原宮期を主体とした土器と共に軒瓦を含む少量の瓦、焼土などが出土した。調査区南側には、飛鳥川の氾濫によって堆積した半円形の洪水砂堆積S X 381がある。S X 381はきめの細かい砂で埋まり、流木と思われる自然木を少量含む以外は、7～8世紀の土師器壺の口縁部が1点出土したにすぎ

ない。堆積の年代は明らかではないが、藤原宮期の遺構面を壊し、中世の包含層（茶褐色土）に覆われる。このS X 381を取り囲むように、弧状に巡る素掘り耕作溝が数条ある。

青灰白色粘質土（黄褐色砂礫層）上面で検出した遺構には、池状遺構S X 385とこれに取り付く東西溝S D 384がある。S X 385は、調査区中央に広がる底が平らな池状のくぼみで、深さは約0.4mほど。北と西の肩は検出できたが、南および東の肩は洪水砂堆積S X 381によって壊されていたため、その規模は不明である。東西溝S D 384は調査区西壁あたりで、かろうじて北

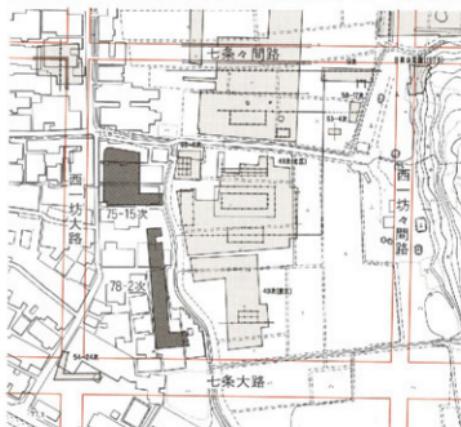


Fig.36 調査位置図 (1 : 2000)

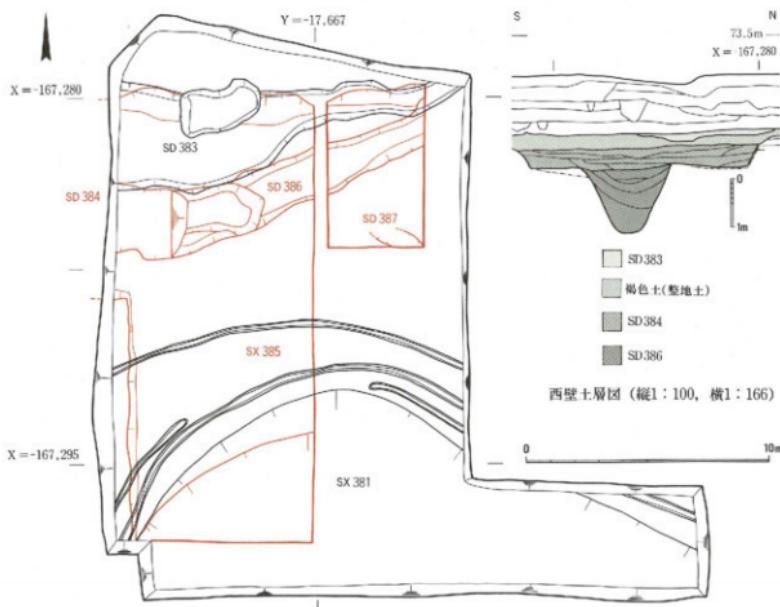


Fig. 37 第75-15次調査遺構図 (1 : 200)

岸と南岸を確認した。幅8m・深さ約0.4m、である。すぐ東で南岸が南に折れ曲がってSX 385の西岸につながるので、調査区西壁付近がちょうど両者の取り付き部分にあたると考えられる。SD 386は、SD 384の下で検出した東西溝。東に浅く幅も狭くなり、北に曲がる。幅1.5~3m・深さ0.3~1mである。4世紀から5世紀にかけての上器が少量出土した。SD 387は、SD 384の下で検出した斜行溝である。幅1m・深さ0.8m以上ある。肩は途中から垂直におちる。わずか1m足らずを検出したのみで、遺物は弥生土器が1片出土したにとどまる。

遺 物

遺物は、土器・土製品、瓦、木製品、錢貨などがある。

土器・土製品はSD 384とSX 385の接点部分を中心として出土したものにまとまりがある。飛鳥IV~Vを主体とする土師器・須恵器があり、奈良時代に下るものはない。土製品には上層の土馬1点のほか、輪羽口やトリベなどの鋳造関係遺物があり、銅滴や銅スラグが伴出する。漆工関係遺物も多く、漆壺や漆バレットに使用した杯類、濾し布片などがある。

瓦は、軒丸瓦1点(6275I・日高山瓦窯産)と軒平瓦3点(6641E・6647Cc・三重弧紋)と熨斗瓦1点のほか、少量の丸瓦(50点4.7kg)・平瓦(133点16.1kg)が出土した。軒平瓦6647Ccは本薬師寺所用瓦であり、三重弧紋もその可能性がある。日高山2号窯(『概報9』)でも6647Cbが出土したことと関連するのであろうか。木製品は、紡輪、匙形木製品、黒漆塗り弓などがSX 385から出土した。

錢貨は和同開珎銅錢1枚がある。門構えの上端が隸書風に開く「隸開和同」で、背面の外縁内径がやや小さく、方郭外径がやや大きい。古錢研究者はこの特徴を「闊縁」「背広郭」とよんで、「古和同」に分類している。外縁外径2.52cm・重さ4.08g。

この和同開珎銅錢について、非破壊的手法による蛍光X線分析による鋳刷表面からの分析をおこない、次のような結果を得た。ただし、分析値は、鏡の製作当初の成分を示すものではないので取り扱いに注意を要する。

銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	ヒ素(As)	銀(Ag)	ビスマス(Bi)	アンチモン(Sb)	鉄(Fe)
91	0.3	0.2	0.4	0.3	0.2	6.6	0.5 (%)

この銅錢の成分の特徴は、アンチモンを数%含むことにある。和同開珎銅錢の分析例の多くは、主成分の銅に錫あるいは鉛を含むもので、アンチモンや砒素、ビスマスについては銅の不純物と考えられてきた向きがある。しかし、本例は伴出遺物と遺構の理解の上から平城遷都以前に存在したことが確かめられる和同開珎であり、別途おこなった分析によれば、藤原京条坊側溝から出土して平城遷都以前に埋没したことが確実な「富本錢」や錢文の上から「古和同」とされる「不隸開和同」についても、同様の成分構成であることが確かめられている。すなわち、アンチモンの多い一群は古い段階に鋳造された和同開珎銅錢として把握できる可能性があり、今後、砒素・ビスマスの多い一群などについても、検討を加える必要があろう。

ま と め

今回検出した藤原宮期の遺構には、東西溝S D 384と池状遺構S X 385がある。その形状などに不明な部分は多いが、S X 385はこの坪の主殿などを囲む区画塀の西側に位置し、これから延びるS D 384は西一坊大路の東側溝につながっていたと推測される。これらの遺構の堆積土とそれを覆う整地土から出土した土器は、ともに飛鳥IV～Vの藤原宮期を主体とし、器種構成および漆付き土器や鋳造関係遺物を含む点でも類似する。このことは、S D 384とS X 385が埋まり、その上を整地した時間が短期間であったことを示す。坪の中心部では、西側に向かって低くなる地山を整地している。この整地上（茶褐色砂質土）には藤原宮期の土器が少量含まれる。両者が同じか否か、今回は層位的に確認できなかった。既に指摘があるように（『報告II』）、飛鳥IV～Vの土器研究の現状では、少量の出土土器の型式上の類似のみを根拠に両者を同一時期の整地とみなすことは危険と言わざるをえない。

また、S X 385・S D 384出土土器には杯A I・Cのほか、高杯、蓋、皿などの大型器種や須恵器平瓶・提瓶などが含まれ、藤原宮内で使用され遷都時に廃棄された東面内濠S D 2300出土土器に類似する要素が強い。したがってここでは、本調査区の整地上と中心部のそれとは別のものであり、出土土器は平城遷都後ほどなくおこなわれた宅地の廃絶にともなって廃棄されたものと考えたい。この点は飛鳥IV～Vの詳細な再検討を待たねば決しないが、その際、本調査出土土器は重要な資料となろう。

また、S X 385と整地土などに目立つ漆工・鋳造関係遺物はS X 385の北部に集中していることから、調査区の北側に工房の存在が予想される。

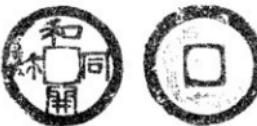


Fig.38 和同開珎（実大）

本調査は、市営住宅建設とともに実施した事前調査として、第75-15次調査に引き続き、その南において実施した。調査地は、藤原京右京七条一坊西南坪の西南隅に該当するが、前節で述べたように、第75-15次調査区では、南辺部が飛鳥川の氾濫で大きくえぐられ、本調査区の南西、七条大路と西一坊大路の交点で実施した第54-24次調査においても、飛鳥川が形成した砂礫層上では、後世の削平のため藤原宮期の遺構は確認できなかった(『概報19』)。したがって、当調査地もまた飛鳥川の氾濫を受けている懸念も強く、まず遺構面の残り具合を確認する目的で、調査区はL字形に設定した。調査面積は約400m²である。

遺構

基本層序は、上から表土・明灰褐色粘質土・灰褐色粘質土・粗砂混じり暗灰色シルト・暗灰色シルト・灰色砂礫である。地表から1.5～2mで、南端を除く調査区のほぼ全体に灰色砂礫面が広がる。暗灰色シルトと灰色砂礫の上面で、各々中世の耕作溝を検出した。暗灰色シルト層は瓦器小片を含み、中世以降の堆積である。灰色砂礫層上部には、磨耗した歴史時代土器片を含み、飛鳥川の氾濫が形成した堆積とわかる。部分的に灰色砂礫層を1m近く掘り下げたが、砂と礫の互層が続くばかりで、藤原宮期の遺構面ではなく、堆積の時期すら確定できなかった。

灰色砂礫面は調査区の東側と南端で落ち込んで、暗灰色シルト層が厚みを増す。調査区南端の東西トレンチにおいて、この落ち込みの状況を確認する目的で、南北方向・東西方向のサブトレンチを設けた。南北方向のサブトレンチでは、調査区南端を東西に流れる小流路(幅5m・深さ70cm)、東西方向のサブトレンチでは調査区の東側を南北に流れる新古2時期の小流路(古期:幅4m以上・深さ40cm、新期:幅3m・深さ30cm)を検出した。南北小流路は当初、調査区の西寄りを流れていたものが、東に流路をずらす。さらに東には南から南東に流れて飛鳥川に合流する現代の水路があるので、この前身河川と考えてよからう。いずれの小流路も灰色砂礫層を切って流れるが、出土遺物がほとんどなく、機能した時代は特定できなかった。ただし、南北小流路(新期)の東岸がえぐっている明茶色粘土・青灰色粘土といった土層は調査区の東へ延びている。本調査区の他の部分には同種の層は存在しないが、第49次調査区の藤原宮期遺構検出面を構成する土層と酷似する。

まとめ

本調査区では飛鳥川の氾濫により、藤原宮期の遺構は残っていない。ただし、本調査区の東端以東では藤原宮期の遺構面が残っている可能性が強い。周辺部の今後の調査に期待したい。

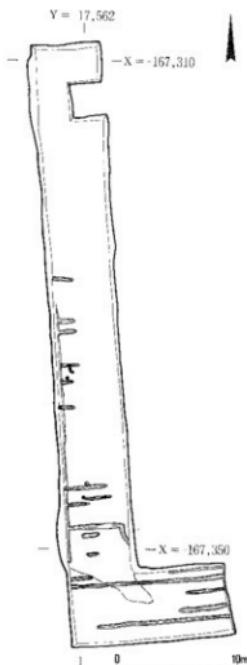


Fig.39 第78-2次調査遺構図

5 本薬師寺の調査

A 1994-2次調査

(1995年2月～6月)

この調査は、1991年度以降継続的におこなっている本薬師寺跡の計画調査として実施した。調査地は、特別史跡本薬師寺跡の金堂と東西両塔の土壇のほぼ中間、中門・南面東回廊調査区(1992-1次調査『概報24』)の北、東塔西南隅部調査区(1993-3次調査『概報25』)の西で、それぞれ旧調査区と一部重複する。調査の主な目的は、中門と金堂の間の南北石敷き参道および東塔・西塔をつなぐ東西石敷き参道を確認するとともに、金堂前部の状況を明らかにすること、さらに先行条項に関する資料をえることである。調査面積は558m²である。

遺構

調査地の層位は上から、水田耕土、床土、茶褐色砂質土(遺物包含層)、暗褐色灰色砂質土(遺物包含層)があり、これらを除去して、整地土層の暗茶褐色砂質土(凝灰岩粉末が混じる)あるいは暗灰褐色砂質土層の上面で遺構を検出した(Fig.42)。さらに整地土の下で下層遺構を検出した。検出した遺構は、大きくは本薬師寺造営以後の遺構と造営以前の遺構にわかれれる。本薬師寺に関わる遺構

南北石敷き参道S F 150と東西石敷き参道S F 222 調査区の西寄りでS F 150を、北辺でS F 222を検出した。二つの参道とも、浅い掘り込み地業をおこなって玉石を敷きつめ、両側に縁石を立てる。

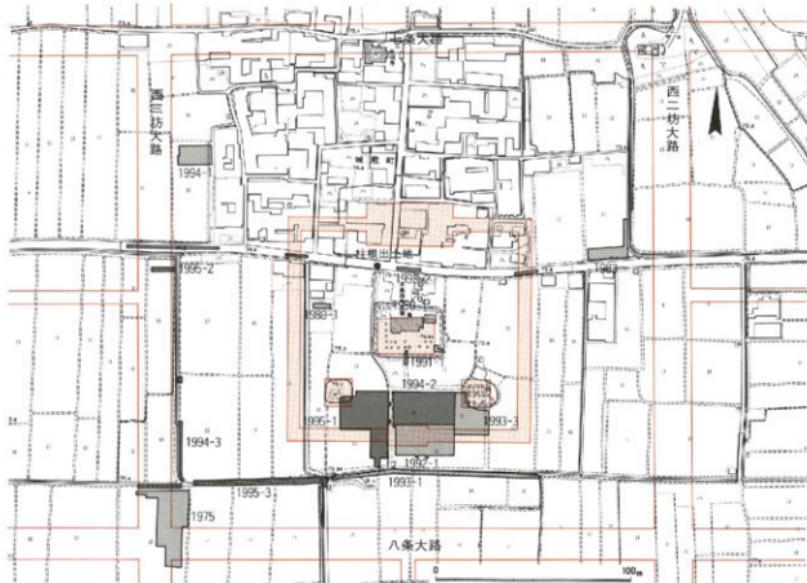


Fig.40 本薬師寺調査位置図 (1 : 2500)

S F 150は、S F 222との交差点部分以外は、ほとんどの敷石が抜き取られていた。交差点部分の東南入り口に東側縁石が1石だけ残る。これと西側縁石の抜き取り痕跡からわかると、幅は約4.4mである。S F 222はかなりの敷石が残るが、北側の縁石は調査区内では東端の1石しか残らない。幅は約3.4mで、S F 150より狭い。敷石は、中粒の花崗閃緑岩ないし右英閃緑岩、および細粒の閃緑岩が最も多く、これに少量の黒雲母角閃石花崗岩と変ハニレイ岩が混じる。分布からは石材を選択的に用いた様子はうかがえない（石材の鑑定は、埋蔵文化財センター・肥塚隆保による）。ただ、交差点部分でみるとS F 150とS F 222とでは用いられた敷石の大きさに違いがあり、S F 150では30~40cmほどの卡石を使うのに対し、S F 222ではそれより大ぶりの卡石を使う。この敷石の違いから判断して、中門から金堂に至るS F 150が先につくられ、これにとりつくかたちで東西にS F 222がつくられたとみてよい。S F 222は伽藍地の傾斜に沿って東から西にわずかに傾斜するが、交差点部分だけは水平になっているのも、のことと関連するのだろう。なお、交差点部分には燈籠などの施設はない。

東塔周囲を巡る溝 S D 265 南北溝 S D 265は、調査区東辺で検出した素掘り溝である。幅約3.5m、深さ0.3~0.4mある。溝底は南から北に傾斜する。S F 222との交点ではこれを完全に破壊しており、この南約8mは、あふれたように西側に浅く広がる。溝の東岸は、近代の溝によって大半が壊される。S D 265は調査区の東南隅で直角に折れて、東西溝 S D 207につながる。この2条の溝は、東塔周囲の右敷きS X 221の縁石から内法で約2.3mを隔てて掘削されており、東塔の周囲を巡る濠状の施設であろう。溝の中には大量の瓦や凝灰岩切石断片、玉石などが投棄されていた。瓦には軒丸瓦16点、軒平瓦16点が含まれる。

井戸 井戸 S E 267は、南北溝 S D 265の埋め土を掘り込んだ素掘りの井戸。円形で、検出面での直径が1.8m、深さは0.9mある。埋め土の上層に多量の瓦が含まれていた。

井戸 S E 278は、調査区北辺にある井戸。東西2.7m・南北2m以上・深さ1.5m、ほぼ円形で、北半は調査区外にある。埋め土の中層以上、特に上層に多量の瓦が含まれる。軒丸瓦15点、軒平瓦7点が出土した。S E 278の東に重複してこれより古い上坑 S K 279がある。

土坑（瓦溜め） 土坑 S K 272は、調査区の中央や東より、東西石敷き参道 S F 222の南側にある。東西6.3m・南北7.5m・深さ0.2mの不整形な浅い瓦溜めである。上坑の西北部に集中して瓦が出土した。軒丸瓦33点、軒平瓦30点がある。これらとともに土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯・甕などが出土地した。土師器皿の多くは灯明皿で、10世紀前半のものである。

土坑 S K 276は、S K 272の北に接しこれより古い土坑。東西3.4m・南北3m・深さ1.7mの楕円形の平面形をしている。埋め土の中層以上に多量の瓦を含み、土師器・須恵器のほか、上層から垂木と床桁の2本の建築部材が出土した。土師器には平城宮IV以降の皿Aがある。

土坑 S K 285は、S K 272の南西にある上坑。東西4.8m・南北3.8m・深さ0.25m。軒丸瓦6点と軒平瓦6点の他、丸・平瓦が出土した。上器は、土師器皿・杯・碗・甕・須恵器がある。上師器皿は、S K 272と同じ10世紀前半の灯明皿である。

土坑 S K 287は、S K 272の西、南北石敷き参道 S F 150の東に接する瓦溜め。南北6.1m・東西5m・深さ0.2mほどの浅い土坑である。土坑中央に瓦が大量に堆積する。平瓦は凸面を上に向かたものが多く、ほかの瓦溜めのようにただ瓦片を投棄したのではなく、敷き並べたようにも見える。土坑の位置が、先行条坊西三坊々間路の東側溝に重複することを考えると、この部

分の不同沈下をならすために、瓦を敷いて埋め立てたのであろう。軒丸瓦13点、軒平瓦33点を含む多量の瓦のほか、土器が出土した。軒平瓦の型式をS K 272と比較すると、6641 I や6641新種が多くあり、逆に変形偏行忍冬唐草紋の6647が少ないことが特徴といえよう。土器は、土師器皿・杯、須恵器杯・壺などがある。土師器はS K 272と類似した10世紀前半の灯明皿が多い。

土坑S K 293は、南北石敷き参道S F 150の上にある土坑。東西1.8m、南北1.2m。

掘立柱建物 掘立柱建物S B 296は、南北石敷き参道S F 150の東にある小規模な建物である。南北1間（3.6m）、東西2間（1.8m等間）の正方形である。柱穴掘形と柱痕跡から10世紀代の土師器皿が出土した。遺構の重複関係からは、土坑S K 287より古い。

掘立柱塀 掘立柱東西塀S A 291とS A 299がある。S A 291はS F 150を横断する塀あるいは柵。柱間1.3～1.6mで9間分を検出した。S A 299はS A 291の北にあり、西で南にふれる。

その他の遺構 S X 277とS X 280は、東西石敷き参道S F 222との重複する柱掘形である（Fig. 41）。S X 277は、掘形一辺約1.5m・深さ1.5m。掘形の底に、建築部材（通し肘木）がほぼ南北方向に据え付けてあり、その周囲には軒丸瓦や熨斗瓦などの瓦や凝灰岩切石断片が詰め込んでいた。部材は礎盤として埋めたものであろう。S X 280も全く同じ遺構で、一辺1.4m・深さ1.1mの掘形に建築部材（通し肘木）を南北に据え付ける。部材の両端は掘形の壁に接し、壁をえぐって部材を水平に据えようとした痕跡があった。部材の周りには凝灰岩切石断片が詰め込まれていた。二つの掘形は、部材の据え付け方が共通し、部材の上面がほぼ同じ高さにであること、さらに、後述するように2本の部材が本来は同じ建物の部材だった可能性が高いことからみて、一対の遺構であろう。瓦や石材片を多量に含む抜き取り穴は東西石敷き参道S F 222を壊しているが、掘形の外側の辺、つまりS X 277の南辺とS X 280の北辺がS F 222の縁石の位置にほぼ重なることから、S F 222を十分意識して設けられた施設と考えられる。S X 277とS X 280の位置は石敷き参道の交点から東に14m、金堂基壇東辺の南延長上にあたり、上記のような遺構の状況からみて、幡竿のようなものを立てる施設であろう。



Fig.41 柱掘形S X 277（左；南から）とS X 280（右；北西から）

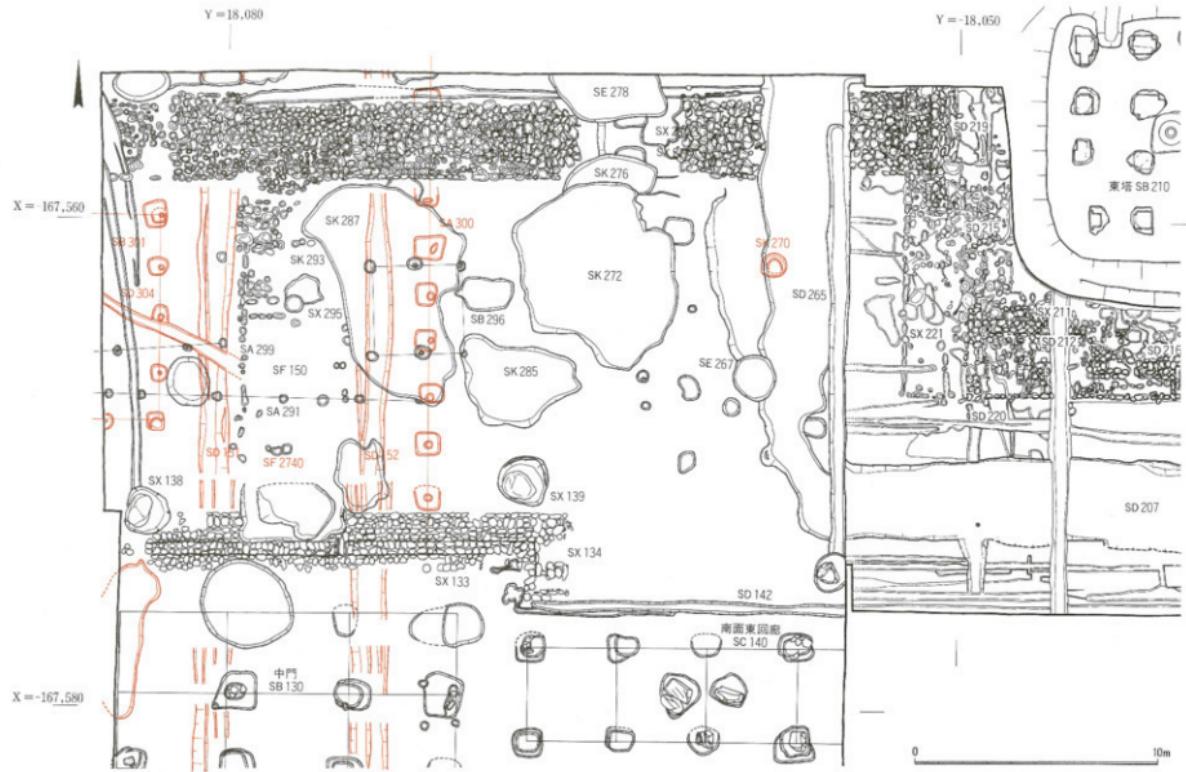


Fig.42 本薬師寺1994-2次調査造構図 (1 : 200)

埋壺遺構 S X 295は、S F 150の中央、土坑 S K 293の下層で検出した。上面での直径約0.8m・深さ0.6mの穴に小石を詰め、その上に半截した大和型の土師器壺が内面を上に向けて置かれていた。壺の上までは瓦が大量に詰め込んでおり、この部分で穴が大きく広がることからみると、抜き取り穴に瓦を投棄したようである。S X 295はS F 150の中軸線上にあり、S F 222の中軸線上からは南に約6.5mを隔てる。地鎮など祭祀関連の遺構とも考えられるが、内容物がなく性格は明らかでない。土師器壺の型式は飛鳥IVからVである。

このほか、中世以降の素掘り耕作溝が多数ある。これらは包含層の上面あるいは中位から掘り込まれている。これらは当然、本薬師寺廃絶以後の遺構である。

本薬師寺造営以前の遺構

西三坊々間路 南北右敷き参道 S F 150の真下で、西三坊々間路 S F 2740とその東西両側溝 S D 151・S D 152を検出した。中門の下層で検出した坊間路の北延長である。S F 2740は路面幅4.6~5m、側溝の溝心々距離は約6mで、S F 150と中軸線がほぼ一致する。西側溝 S D 151は幅1.1~1.6m・深さ0.5~0.6m、東側溝 S D 152は幅1.3~1.7m・深さ0.3~0.4m。堆積土は上下2層あり、飛鳥IVの土師器・須恵器が出土した。

南北塀 S A 300 西三坊々間路東側溝 S D 152の溝心から東約2.2mの位置にある掘立柱塀。柱間1.9~2.25m。柱掘形は一辺約1m・深さ約0.5mあり、柱はすべて抜き取られている。

掘立柱建物 S B 301 西三坊々間路西側溝 S D 151の西にある、掘立柱南北棟。桁行4間、梁間推定2間で、柱間はすべて2.1m(7尺)等間である。南妻柱穴には径約15cmの柱が残る。東側柱はS D 151溝心から西約2.2mの位置にある。

このほか土坑や溝がある。土坑 S K 270は、調査区の東側、南北溝 S D 265の下層で検出した。直径約1m・深さ約0.9m。斜行溝 S D 304は幅約0.6mほどの素掘り溝。本薬師寺造営時の整地土の下で検出したが、西三坊々間路西側溝 S D 151よりは新しい。東延長を確認できなかったが、あるいは中門の下層で検出した素掘り溝 S D 153につながるかもしれない。

遺物

大量の瓦類のほか、土器、金属器、建築部材、凝灰岩切石などが出土した。

土 器 土器には、繩紋土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、7世紀後半の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器・須恵器のほかに、中世の瓦器・磁器などがある。ここでは、比較的まとまって出土した西三坊々間路 S F 2740の側溝 S D 151・152、土坑 S K 270・272出土土器を図示した(Fig.43)。

西三坊々間路東側溝 S D 152出土の土師器には、杯B(6)、皿A(8)、高杯B(9)、壺(10・11・16)、須恵器には杯B(15)、杯G蓋(12)があり、西側溝 S D 151出土の土師器には、杯A(5)・B(7)・C(2~4)・H(1)、壺(17)、須恵器には杯G(13)、大型碗蓋(14)がある。土師器杯A・C、皿A、須恵器杯Bなどは、総体的に飛鳥IVの特徴をそなえ、藤原宮内の先行条坊側溝から出土する土器群と共通した要素をもっている。

S K 270からは、土師器杯A(19)・C(20)、壺A(21)、須恵器壺A蓋(18)が出土した。いずれも飛鳥IVのものである。杯Aは底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデした後、ヘラミガキを加える。杯Cは口縁部にヨコナデを施すもので、内底面にラセン、口縁内面に放射暗文を施す。壺は体部内外面にハケ目を加えたものであるが、下半部では外面にヘラケズリ、内面は

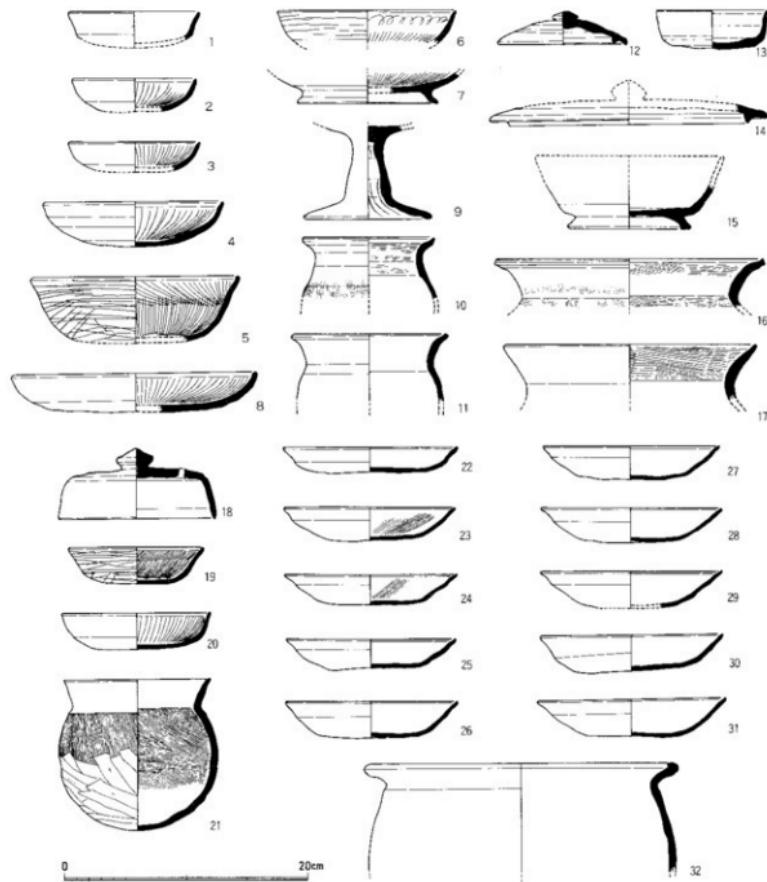


Fig.43 本薬師寺1994-2次調査出土土器（1：4）

強いナデによってハケ目を消している。白灰色を呈し、近江地方の製品と思われる。壺A蓋は宝珠形のつまみをはりつけたもので、頂部には焼成前にあけた円孔が2カ所ある。

S K 272出土土器には、土師器杯A（23～31）、皿A（22）、甕（32）がある。杯A・皿Aはいずれもe手法で調整する。杯Aは口縁端部を内側にわずかに肥厚させるもので、口径13.8～15.1cm・器高2.4～3.0cm。内面にハケ目の残るもの（23・24）や油煙の痕跡を残すもの（26）がある。皿Aは、口径14.2cm・器高2.0cm。甕は口縁端部を内側に折り曲げたもので、外面にナデ、内面に指おさえの痕跡が残る。これらの土器群には小皿やc手法調整の杯皿類が認められないことから、年代的には10世紀前半と考えられる。

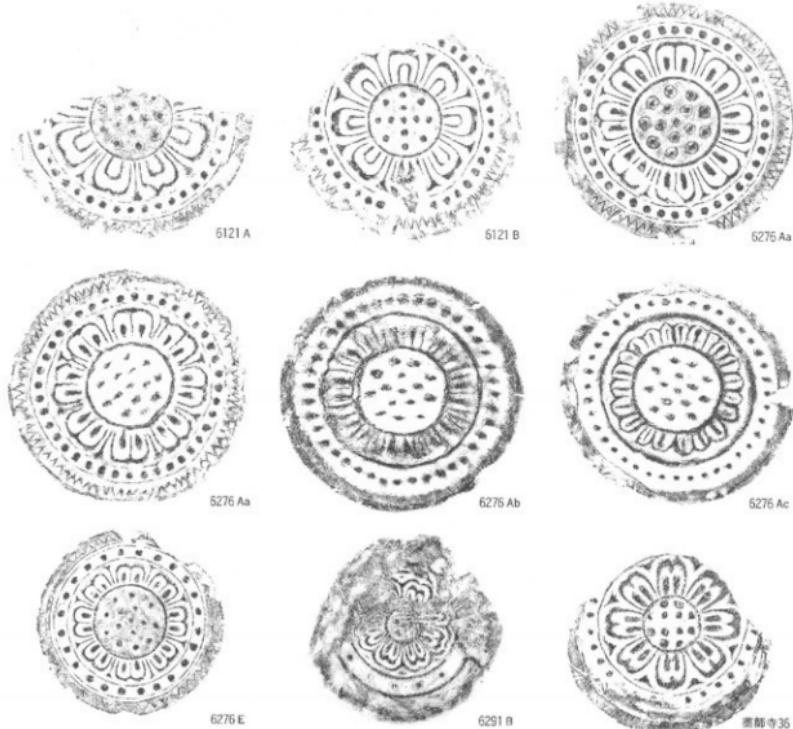


Fig.44 本薬師寺1994-2次調査出土軒丸瓦 (1:4)

瓦類 調査区全体から出土したが、特に南北溝 S D 265や土坑 S K 272・276・285・287などからの出土量が多かった。

軒瓦は、軒丸瓦375点、軒平瓦316点、総計689点ある (Fig.44・45、Tab. 5)。ほかに、熨斗瓦185点と面戸瓦170点、刻印瓦13点がある。

軒瓦の型式別出土点数は、軒丸瓦6276Aa-軒平瓦6641Hの組み合わせが最も多い。本屋の屋根(以下、本屋根と略す)用ではこのほか、軒丸瓦6121A-軒平瓦6647Gおよび軒丸瓦6276Ab・Ac-軒平瓦6641新種の組み合わせがある。一方、裳階屋根用の小型の軒瓦は、昨年の東塔西南隅部の調査で復原した、軒丸瓦6276E-軒平瓦6641Kの組み合わせがある。これに加え、軒平瓦6647Iが6641Kとほぼ同量あり、6641Iもこれらの約半分量出土しているので、以上2種の軒平瓦も6276Eと組み合ったと考える。6276Eに彫り直しは確認できないが、6641Iと組み合う6276Eは、瓦筋がやや磨滅することと瓦当が分厚いことで区別できる。

以上6組の軒瓦のうち、本屋根用では6276Aa-6641Hと6121A-6647G、裳階用では6276E-6641Kと6276E-6647Iの計4組を創建軒瓦に考える。6276Ab・Ac-6641新種と6276E-6641

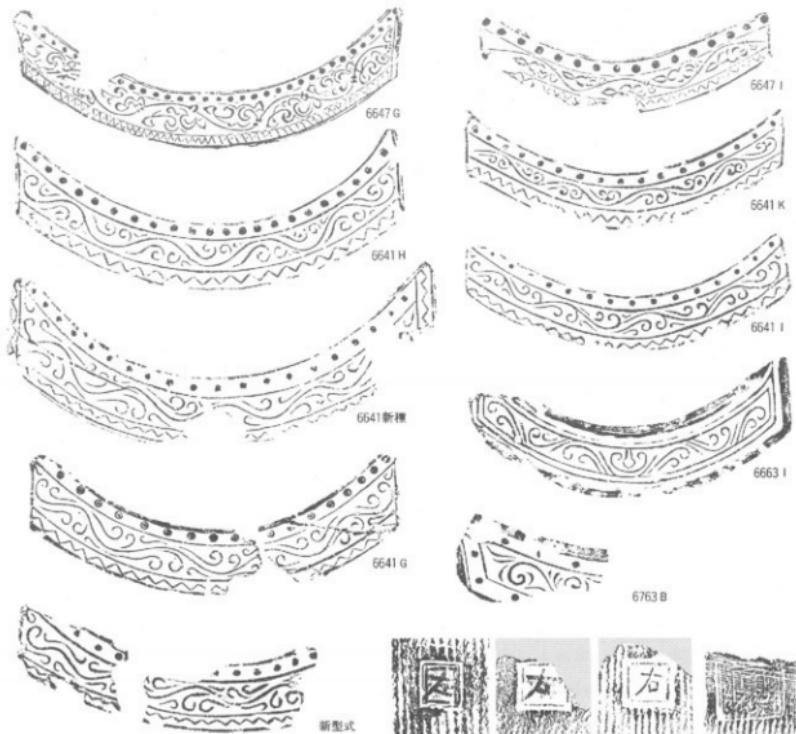


Fig.45 本薬師寺1994-2次調査出土軒平瓦(1:4)と刻印瓦(1:2)

Iの2組は胎土と焼成が酷似し、同時期に供給されたと判断できる。出土量からみて補修用の瓦であろう。6276A cと6641新種は平城薬師寺での出土が報告されておらず、供給の時期など今後の検討を要す。奈良時代以降の軒瓦は、これまで同様ほとんどが、平城薬師寺あるいは平城宮と同範である。

次に、これらの軒瓦について、南北溝S D265を含む27ライン(國土座標Y = -18,060)以東と、土坑SK272・276・287などを含む27ライン以西とにわけて各型式の出土点数を比較しよう(Tab.5)。27ライン以東では、軒丸瓦6276A a・6276Eおよび軒平瓦6641H・6641Kで各々の約70%を占める。これ以外では6647I(10%)が多い程度である。27ライン以西でも軒丸瓦は6276A a・6276Eが計66%と最も多いが、6121A・B 20点(7%)も目立つ。6121A・Bは27ライン以東からはほとんど出土していない。軒平瓦では6641H・6641Kは38%しかなく、6647C b・C c(9%)、6647G(19%)、6647I(12%)など変形偏行忍冬唐草紋軒平瓦がほぼ同量あるのが注目される。また、6641Iと6641新種も27ライン以東より多く出土し、特に6641Iの出土点数の違いは明白である。

27ライン以東の型式別出土点数の示す状況は、東塔西南隅部の調査(『概報25』)とほとんど

同じで、これを東塔の所用軒瓦と認めてよいだろう。これに対して、27ライン以西の状況はこれと大きく違ひ、大きくは金堂の屋根修理に伴う廃瓦が出土したと考えられよう。

道只瓦は熨斗瓦と面戸瓦がある。熨斗瓦は、すべて切り熨斗瓦である。面戸瓦は、本屋根用の蟹面戸瓦と蟻面戸（登り面戸）瓦、袋階用の蟹面戸瓦がある。本屋根用蟹面戸瓦は全長35cm前後・幅14~18cm、舌部の長さ12~14cm。蟻面戸瓦は完形品が1点あり、全長47.5cm・幅16.5cm、舌部の長さ18.3cmである。両端を斜めに切り、舌部両側も斜めに切り込む。袋階用の蟹面戸瓦は、長さ25cm、幅14cm、舌部の長さは11cmある。

面戸瓦はすべて粘土板巻き付け作りであるが、本屋根用蟹面戸瓦は丸瓦よりも全長が長い。また、本屋根用蟹面戸瓦は、丸瓦筒部とほぼ同じ長さだが、凹面に玉縁段部の痕跡を残すものが全くない。したがって、これらの面戸瓦は丸瓦用の粘土円筒を半截加工するのではなく、専用の筒形模骨を使用した可能性が高い。裝階用の蟹面戸瓦は全長だけでみると丸瓦筒部を利用して製作可能だが、瓦の厚みが倍近くあり、これも面戸瓦専用に製作された可能性がある。

丸瓦は、21,060点（2,596.3kg）、平瓦は65,471点（5,271.1kg）が出土した。本屋根用の通常の大きさのものと、豪華用の小型品がある。丸瓦は大半が玉縁丸瓦で、少量の行基丸瓦がある。玉縁丸瓦は繩叩き、行基丸瓦は斜格子叩きで、ともに粘土板巻き付け作りである。凸面を丁寧にナデ調整するものが大半。平瓦はほとんどが粘土板桶巻き作りだが、タテ繩叩きの一枚作りもある。桶巻き作り平瓦は、繩を三つ編みにした「ハ」字形のタテ繩叩き目を残すものが最も多く、次いで右撚りの細いタテ繩叩き目、斜格子叩き目の順になる。斜格子叩き目の平瓦は行基丸瓦とセット。ほかに、繩叩きと格子叩きが重複する例が少數ある。

平丘には刻印瓦がある。すべて凸面タテ繩叩きの粘土板桶巻き作り平丘である。いずれも凸面広端近くに押捺する。界線と文字ともに凸表現である。繩は右撫りで、ハ字形の繩叩きの例はない。「左」の刻印は初出。タテ2.0cm、ヨコ1.8cm、二重の界線の中に正字の「左」をあらわす。3点出土。「右」の刻印はa・b 2種ある。a種はタテ2.0cm、ヨコ2.2cm、界線の中に「右」をあらわす。「右」の「口」の部分が第一画につながる。既出で、平城薬師寺からも出土上。1点出土。b種は初出。タテ1.9cm、ヨコ2.1cm、界線の中に「右」をおく。9点出土。

Tab. 5 本薬師寺1994-2次調査軒瓦型式別出十点数表

社 内 丸	SK274	SK285	SK287	サブイン数	SD205	サブイン数	総 計	軒 半 瓦	SK272	SK285	SK287	サブイン数	SD205	サブイン数	総 計
6121A	1) H B	2) 3		14		1	16	6641G	2)	1)	5)	11)	14	35	5)
				6			6	H 4)		6)	64)				101)
6276A a	8)	5)	1)	5)	122)	8)	38	162)	K 4)	10)	2)	38	22)	115)	3)
A b	1) (11)	8)	1)	5)	134)	8)	40	5)	I (11)	13)	15	38)	171)	1)	(19)
A c	2) (12)	6)	1)	7)	(169)	2)	447)	10)	(177)	7)	9)	2)	11)	1)	(56)
B	12)		3	64	6)	19	85	6647C b	3)	4)	9)	12)		9)	12)
								C c	1)	(5.)	(1)	(22)		3)	(25)
6279B								6647G	9)	1)	43	2)	4)	49	
裏筋付6										1)	3)	2)	7)	36	
								6647							
計	27	6	12	254	16	68	328								
6112C								1)							
6225A	1)							1)	半平瓦新A	1)	1)				
B								4)	新B			2)			2)
6291B								1)	重 強 板			2)			3)
裏筋付32								1)							
33								7)	計	29	6	32	230	16	71
36								4)	裏筋付239						
38								14)	6665 I	1)	1)	4)			
半安型A不引	3)							1)	6721						
								9)	6765 B						
計	6		1)	35		12	47	2)	1)	1)	7)		2)	9)	
総 計	33	6	13	269	16	89	375	総 計	39	6	33	237	16	73	316)

金属製品 金銅製品と鉄製品、錢貨がある。金銅製品は、垂木先飾金具1点、釘15点、金銅板1点である。垂木先飾金具は長さ4cmほどの断片。釘は径0.9cmほどの半球形頭部の角釘。頭部のみ鍍金する。金銅製品は、出土17点のうち14点が、27ライン以東に分布し、東塔に關係する。鉄製品は、鉄釘など30点ほどが出土した。釘は方頭釘と折釘があり、27ライン以西から多く出土した。錢貨は、天聖元寶（北宋錢；初鑄1023年）が1点、床上から出土した。

石製品・石材 西三坊々間路西側溝から粘板岩製砥石が1点出土。滑石製白玉が1点あるほか、弥生時代のサヌカイト製石鎌と剥片刃器がある。石材はほとんどが凝灰岩切石である。

建築部材 S K276から2点、S X277とS X280から各1点の合計4点が出土した（Fig.46）。

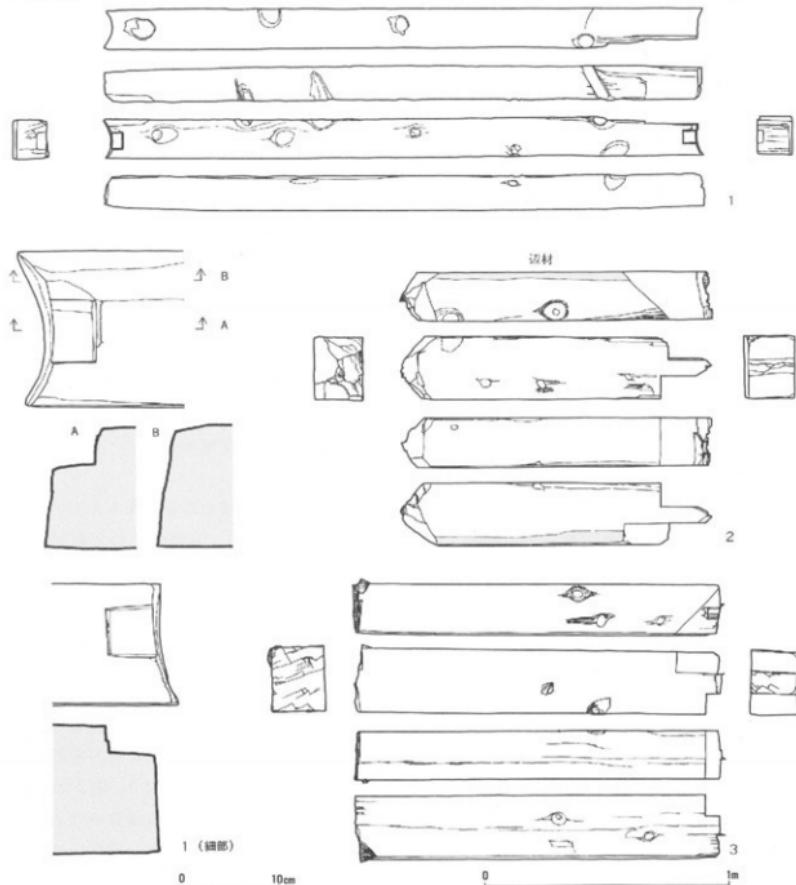


Fig.46 出土建築部材実測図

土坑SK276から出土した建築部材2点の内、1点(Fig.46-1)は、床板掛け（根太に相当するが大引のように太い材）で、断面の幅約16cm・高さ約14cm、全長約2.42mをはかる。両端部には接する円柱に合わせた縫りと、床板掛けの乗る栓を受けるための切り欠きがあり、法隆寺伝法堂のものと同じ形式である。両端の縫りから復原される柱径は1尺前後である。もう1点は、朽損が甚だしく、原形を明確にしえなかったが、丸桁もしくは丸垂木の一部ではないかと思われる。柱掘形SX277から出土した建築部材(Fig.46-2)、およびこれと対称の位置にある柱掘形SX280から出土した部材(Fig.46-3)は、ともに通り肘木の上木を、両端部を切断して礎盤に再利用したものである。材種や部材寸法が共通することから、同一建物の部材と思われる。部材の寸法は、2が断面の幅が端部で約19(20; 3の部材の場合、以下同じ)cm、中央部で約20(22)cm、成が約25(26)cm、残存全長が約127(150)cmを測る。仕口は、両材ともに上下の欠きの深さが約9cmあり、したがって中央に残る材厚は前者が6~7cm、後者が8~9cmとやや異なる。また、両材ともに新材と見まがうほど良好な状態で出土したので、当たり痕跡がなく手斧仕上げであることもみてとれた。この通り肘木の材寸は、平城薬師寺東塔や法隆寺の諸堂と比較すると、主要堂宇の部材として適当であり、中門の部材とするには大きすぎると思われる。次に述べる伐採年代と出土位置を勘案すると、東西両塔いずれかの部材であった可能性が高い。

出土建築部材の年輪年代測定

出土した建築部材4点の中から1点(柱掘形SX277出土の通り肘木; Fig.46-2)を選定し、年代測定をおこなった。材種はヒノキであった。この部材から計測した年輪数は192層分、この試料パターンとヒノキの曆年標準パターン(前37年~845年)との照合の結果、192層分の試料パターンは曆年標準パターンのなかの504年~695年の年代位置で照合が成立した。この部材には辺材部(3.3cm)が完存していたので、この木の伐採年は695年(持統九年)と確定した。

(埋蔵文化財センター:光谷拓実)

本薬師寺付近の微地形分析

微地形分析の目的と方法 現地表下2m程度までに埋没している遺跡の存在をあらかじめ推測する方法として、微地形分析〔微地形図(10cm等高線図)の読図と1/5000以上の大縮尺空中写真の判読〕が有力な手法としてあげられる(高橋1987)。特に微地形図で表現された現在の地表の微起伏は、地下に埋もれた地形を反映することが知られている。本報告では、本薬師寺付近の微地形図(10cm等高線図)を作成し、その読図をおこなって、地下に埋没した地形を推定した。微地形図は、権原市作成の500分の1の都市計画図に記載される標高データを基準にし、割り込み法を用いて作成した(Fig.47)。

本薬師寺周辺の微地形 本薬師寺は飛鳥川の左岸の完新世段丘面上に位置する。本薬師寺と飛鳥川の間には、低い段丘崖が認められる。この段丘崖は、9~11世紀頃に形成されたと考えられる(河角1994)。その崖下の現氾濫原面においては自然堤防が発達する(△地点)。崖下の谷地形(△地点)は、飛鳥川の旧河道である。この段丘崖下には、段丘形成による侵食のため藤原京関連の遺構は遺存しない。この段丘崖の存在しなかった本薬師寺創建当時は、飛鳥川の氾濫の影響を受けやすかったものと推測される。

等高線が疎な平坦面が本薬師寺伽藍中軸付近をはじめとし數カ所認められ、大規模な造成が

想定される。伽藍中枢付近の平坦面が最も広く、寺域の南東角付近、北西角付近で等高線が密であり、直角に屈曲する。このことから、本薬師寺造営時に寺域の南東角付近を切り土し、北西角付近に盛り土を施し、整地した状況が推測される。伽藍中枢付近の傾斜は、遺構面を反映するのか、後世の水田造成を反映するものか、現在のところ不明である。

本薬師寺周辺の現地形の最大傾斜方向は、基本的に飛鳥川の流れの向きである南東－北西方を示す。しかしながら、微地形図では、等高線の方向が南北あるいは東西方向を示す場合が多い。また、八条大路と西三坊大路・西二坊大路との交差点付近（C・D地点）においては、等高線が直角に屈曲している。さらに、八条大路や七条大路に相当する部分（E・F地点）では、等高線が尾根状に突出した部分がみられる。これらは条坊道路が影響した可能性が高い。
まとめと課題 以上、読図の結果から10cm等高線図は、埋没した微地形だけではなく、地形改変をともなうような埋没した遺構も反映する。今後、発掘成果と微地形図を比較することにより図から何が読みとれるか解明する必要があり、そのためには広範囲におよぶ微地形図の作成が望まれる。

（大阪府文化財調査研究センター：河角龍典）

高橋 学 1987年 「志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発」（兵庫県教育委員会『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県文化財調査報告第40冊）

河角龍典 1994年 「飛鳥・藤原地域における歴史時代の環境変化と土地利用」（1994年度人文地理学会大会研究発表要旨）



Fig.47 本薬師寺周辺の微地形図（1:2500）

まとめ

本薬師寺1994-2次調査では、当初の予想通り、東西方向と南北方向の2条の石敷き参道をみつけた。二つの参道の交差点部分には燈籠などの施設はない。使用された玉石の大小からみて南北石敷き参道S F 150施工後に東西石敷き参道S F 222が施工されたことも判明した。

玉石敷き参道は、飛鳥寺に発掘例があるものの類例に乏しい。本薬師寺は、塔を東西に2基建てたことによって、中門と金堂、東西両塔に囲まれた空閑地が生まれるが、この部分に玉石敷きの参道を設けて堂塔の間の一体感を表現したと思われる。

参道に関する問題点はまず、中門周囲の石敷きS X 134と南北石敷き参道S F 150との関係である。S X 134中央にある玉石列について、先に、①単なる工程差とする解釈と、②造成時期の差で、S X 134の外側部分を後の付加とする解釈、を示した（『概報24』p.88）。今回、S F 150は残存状況が良くなく、改修の有無を決するには至らなかった。また、金堂に至る参道がS F 150だけなのか、金堂南面に想定される三つの階段すべてにあるのかも今後の課題として残った。想定される金堂南面東階段位置のS F 222北側は、井戸S E 278などによる破壊が著しく、この部分での南北石敷き参道の有無を明らかにできなかったからである。なお、平城薬師寺金堂では前面を発掘していないため不明だが、1995年度におこなわれた平城薬師寺講堂の発掘調査では講堂背面の階段二つ各々から石敷き通路が延びることを確認している。

先行条坊に関しては、中門と同じく整地上の下層で西三坊々間路を確認し、条坊道路を整地して埋め立てた後に本薬師寺が造営されたことを確実にした。今回は条坊道路上に加え、藤原京右京八条三坊東南坪の西辺を限る掘立柱塀1条と、西南坪にたつ南北棟建物1棟を確認した。これらの塀と建物は、本薬師寺造営以前の京城が、単に条坊道路が設置されただけのものだったのではなく、居住域としてすでに利用されていたことを物語る。つまり、条坊設定後一定の時間経過のち、本薬師寺が造営されたのだ。このことは、本薬師寺の造営開始年代と、藤原京条坊施工年代との両方に重要な意味を持つと考える。

文献などから、本薬師寺は天武九（680）年に発願され、天武崩御の朱鳥元（686）年には未完成であったが、持統二（688）年に無遮大会を設けたときには、なにがしかの堂塔（少なくとも金堂）は建ちあがっていた、とみるのが一般的な理解である。問題は、造営工事に着手したのがいつだったかで、発願直後とする説、『僧綱補任』が記録する天武十一（682）年説、持統朝説、などがある。一方、藤原京の条坊施工年代も解決をみていない。藤原宮に遷居するは持統八（694）年だが、藤原宮大極殿北方の逆河S D 1901Aからは天武十二年から十四年（683～685年）の紀年木簡が出上り、この頃すでに条坊施工と宮の造営が進んでいたことが判明している（『概報8』）。天武五（676）年以降、『日本書紀』には都づくりに関わる記事が散見するので、条坊施工年代は天武末年からさらに遅る可能性もはらみ、藤原京条坊施工時期は藤原宮造営過程だけでなく、本薬師寺造営過程ともからめながら議論すべきであろう。

これらと密接に関連するのが、柱掘形S X 277から出土した通し肘木である。年輪年代測定の結果、この部材のヒノキは持統九（695）年に伐採されたことがわかった。持統九年といえば、『日本書紀』の記載する持統十一年（文武元年）の開眼会のわずか2年前、「薬師寺の構作ほぼ了る」とある『続日本紀』の文武二年の記事からも3年しか離れない。部材は伽藍の主要堂塔にしか使用できないものとなれば、出土位置からみても東塔をその第一の候補と考えられ

ないだろうか。東塔の建立が持統朝の末期とすると、平城薬師寺の東塔擦銘が本來、文武朝に撰文された本薬師寺の塔のものだったとする説が魅力をもってくる。一方、これを講堂の部材とみると、『薬師寺縁起』に持統二（688）年造顯という講堂本尊の阿弥陀縫仏との関連が問題となる。これまた、薬師寺論争に一石を投じる発見といえよう。

B 本薬師寺1994-3次調査

（1995年3月～4月）

この調査は、農業用水路改修に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、本薬師寺伽藍地の西辺にある。南北の水路改修にともなう部分で2カ所（I・II区）、東西の水路改修に伴う部分で1カ所（III区）に調査区を設定した（Fig.40）。調査面積は110m²である。

遺構 I・II区では時期不明の小穴以外、顕著な遺構はない。III区で西三坊大路東側溝SD105を検出した。幅1.2m・深さ0.3m。中層には流水を示す砂層が堆積する。SD105と心々距離で14.3mの位置に幅4.8mの浅いくぼみを検出したが、堆積土の状況からは道路側溝とは思われず、遺構検出面の高さからみても西側溝は削平されたと判断した。1975年調査では、SD105の東約5mの位置で、本薬師寺伽藍西辺の築地塙雨落ち溝と推測された南北溝SD110を検出しているが、今回は確認できなかった。

遺物 瓦と土器が出上したが、量は少ない。軒瓦は、軒丸瓦4点と軒平瓦2点である。

まとめ 1976年の調査では、西三坊大路の路面幅を15.2mとしたが、今回は、その西側溝の北延長部を確認しなかった。後世の削平もあるが、本薬師寺寺域西辺におけるその後の調査では、東側溝から西8.3mで南北溝を確認しており（1993-2次調査『概報24』）、西三坊大路の路面幅については再検討が必要であろう。

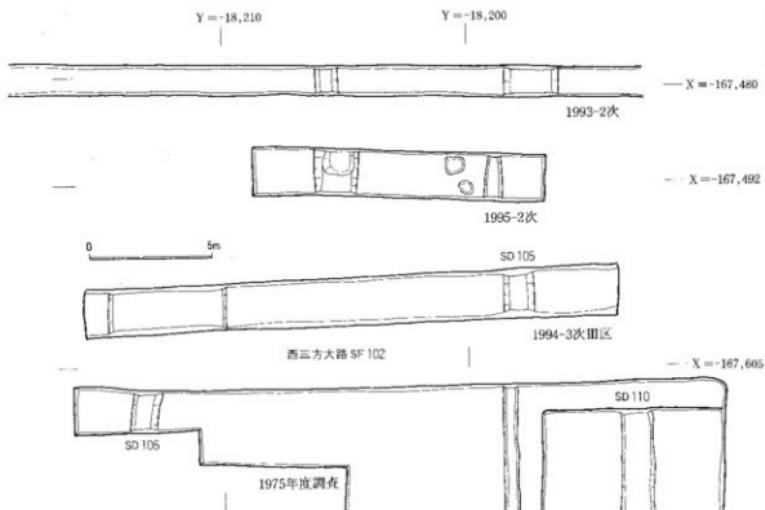
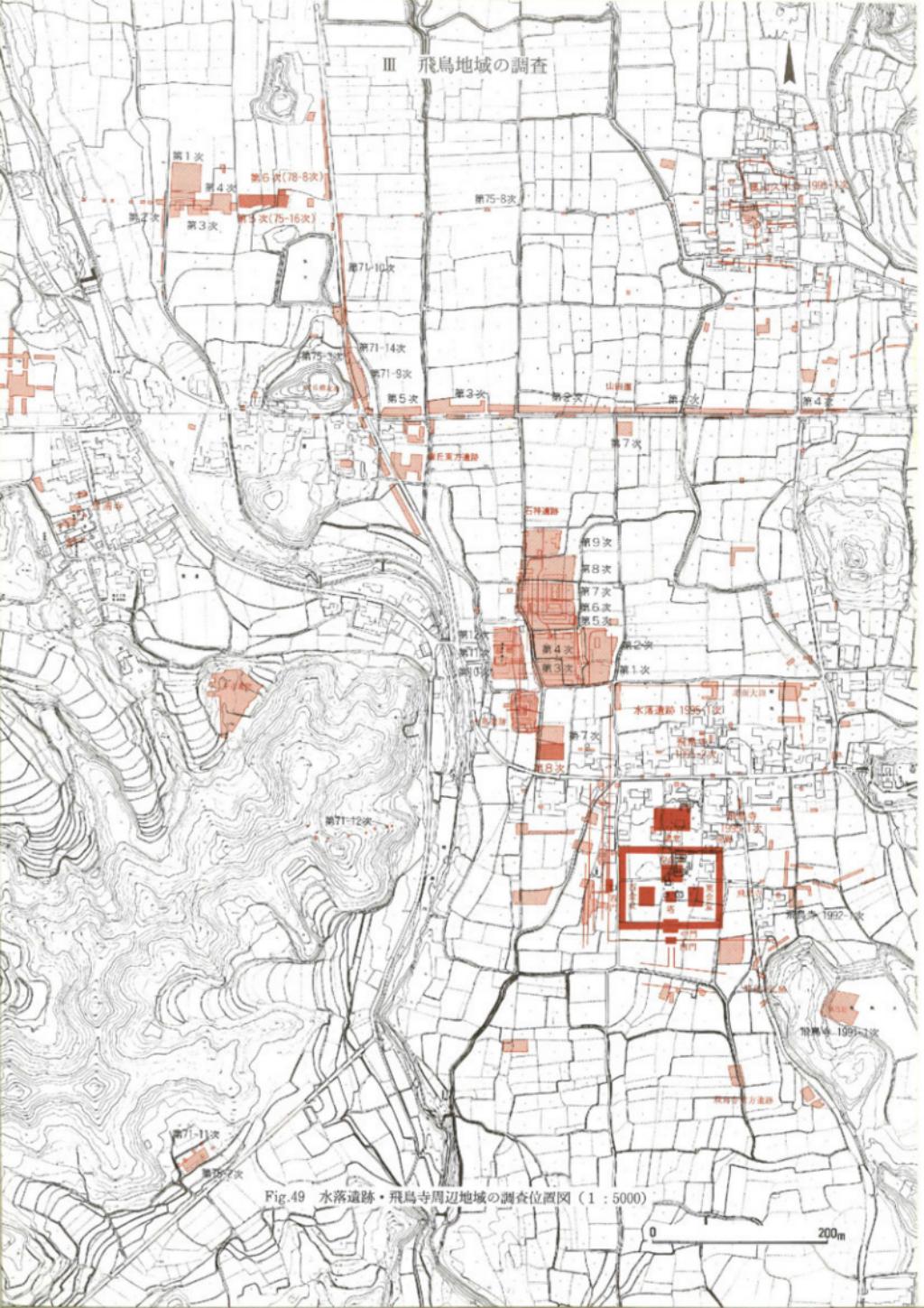


Fig.48 木薬師寺1994-3次調査III区および周辺の調査遺構図（1:200）

III 飛鳥地域の調査



1 水落遺跡第8次調査

(1995年7月～10月)

水落・石神両遺跡のこれまでの調査によって、史跡指定の漏刻台及び周開の関連遺構は飛鳥寺西方地区の西北隅に占地することが分っている。しかし、水落遺跡については、漏刻台と周開の関連遺構（以下、中心区画と呼ぶ）のみが解明されているにすぎず、中心区画と関連する施設や遺跡の範囲、飛鳥寺西方の遺跡との関係についてはほとんど知られていなかった。こうした情況を踏まえ、当調査部では水落遺跡の範囲と構造、飛鳥寺西方に広がる遺跡の構造と水落遺跡との関係を解明すべく、史跡指定地周辺部の調査を進めることになった。そして、1994年から3ヶ年の計画で史跡指定地の東南部の南北に長い一枚の水田（面積約1900m²）を調査対象とし、北側から調査に着手した。2年目に当たる第8次調査は、前年度の第7次調査区の南側部分、約510m²を対象に実施した。

前年の第7次調査区には、中心区画の東南隅部がかかり、以下に述べるような中心区画に関する新たな知見、中心区画周辺に関する情報をえた。

- ① まず中心区画について。水時計を格納する礎石建物、周囲の溝と建物、そしてこれら全体をカバーする掘込地業が、正方形を基準とする設計企画で造営されていること。東・北・西の岸には四隅に角楼をもつ龜状建物が配され、南には柱筋を揃えて独立した東西棟建物が建ち、全体としては中心建物を囲う配置構造をとること。
- ② 従前、水落遺跡の南限の堀と見されていた東西方向の柱穴列（S A 295）は、解ではなく、時期の異なる建物であること。また、南限・東限に関する遺構は検出されず、遺跡は更に調査区外に広がること。
- ③ 調査区内は、水時計に水を供給すると推測される大規模な石組斜行溝 S D 3410や木樋暗渠 S D 3370等の水路があるが、中心区画と関連する建物はなく、石敷広場になっていること。

層序と地勢

調査区の基本的な層序は、耕作土・二枚の床上・灰褐色砂質土・暗灰褐色粘質土・炭混り暗灰色粘質土・暗灰色・黄褐色砂質土・灰褐色砂疊層の順であり、第7次調査とかわりない。炭混り暗灰色粘質土は平安時代の遺物包含層であり、7世紀の遺構は、その下の旧河川敷堆積である暗灰色・黄褐色砂質上面で検出した。7世紀代の遺構面は東と南が高く、北西に向って下降する。平安時代の開発で大きく削平され、当初の面をとどめる所は少ないが、比較的残りのよい調査区北辺部では、約1度の傾斜をもつ。

遺構

検出した遺構には、7世紀代に属する石敷・石列・石組溝・木樋暗渠・池状遺構、平安時代の掘立柱塀・大小の土坑・素掘り溝、中世以降の耕作にともなう多数の素掘り溝等がある。

7世紀の遺構 平安時代の土坑や攪乱削平部分を除く、調査区のはば全面に石敷痕跡とみられる不整形な小さいくぼみが確認され、本来は全面石敷であったと考えられる。S X 3492は、そのなごりで第7次調査区南東部の石敷と一連のものとみられる。S X 3492の近辺にある石列 S X 3495は、比較的大きな石材を一段、ないし二段積み上げ、西の石敷とは段差を設けており、低い雑段状の石敷であった可能性を示唆する。北で東に偏する方位をもち、第7次調査検出の

木樋暗渠 S D 3370の上に残る石列の延長であるが、北側で検出の石列 S X 3390とは方位を異にし、石敷・石列にも時期差が認められるようである。

調査区東南部にある石敷列 S X 3485は、後述する石組斜行溝 S D 3490の南に設けられた石敷帶 S X 3489と直行する方位で、石列 S X 3495の方位と一致する。S X 3489より大きく平坦面をもつ石材を用い、S X 3489に喰い込む形で設置されているが、基盤となる黄褐色砂質土面に直接据えられている。一方、S X 3489は薄い整地を行った上に敷かれており、両者は同時併存するが仕事は前者が先である。残存長1.4m・幅約0.5m・S X 3495との間隔約3m。

石組斜行溝 S D 3490は調査区北辺を東南東から西北西に向って流れ、西で北に約5度偏する方位をもつ。南側に幅約0.8mの玉石の石敷帶 S X 3489をともなう。両側に巨大な花崗岩を立て、底には東半部では挙大から人頭大の礫を乱雜に、西半部では比較的丁寧にバラスを敷く。溝幅は内法約0.6m、南側の石敷帶 S X 3489の上面からの深さは0.1~0.2m。

S D 3490を壊す土坑の断面や断割調査の結果、底石は後の改修時に敷設されたものと判明した。当初の溝は幅約1.3m・深さ約0.3mの掘形を掘り、更に側石を据えるため両側を使用石材の大きさに応じて掘りくぼめている。当初の素掘り底の面には薄く砂が堆積するが、改修時にその上に暗茶褐色砂質土で約20cm程かさ上げを行い、その上に礫やバラスを敷いている。底石の透き間、それを覆う堆積土（暗灰褐色粘質土層）には10世紀中頃の土器類が含まれ、また、かさ上げ土からも1点ではあるが9世紀代とみられる黒色土器の杯B小片が出土しており、溝の改修時期は9世紀と考えられる。

S D 3490の南側に付設された石敷帶 S X 3489は南側に見切りをもつ。建物の雨落溝と犬走りの可能性を考え周囲を精査したが、これにともなう掘立柱建物・隙は検出していない。周囲の石敷がほとんど抜かれているのにこれだけが遺存するのは極めて不自然であり、この仕事も石組斜行溝の改修と同時に起こなわれた可能性が高い。

調査区東北隅の木樋暗渠 S D 3370は、第7次調査の検出の延長部で、木樋抜取穴が掘形と重複するが、上幅が約1.2m、下幅が0.5m・深さ0.8mの逆台形状の掘形をもつ。抜取穴からは、平安時代の土器、瓦片が出土している。木樋は、据付痕跡から幅0.4m程の材とみられ、掘形底面に約15cmのかさ上げした土の上に設置されていた。木樋の台石1個を検出したが、第7次調査検出の最寄りの台石との間隔は2.2m。

第7次調査検出の南北石組溝 S D 3400は、7世紀代では最も古い造構であるが、第8次調査区では後の遺構の造営や削平のため極めて残りが悪く、掘形、側石抜き取り痕跡を部分的に検出したにすぎない。

調査区西南部の石組溝 S D 3560は、側に2段に石を積み、内法幅1.2m・深さ0.1m。石組溝の延長部は平安時代の土坑で破壊され方位は定かでないが、後述する池状造構 S G 3480の西岸辺に側石据付痕らしき2条の溝を検出しており、これにつながるものと考えている。今の所、S G 3480の排水路とみておく。

池状造構 S G 3480は、調査区東南部に自然石を弧状に配した石列12個を長さ約3mにわたって検出した。石列は南側に面をそろえ、この石列の南1.7mから始まる浅い掘り込みがあり、更に南へと広がり、両者一体で池と考えている。弧状石列は旧河川堆積を約15cm掘り下げ、掘形よりやや内側に石を据え、北側背面に炭粒まじりの灰褐色砂質土を入れて固定し、更にその

上に薄く整地をおこなっているため掘形は見えない。石列の南側の一回り大きい掘り込みの北岸にある礫石は人工的配石ではなく、旧河川堆積の礫層に由来する。埋め土は小礫を混える茶褐色砂質土で飛鳥寺創建軒丸瓦片1点が出土した。この池状遺構の西端付近には巨石を落し込んだ土坑2基（SK 3512・3513）がある。石はこの池に使用されていた可能性が高い。



Fig. 50 水落遺跡第8次調査遺構図（1:200）

平安時代の遺構 素掘り溝・大小の土坑・掘立柱塀等がある。東辺の南北素掘り溝 S D 3360、中央西寄りの南北素掘り溝 S D 3420は、いずれも第7次調査で検出しており、その南延長部にあたる。S D 3360は幅0.6m・深さ5cm、石組斜行溝 S D 3490との交差部分では側石の上面を削って流路を確保する。S D 3420は幅1.0m・深さ5cmで、S D 3490との交差部では側石1~2石を抜き取って流路を確保するが、石敷帯 S X 3489は底石として生かしているようである。

溝としてはこの他、南北斜行細溝（S D 3525・3505・3515・3544・3564）を検出した。溝底はいずれも凹凸した面をなし、埋め土には黒色土器をはじめとする平安時代の土器片を含む。方位は、前述の7世紀の石列 S X 3495・石敷列 S X 3485と一致し、ほぼ3mの間隔で掘られていて、S X 3495・S X 3485などの石列・石敷列を抜き取った溝の可能性がある。

石組斜行溝 S D 3490の北に閉子状に並ぶ上坑 S K 3518・3519・3530・3540・3546・3550・3570・3571は、側石を抜き取るために掘られたもので、大量の礫を含む。南西辺の不整形土坑 S K 3520・3563・3573は、炭を大量に含む埋め土で平安時代中期の土器、瓦、礫を含む。前述の南北素掘り溝 S D 3420・南北斜行細溝 S D 3544を壊し、それより新しいが、次に述べる塀 S A 3555・建物 S B 3565より古く、柱掘形は埋め土を掘り込んでいる。

調査区中央東寄り石組斜行溝 S D 3490の南岸にある小土坑 S K 3510は径0.5m程の円形の掘形で、中には次に述べるような状態で土器が一括埋納されていた。底に須恵器の甕腹片を敷き、その上に丹波篠窯産の須恵器の鉢を正位の状態で据え、中に土師器小皿8枚以上、杯3点、餌盆片、黒色土器A類の大小の楕各2点を納め、それらの上に石を2個置いていた。土師器の杯・皿、黒色土器の楕は、完形品であるが、須恵器の鉢はもともと体部の一部を欠損したものを使っている。出土土器類は、天禄四（973）年焼亡した薬師寺西僧房の床面に残されていた土器類（『薬師寺発掘調査報告』pp.149~155、pp.256~267）と共通する。

調査区西南部には掘立柱建物 S B 3565と南北塀 S A 3555を検出した。S B 3565は、柱間寸法が2.1m（7尺）等間で2間分を検出ましたが、棟方向は不明である。建物とみたが、次に述べるS A 3555の南端の柱穴と柱筋が描い一体の塀の可能性もある。S A 3555は柱間が不揃いで、1.8~3.0m。4間分を検出ましたが、石組斜行溝 S D 3490の北には延びない。いずれの掘形にも平安中期の土器類を含み、平安時代の遺構のうちでは最も新しい遺構である。

中世以降の遺構 灰褐色砂質上面とその下層の暗灰褐色粘質土面の2面で中世の素掘り溝を多数検出した。現水田の南北畔の方向と一致する南北溝が多く、東西方向の溝はごく少ない。

遺 物

上器、瓦、金属製品、錢貨、石製品等がある。上器類が多く、弥生上器や古墳時代の土器も出土しているが、本来、基盤の旧河川堆積層に含まれていたものであり、後の遺構掘削時にそこから遊離したものである。池 S G 3480や土坑の底に現われた旧河川堆積（砂礫層）に含まれる土器類は6世紀後半代の時期である。おそらく、遺跡の性格の違いを反映してか、7世紀代の土器類は北に隣接する石神遺跡では大量に出土しているが、水落遺跡側では極めて小量しか出土していない。土器の大半は、再びこの地に開発の手が入った平安時代のものであり、9世紀後半代から10世紀後半代に属す（Fig.51）。土師器の食器・煮沸具が多く、黒色土器A・B類（楕）、須恵器（鉢・壺）、灰釉陶器（楕・皿）、綠釉陶器（楕・皿）、輸入磁器（青磁）も少量出土している。軒瓦は、創建期軒丸瓦1点と7世紀後半の軒丸瓦XIV型式1点がある。丸・

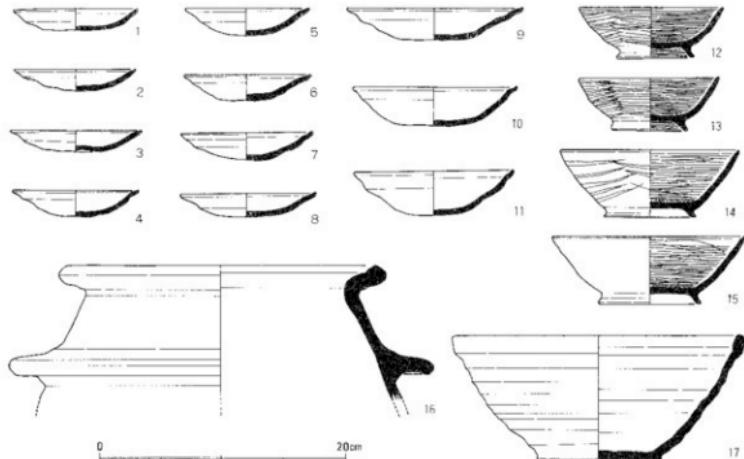


Fig.51 水落遺跡土坑S K3510出土土器（1：4）

平瓦は、丸瓦が300点(24kg)、平瓦が1,777点(68.8kg)出土した。量的には平瓦が丸瓦をしのぐ。丸・平瓦は奈良時代以降のものが多く、また三次的に火を受けたものが多い。

金属製品には、鐵鎌、鐵釘、不明鉄製品がある。鐵釘は比較的多が多が、平安時代以降のものである。錢貨は、床土から寛永通寶2枚、暗灰褐色粘質土から延喜通寶1枚が出土した。

石器には剥片刃器1点が旧河川堆積から出土した。他に剥片も少量出土している。

まとめ

今回の調査でも、水落遺跡の南及び東を画す施設は検出されず、遺跡は更に南と東に広がることが明らかになった。一方、新たに石組斜行溝S D3490、池状遺構S G3480、およびS G3480の余水を流す石組溝S D3560を検出した。二本の溝は、水落遺跡中心区画よりも古い南北石組溝S D3400（石神遺跡A-3期併行期）を壊して造られており、中心区画と同時期もしくはそれ以降の時期の所産と考えられる。また第7次調査でも中心区画と同時期と考えられる石組斜行溝S D3410・木樋暗渠S D3370を検出しているが、今回検出した溝と方位を異にし、調査区外でお互いに重複する関係にある。前述の遺構には年代決定できる遺物が乏しく、これらの遺構の先後関係は今後の調査にゆだねなければならない。池状遺構S G3480も調査区の南に広がり、その性格付けについては次年度の調査を待たねばならないが、以下に記す、『日本書紀』にみえる須彌山の造営に係る施設の可能性があり注目される。

〈飛鳥寺西方広場における須彌山関連記事〉

- | | |
|-----------------|---|
| 齊明天皇三年（657）七月辛丑 | 飛鳥寺西に須彌山像を作り、旦に盂蘭盆会を行ない、暮に般舟遍人を饗す。 |
| 齊明天皇五年（659）三月甲午 | 甘樺丘東の川上に須彌山を造り、陸奥と越の蝦夷を饗す。 |
| 齊明天皇六年（660）五月 | 中大兄皇子が初めて漏刻を造る。また、石上池辺に須彌山を作り、肅慎47人を饗す。 |

2 飛鳥寺の調査

A 1995-1次調査

(1995年7月)

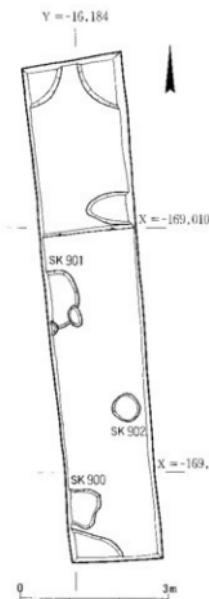
この調査は住宅改築にともなう事前調査としておこなった。調査地は、飛鳥寺講堂の東北約50mの地点で、調査面積は21m²である。

調査区の層序は、上から表土・褐色砂質土・灰色粘質土・褐色粘質土で、地表下約1mの深さで河川堆積層の疊層を確認した。遺構は主に、地表下約0.6mの灰色粘質土層の上面で検出した。土坑3基などがある。

土坑SK900は径約0.7m、近世の上坑に大半を壊されわずかに底部を残すだけであった。土坑SK901は径約1mあり、SK900と同じ暗灰色粘質土を埋め土とする。7世紀代の土器を含む。この2つの穴は互いによく似ており、一連の建物あるいは扉の柱穴になる可能性も考えられるが、調査区の制約もあって追求できなかった。土坑SK902は径約0.6mの穴である。遺物は出土しなかった。

遺物は、土器・土製品、瓦類がある。瓦は、丸・平瓦（総計約400点・59kg）のほか、飛鳥寺Ⅲ型式の軒丸瓦が3点出土した。土製品には土鍤形土製品がある。

遺構検出面の灰色粘質土層は、黄灰色微砂（花崗岩風化土）が混じるので、整地土層と考えられる。灰色粘質土は中世の遺物を含まないが、これが7世紀まで遡る整地土層であるかの判断は、今後の周辺の調査を待ちたい。



B 1995-2次調査

(1995年7月)

この調査も住宅改築にともなう事前調査としておこなった。調査地は、飛鳥寺講堂の北方約90mの地点で、調査面積は10m²である。

東西溝SD910を検出した。SD910は溝底で幅約1.5mあり、北岸に護岸列石SX911・SX912がある。溝内の堆積土から、羽釜・スリ鉢が出土した。溝を覆う灰色粘土層から室町時代後期（16世紀）の瓦質土器が出土したので、その頃には埋没したのであろう。

瓦は、丸・平瓦（総計約300点・33.6kg）のほか、飛鳥寺Ⅲ型式とXIV型式の軒丸瓦が各々1点ずつ出土した。

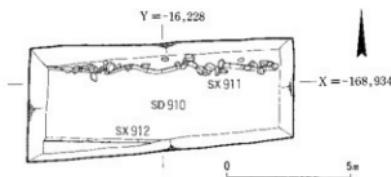


Fig.52 飛鳥寺1995-1次調査遺構図 (1 : 100)

Fig.53 飛鳥寺1995-2次調査遺構図 (1 : 200)

3 奥山久米寺の調査（1995-1次）

（1995年9月～11月）

この調査は、明日香村奥山集落内での公共下水道本管埋設にともなう事前調査である。

奥山久米寺（奥山廃寺）についてはこれまでに、塔（1987年『概報18』）、金堂（1987年『概報18』、1989年『概報20』）、西面回廊（1973・74年『概報3』、1992年『概報24』）などが調査され、その結果、7世紀前半に造営された四天王寺式伽藍配置の古代寺院であることが推測できるに至っている。今回の調査は幅の狭いトレンチ調査ではあるが、調査が奥山久米寺跡の中心伽藍各所に及ぶため、これまで明らかでなかった、講堂や東面回廊などについての成果が期待された。調査総面積は298m²である。

遺構

I・II区 金堂跡北側の南北方向の調査区（I区）と東西方向の調査区（II区）である。

I・II区の交点付近を中心として、金堂の掘り込み地業を検出し、地業の北・東・西の端を確認した。金堂掘り込み地業は古墳時代の包含層である褐色土から掘り込まれており、1989-1次調査の成果と合わせると、その規模は、東西22.9m・南北19.1mである。版築層は残りの良い所で厚さ70cm残っていた。版築は厚さ8cmほどの層を12層識別できたが、これらは3層に大別できる。明橙色系土を地業底に置くことなどは前回の調査成果とも一致し、かなり丁寧な仕事である。版築層には土器小片を含むが、時期のわかるものはなかった。

1989-1次調査で発掘した金堂基壇の基盤高と比較すると、II区の東では基壇土が残っている部分もある。しかし、基壇外装や基壇周囲の化粧は全く残っていないかった。

I区ではほかに、金堂地業と同様に褐色土から掘り込む東西溝S D325、中世以降の土坑SK326・328・329がある。S D325は、幅0.4m・深さ0.2mの素掘り溝で、7世紀代の土器と瓦が出土した。S X327は抜き取り穴をもつ柱穴である。柱穴の直径0.8m、検出面からの深さは0.7mである。抜き取り穴から7世紀代の土器が出土した。



Fig.54 奥山久米寺1995-1次調査位置図および四天王寺（左）・山田寺（右）との比較図（1:2000）

土坑 S K326は径 4 m 以上の土坑。中世の遺物を含み、瓦片や礫が大量に出土した。

II区では、掘り込み地堀以外には、中世の土坑 S K330や近世の土坑 S K331・332あるいは土坑群 S X333などを検出したにとどまった。東面・西面の回廊の想定位置を横断するが、回廊は近世以降の削平によって失われ、検出できなかった。

III区

塔跡の東方に設定した東西に長い調査区である。調査区西端に池状造構 S X335がある。東肩の一部を確認ただけで、全体の形や大きさは明らかでない。底面は、西に向かって緩く下がり、最も低い部分で深さ約 1 m ある。底面には拳大から人頭大の礫が敷かれ、その上に多量の瓦片や黒色土器を含む堆積層がある。黒色土器の年代からみて、平安時代初め（9世紀）に埋没したようだ。この他、近世以降の土坑や溝を検出した。

IV区

東面回廊北端推定地から講堂推定地の北側にかけての調査区である。東面回廊と北面東回廊推定地は近世以降の土坑や削平のため、その痕跡は見いだせなかったが、講堂推定地に隣接して講堂所用礎石をみつけた。

礎石落とし込み穴 S X341は、講堂推定地の北東隅に位置する。東西 1.7 m ・南北 1.6 m 以上ある南北に長い楕円形の穴で、検出面からの深さは約 1 m である。花崗岩製の礎石 2 個が落とし込まれていた。南側の礎石（礎石 A）は、柱座を上に向け、東に傾斜して出土した。北側で出土した礎石（礎石 B）は、柱座を下にして埋まっていた。礎石 B は、その大半が調査区外にあるため、引き上げられなかった。礎石 A より小型である。

この他、調査区の各所で中世以降の溝や土坑を検出した。講堂に直接関わる造構はみつからず、調査区内では後世に搅乱破壊されたのであろう。また、調査区の西端では、古墳時代の包含層・暗黄褐色土を切り込む土坑を検出した。埋め土には瓦を含まない。飛鳥 I～II の土師器と須恵器が出上した。土坑と暗黄褐色土の上には暗褐色土混じり黄色砂質土がのる。この層は、講堂の基壇や整地に関わると思われたが、限られた調査区では確定できなかった。北面西回廊の痕跡も確認できなかった。

V区

南面回廊・中門推定地の南側の調査区である。造構は主に寺造営の際の整地土である黄褐色土混じり茶褐色土ないし茶褐色粘土の上面で検出した。調査区の東側約 45 m 分では、地山または弥生時代包含層の上に整地土がのるのに対し、それから西方では、地山と整地土との間に飛鳥 I の土器を含む包含層がある。造構は、主に整地土上面で検出した。

調査区の東部でほぼ方位にのる東西溝を、西端でやはり方位にのった南から北に向かって落ちる段差を検出した。また、中門推定地のほぼ正面で、径 1.5 m ほどの大型の柱穴を検出した。深さ 0.6 m 以上、輔竿などの柱穴であろうか。

上坑 S K360は、東西 2.3 m ・南北 0.6 m 以上・深さ 0.3 m の土坑。埋め土は上下 2 層あり、下層の暗褐色砂質土層には、多量の炭とともに焼土・銅洋・鑄型片などが含まれる。土坑の底面には、火熱を受けて紫色に変色した粘土が残っていた。上層の黄白茶色粘土は、埋め立ての土であろう。

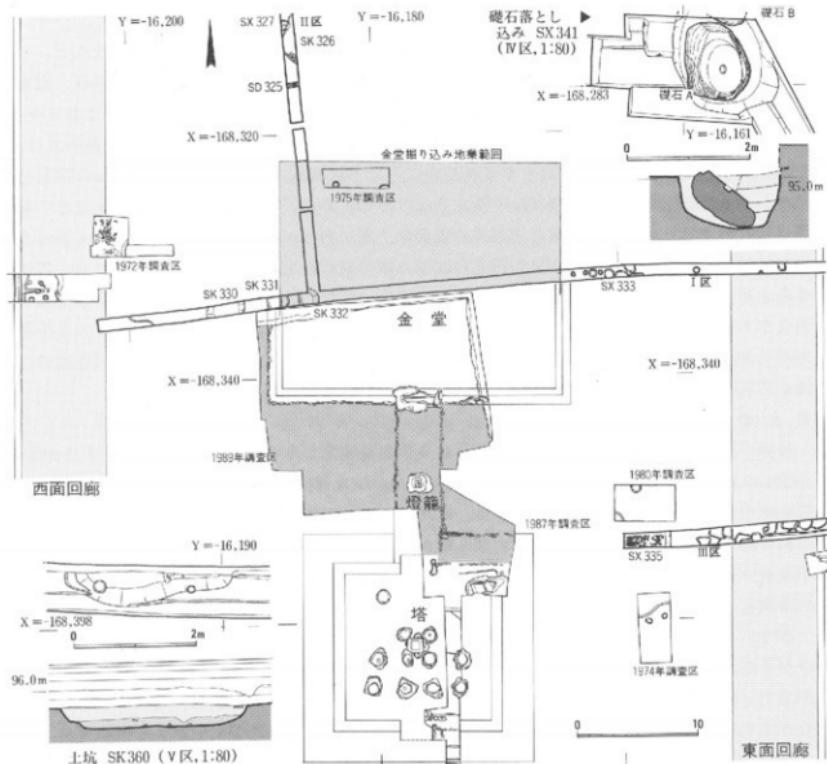


Fig.55 奥山久米寺1995-1次調査造構図 (1:400)

遺物

瓦は、丸瓦が1332点（173kg）、平瓦が4479点（467kg）出土。V区から、完形に近い竹状模骨丸瓦が出土した (Fig.56)。全長39.1cm・広端復原径17cm・狹端径11.5cm。凹面に2条の紐の圧痕がある。軒瓦は、軒丸瓦9点と軒平瓦6点がある。内訳は、軒丸瓦はII 4点 (C 1点・D 1点)・IV C 1点・VII A 1点・X 2点 (C 1点)、軒平瓦はI・II B・III Bが各1点である。



Fig.56 竹状模骨丸瓦 (1:6)

る（型式番号は『概報18・20』参照）。

土器は、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦器・染付などが出土した。

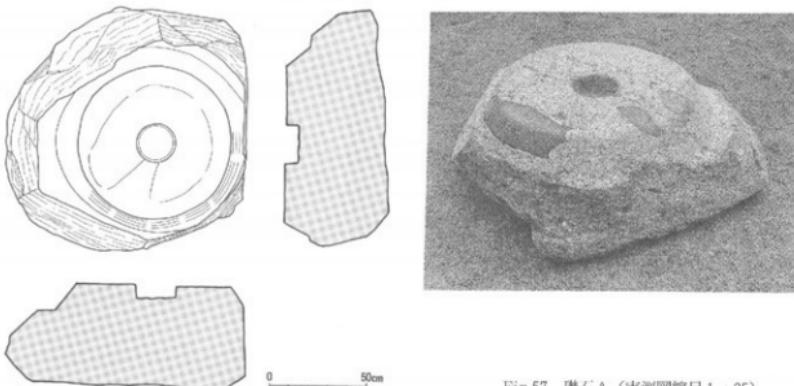
土製品には、鋳型と坩堝がある。V区の上坑S K360出土。鋳型は大小の破片が178点、坩堝は破片8点がある。銅塊や銅滓をともなっているので、銅製品の鋳造に関連するのであろう。

花崗岩製礎石がIV区S X 341から2点出土し、うち1点（礎石A）を取り上げた。礎石Aは、直径1.2m、厚さ0.5m、中心からややすれたところに下径96cm・上径78cm・高さ12cmの円形柱座をつくる。柱座の中央には径20cm・深さ7cmの円孔がある。柱座の上面の直径60cmほどの範囲は敲打痕が残るが、その外側と円柱座の側面は丁寧に磨きが施される。敲打痕の残る部分が柱径に対応するのであろう。中央の円孔の底面は粗い敲打痕がそのまま残る。礎石Bは、復原すると柱座の下径80cm・上径66cm・高さ8cmとなり、やや小型である。やはり柱座の中央には円孔がある。円孔の直径18cm・深さ11cmで、礎石Aと大きな違いはない。円柱座の大きさを積極的に評価すれば、礎石Aは身舎用、礎石Bは庇用とみることもできよう。なお、円柱座の上面に円孔を穿つ礎石の類例は、川原寺推定西金堂礎石や法隆寺食堂礎石がある。

まとめ

今回の調査の最大の成果は、金堂の掘り込み地業を確認しその規模を確定できたことである。1989年の調査で金堂基壇の東西幅は23.4m（80尺）がほぼ確実となった。この規模は、川原寺中金堂の基壇推定東西幅24mに匹敵する。南北幅については約18m（60尺）と推定していたが、今回の調査によって、掘り込み地業の南北幅が19.1mと判明したので、基壇の南北幅も川原寺中金堂の19.2m（64尺）とほとんど同じと推定してよいだろう。これによって、飛鳥時代寺院の金堂としては、第一級の規模をもつことが再度確認できた。

さらに、講堂推定地に隣接して、礎石を発見した。これまで、講堂については地割り痕跡だけが手がかりだったが、この推定をはじめて裏付けることができた。周辺の民家の石垣には今回出土したものと同様の礎石断片があること、IV区から北は地形が一段低くなることからも、これまでの推定通り第IV調査区の南側に講堂を想定し、四天王寺式伽藍配置とみることは、さらに妥当性を増したであろう（Fig.54）。



4 坂田寺の調査（1995—1次調査）

(1995年11月～12月)

本調査は、明日香村祝戸地区の下水道敷設にともなう事前調査として実施した。調査地は、建設省国営公園の建設にともなう第1次・第2次調査区(『概報3・5』)の中間である。現在の道路敷中央を、1~1.3m幅で長さ約45mにわたって調査した。調査面積は58m²である。

坂田寺は、『扶桑略記』によれば、繼体十六（522）年に渡來した司馬達止の高市郡坂田原の草堂に由来するといい（欽明十三（552）年十月十三日条）、また『日本書紀』用明天皇二（587）年四月二日条に、鞍部多須奈が丈六像と寺を發願した記事、推古十四（606）年五月五日条には、鞍作鳥が金剛寺（坂田尼寺）を作る記事がある。出土瓦からも坂田寺が7世紀の初期には造営されたことは推測できるが、創建の伽藍は未発見である。これまでに判明しているのは、西面する奈良時代の礎石建ち仏堂と回廊（『概報11・21・22』）である。回廊は南面回廊と東面回廊の一部が発掘され、一辺58mほどの正方形に巡ることが推定されている。その場合、第2次調査南区（『概報5』）で検出した東西方向の石垣S X 120は北面回廊の外側、仏堂と回廊がのる平坦面北側の石垣と推測され、また、第8次調査（『概報23』）で検出した南北方向の石垣S X 223は、この平坦面西側の石垣と考えられる。今回の調査区は、これらの調査区に隣接し、関連する遺構の発見が予想された。

遺 構

検出した主要な遺構は、石垣S X 120および、これと平行する東西方向の石垣S X 230・S X 231、石列S X 232である。

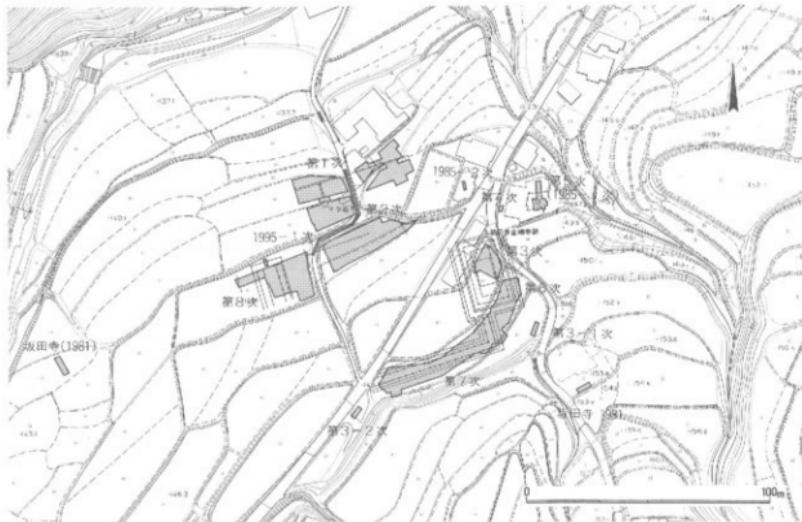


Fig.58 坂田寺調査位置図（1：1500）

石垣 S X 120は、第2次調査南区で検出したものの西延長部を一部検出した。人頭大から一抱えほどある花崗岩玉石を積み上げる。

石垣 S X 230は、長さ1m以上の花崗岩巨石を並べた石垣である。5石を確認したが、どれもほぼ直方体に近い形である。S X 230の西は調査区外となり、また、東は後世の土坑S K 236によって壊されていた。東には同様の巨石を並べる石垣S X 231があるが、S X 231はS X 230の東延長線よりは北に張り出すことと、西端の石が南北方向に使われていることからすると、S X 230はS X 231の西まで直線的に延びてきて、そこから鍵形につながるものと推測する。S X 231も東を土坑S K 238に壊される。

石列S X 232は、S X 120の北1.5mほどのところにある。径50cmほどの花崗岩自然石を並べ、南側に面を揃えるので、S X 120北側の石組み溝側右の可能性がある。

調査区北部では、花崗岩風化土の整地土層を確認したが、その上面では顕著な遺構を検出しなかった。また、第1次調査東区で検出した掘立柱東西塀S A 060(『概報3』)の西延長部を確認しようとしたが、この部分には国営公園建設時に排水用のヒューム管が埋設されていて、遺構は完全に破壊されていた。

遺物

大量の瓦のほか、土器(須恵器・土師器)、金属製品、凝灰岩切石断片などが出土した。瓦類は、丸・平瓦、軒瓦、埠が出土。軒瓦は軒丸瓦19点と軒平瓦7点が出土した(Tab. 6)。軒丸瓦では21型式が9点(A 7点・B 2点)と最も多い。軒平瓦152型式Aは、今回初めて出土した(Fig. 59)。瓦当面に正格子叩き目を押した軒平瓦である。桶巻作りで、頸は段頸である。平瓦部凸面と頸面をヨコナデ調整するが、頸面には繩叩き目が残っており、成形時の叩き板と瓦当面の叩き板とが違っている。丸瓦は1,298点(216.8kg)・平瓦は3,913点(705.4kg)出土した。他に、鶴尾片3点と熨斗瓦1点がある。

そのほか、鉄滓(楕形滓)1点と用途不明の銅製品1点が出土した。

まとめ

狭い調査区ではあったが、奈良時代の坂田寺に関わる遺構を確認できた。坂田寺は傾斜地に立地するため、伽藍地の各所に堂塔をのせるためには、平坦面を造成する必要があった。今回、奈良時代の中枢伽藍と思われる部分の北側を調査し、その斜面部に設けられた石垣S X 120、S X 230とS X 231を検出した。これらの石垣は奈良時代の整地土の土留めの役割をもっていたものと推測される。S X 230とS X 231はともに裏込め土に瓦を含み、特にS X 120とS X 230の間には瓦が面をなして堆積していた。この状況は第2次調査南区でも、奈良時代の整地土の下で確認されており、今回の調査地の南側に7世紀代の瓦葺き建物が存在したことを示唆する。奈良時代以前の坂田寺伽藍の解明は、今後の大きな調査課題である。

Tab. 6 出土軒瓦点数表

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数
1D	1	104A	1
6B	2	122A	1
7A	1	125A	3
8A	8	124A	1
11A	1	152A	1
21A	7		
21B	2		
31A	2		
計	19		7
合計			26点

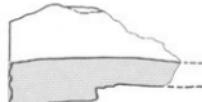


Fig. 59 軒平瓦152型式A (1 : 4)

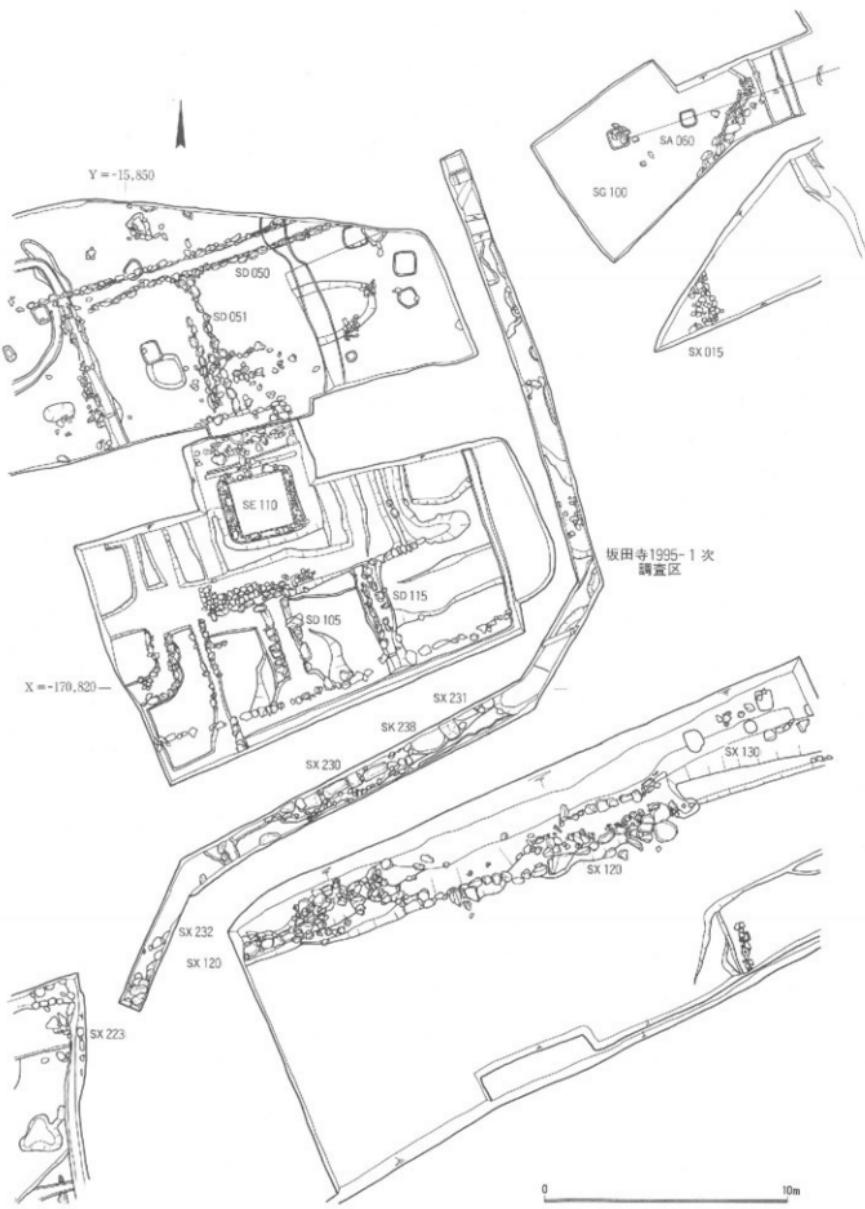
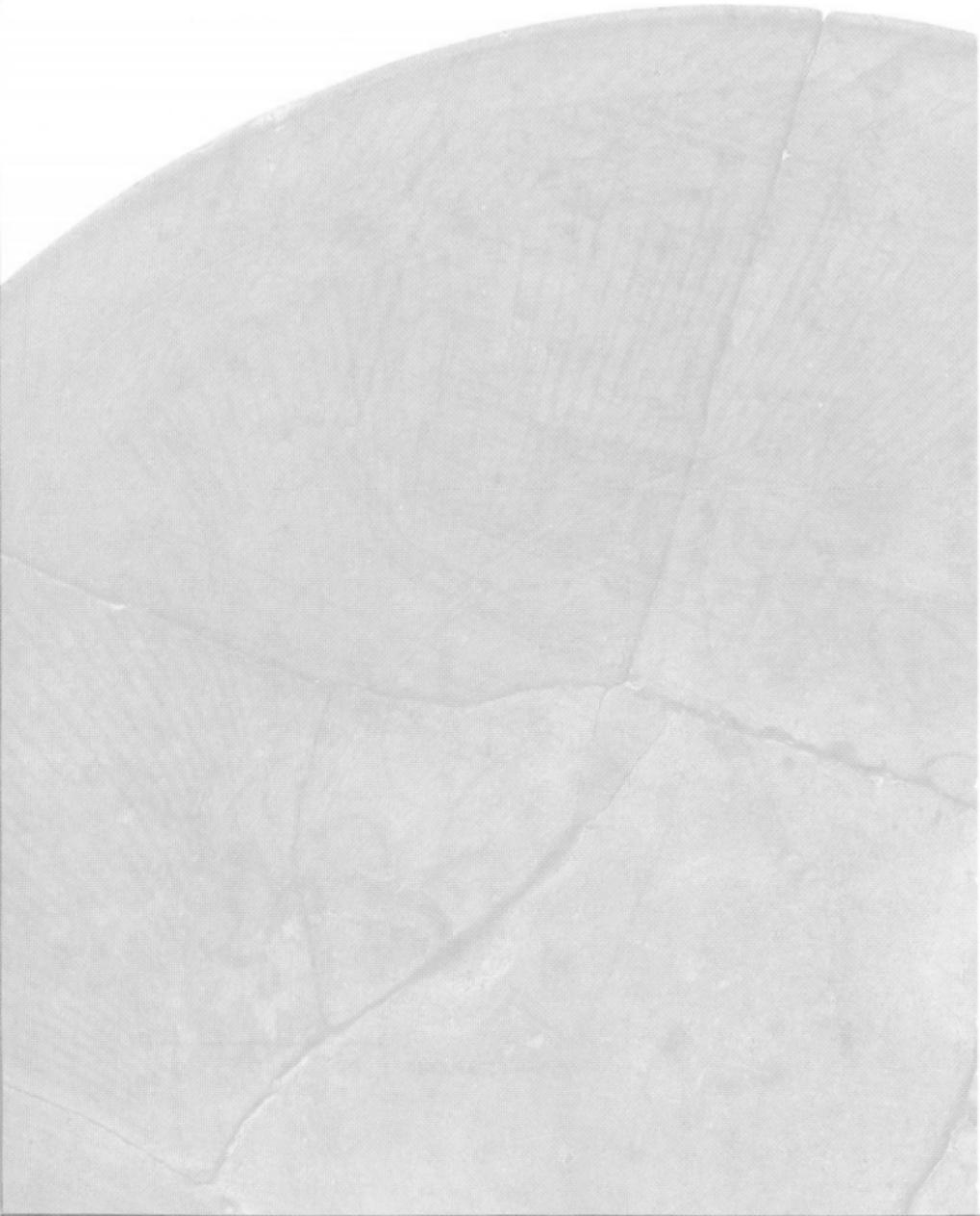


Fig.60 板田寺1995-1次調査遺構図 (1 : 200)

IV 発掘余録



1 有徳の僧か經典か——雷丘北方遺跡の墨書瓦

雷丘北方遺跡からは、藤原京内としてはかなり多量の瓦が出土する。その瓦は大きく二つの様相、凸面布目平瓦と行基丸瓦の組み合わせと、粘土紐巻き付け技法の繩叩き平瓦と玉縁丸瓦の組み合わせ、に分かれる。後者は、この遺跡の東にある大官大寺の所用瓦で、大官大寺式軒瓦も多数出土する。一方、前者には四重弧紋軒平瓦がともなう。軒丸瓦は、これまでに、素紋縁の川原寺式軒丸瓦（川原寺601型式E）と重闊紋縁の鬼面紋軒丸瓦が1点づつ出土した。

ここで取り上げる瓦は、雷丘北方遺跡第2次調査（藤原宮第66—13次調査）において、遺跡の中心施設の南を限る東西大溝S D 2740から出土した墨書瓦である。『概報22』にその釈文を示したが、今回、これをやや詳しく報告しようと思う。

瓦の特徴 いわゆる凸面布目平瓦である。凸面の布目痕と模骨側板圧痕を一部スリ消し、凹面は丁寧にナデ調整する。側縁はV字形にケズリ整えている。

釈文 「〔供カ〕

□

〔賢護カ〕
観智□□是□」

瓦の年代と近接する時期の人物として、「観智」なる僧が知られる。『日本書紀』に、持統三(689)年四月二十日新羅使金道那とともに明聽らと帰朝、同年六月二十日に新羅の師友に送るための綿各140斤を賜った、とあるほか、『七大寺年表』には、慶雲四(707)年に維摩講師、和銅五(712)年に律師、靈龜二(716)年入滅か、とある。

しかしながら、文字の続きからみて、この瓦に書かれてあるのは人物名ではなく、仏教用語としての「観智」「賢護」の二語が連続しているとみた方が良いのではないかろうか。ただし、この文章に該当する仏典等は未だ見出していない。

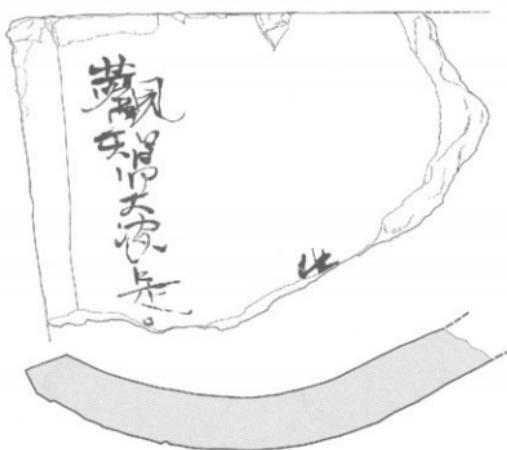


Fig.61 雷丘北方遺跡出土墨書瓦（実測図縮尺1：2）

2 藤原京出土銅製人形の一例

ここに紹介する銅製人形は、1975年の藤原宮第17次調査時に井戸から出土したものであるが、当該年の概報作成時に遺物リストからもれ、その報告の機会を失ったものである。

第17次調査地は藤原宮朱雀門の南200mに位置し、藤原宮の瓦を焼いた日高山瓦窯に北接した右京七条一坊にあたる。調査では条坊側溝や南北堀、井戸、鋳造関係遺構を検出している。

人形を出土したS E 1850は、内法0.8×0.9mの相欠き仕口横板組の井戸枠をもつ深さ1.5mの井戸である。埋め土の上層には多量の藤原宮式の瓦が堆積し、下層から土器、軸羽口、木簡とともに件の人形が出土した。瓦類は南接する日高山瓦窯の製品である。伴出した9点の木簡の中には、和銅二年（709）四月の年紀をもつ丹波国加佐郡白薬里からの大賛付札があり、遺跡の性格と井戸の廃絶年代の一端を窺うことができる。

人形は、銅材を叩いて厚さ0.7～1.1mm、幅1.1cm前後の短冊形に展延し、下端をタガネで切って二股に分れた足を表現する。体部中程には手をタガネでハ字状に刻み、頭部にも目鼻とみられる十字の刻線とハ字状の刻線がみられる。最上部のハ字状刻線は、類例がなく判然としないが、頭髪もしくはかぶりものの表現であろうか。また背面中央に数度の刺突痕があり、後頭部も刺突の繰り返しによって「く」字状に窪むなど、呪詛もしくは病氣治癒のための刺傷行為に用いられた可能性がある。脚端部は腐蝕が進み、左足の大半を欠失。頭頂部も壘部を折損する。現存長4.6cm。重量3.16g。

伴出土器には上師器杯A・C、皿A（2）、鍋、甕、須恵器杯A I（3）・B、平瓶、長頸瓶（4・5）のほか、円面鏡や壺体部・杯Aの転用鏡などがあり、飛鳥Vに位置づけられる。井戸の掘形に含まれる土器は土師器杯C III（1）、蓋、鍋、須恵器漆小壺などがあって、井戸の掘削が飛鳥III～IVの時期に行われたことがわかる。

飛鳥藤原地域における藤原宮期の銅製人形は、近年出土例が増加し、飛鳥池遺跡、藤原京右京五条四坊および同六条四坊の下ツ道東側溝、右京十一條四坊の十一條条間路に沿う東西大溝、右京六条五坊の井戸など、本例を含めると6地点8例を数える。それらは銅薄板を鉄で木製人形に近い形状に切るものと通有であるが、本例は頸部、胸部と脚部を分ける側面の切込みがなく、タガネで細部を表現するなど、奈良時代の鉄製人形の形状に近い点が注目される。

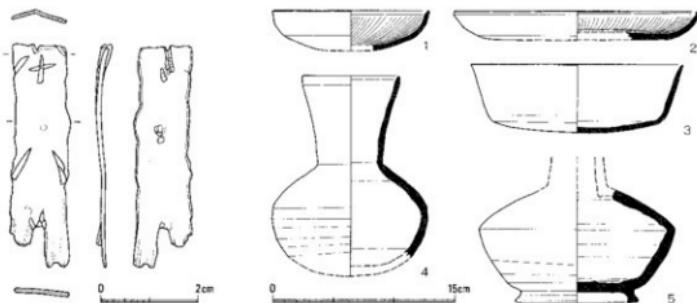


Fig.62 井戸S E 1850出土銅製人形（実大）・土器（1；掘形、2～5；井戸枠内、1：4）



1 第78次調査区全貌（南東から）



2 先行条坊四条々間路（東から）



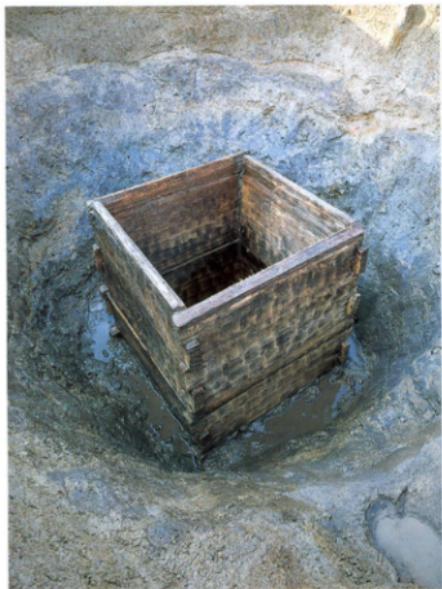
1 第79次調査場 S A8430と井戸（南から）



2 四分遺跡外濠 S D8436（第79次調査：南東から）



1 第80次調査区全景（東から）



2 第80次調査井戸 S E 8470（南東から）



3 四分遺跡木道 S X 8495（第80次調査下層：北から）



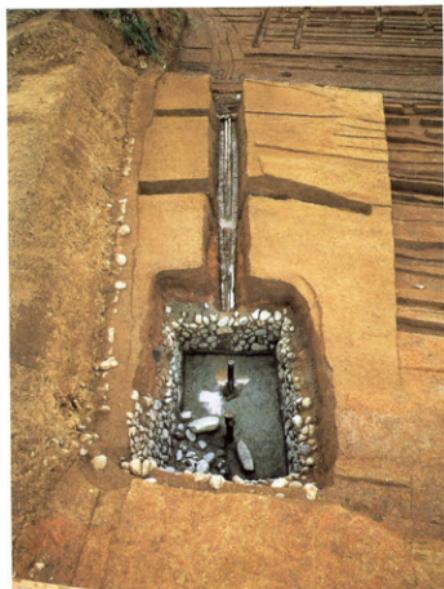
1 第78-1次調査区全景（東から）



2 第77次調査区全景（北西から）



1 第78-16次（雷丘北方遺跡第5次）調査区全景（東から）



2 第75-16次調査貯水施設S X 3615（東から）



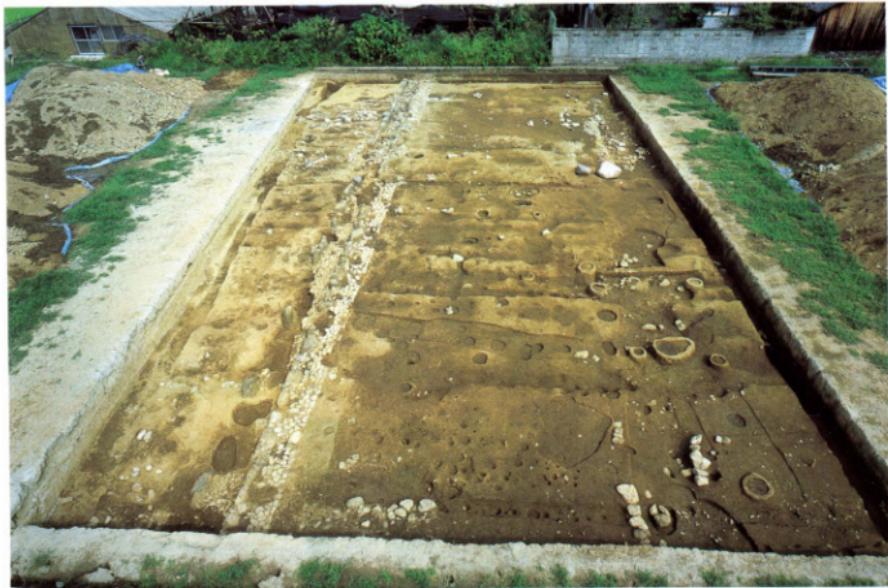
3 第75-15次調査区北半部（東から）



1 本薬師寺1994-2次調査区全景(北西から)



2 下層造構と参道(本薬師寺1994-2次:南東から)



1 水落道跡第8次調査区全景（西から）



2 石組斜行溝S D3490と石敷帯S X3489（水落道跡第8次調査：西から）



1 奥山久米寺講堂の礎石出土状況



2 坂田寺1995-1次調査石組 S X230
(南西から)



ホラホラ、これが骨の骨だ。
生きてみた時の苦労にみちた、
あのけがらはしい肉を破って、
しらじらと雨に洗はれ、
又々と出た、骨の尖。

それは光沢もない、
ただいたづらにしらじらと、
雨を吸収する、
風に吹かれる、
幾分空を仄鳴する。

生きてみた時に、
これが食堂の雑誌の中に、
坐ってみたこともある、
みつぼのあひだしを食ったこともある、
と思へばなんとも可笑しい。

(中原中也「骨」「左りし日の歌」より。
カットは第80次調査出土人骨)

PRELIMINARY REPORTS
OF EXCAVATIONS
AT THE ASUKA FUJIWARA PALACE SITES
NO. 26

Table of contents

	Page
List of archaeological excavations conducted by the Division of the Asuka and Fujiwara Palace Site Investigations in 1995 and their locations.....	2
Chapter I : Excavations at the Fujiwara Palace site.....	4
1 Govermental office compound on the east of imperial domicile and in the northern part of eastern quarter (78th & 78-7th excavations of the palace and capital site investigations) [PL.1]	5
2 Govermental office compound in the southern part of eastern quarter	
A. 78-1st excavation [PL.4-1]	17
B. 78-5th excavation	18
3 Govermental office compound in the northern part of western quarter	
A. 75-14th excavation	19
B. 78-4th excavation	19
4 Govermental office compound in the southern part of western quarter	
A. Upper features [PL.2-1, 3-1, 2]	22
B. Lower features (SHIBU site) [PL.2-2, 3-3]	34
5 Govermental office compound in the south-western quarter	
A. 77th excavation [PL.4-2]	41
B. 75-18th excavation	43
Chapter II : Excavations at sites in the Fujiwara Capital area	44
1 Fourth block on the eighth street, eastern sector of the Capital (Nikkōji Buddhist temple)	
A. 75-17th excavation	45
B. 78-3rd excavation	46
2 Third block on the eleventh street, eastern sector (75-16th & 78-8th excavations) [PL.5-1, 2].....	47
3 Second block on the second street, western sector (78-6th)	57
4 First block on the seventh street, western sector	
A. 75-15th [PL.5-3]	58
B. 78-2nd	61
5 Motoyakushi-ji Buddhist temple (Third block on the eighth street, western sector)	
A. 1994-2nd [PL.6]	62
B. 1994-3rd	75
Chapter III : Excavations in the Asuka Area	76
1 Mizuochi Site (8th excavation) [PL.7]	77
2 Asuka-dera Buddhist temple	
A. 1995-1st	82
B. 1995-2nd	82
3 Okuyama-Kumō-dera Buddhist temple 1995-1st [PL.8-1]	83
4 Sakata-dera Buddhist temple 1995-1st [PL.8-2]	87
Chapter IV : Field Note	90
1 Roof tile with Inscriptions at Northern foot of Ikazuchi Hill	91
2 Man-shaped Copper Figurine in the Fujiwara Capital site	92

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
May, 1996